

演劇会議

- 発言「二つの二十代を想う」……………猿 渡 公 一…1
- 演劇で戦争をどう伝えるか……………栗 原 省…2
- 「作家の集い」（東会議）……………栗 木 英 章…7
- たった一つの決議—東会議・作家会議……………大 峰 順 二…10
- 作家会議に出席して……………中 村 和 光…11
- ブロックの頁
- 《中国ブロック》劇団に来るのが楽しみなぞ……………下 村 清 一…12
- 劇 団 通 信……………19
- 東会議・総会を終えて……………石 垣 政 裕…31
- “黒さんを偲ぶ会”から……………城 谷 護…35
- お礼の言葉に代えて……………黒 川 シヅエ…37
- 英国観劇雑感……………平 田 康…38
- ブレヒト生誕90周年祭（東ドイツ）……………堀 江ひろゆき…44
- 劇 評
- 「国語元年」（名古屋演集）……………栗 木 慶 子…46
- 第12回・大阪春の演劇まつり……………今 泉 おさむ…47
- 中部B・1988年3月～6月の上演から……………丸 子 礼 二…51
- 観劇雑感……………萩 坂 桃 彦…54
- 戯 曲
- 「あゝウェディングドレス」……………和 田 葉 子…60

燃える、手づくりの祭典

“全日本演劇フェスティバル’88 イン・サッポロ、
に集ろう！

と き 1988年8月5日（金）6日（土）7日（日）
ところ 札幌市教育文化会館 大・小ホール
参加費 ¥12,000（宿泊・交流会費共）

上 演 劇団さっぽろ・劇団函館創芸・劇団河童・
劇団大阪・劇団湖・劇団支木・世仁下乃一座・
札幌ブロック合同。

交流会 札幌芸術の森にて。ジンギスカン鍋・飲み放題
食べ放題。北海民謡・大鼓・踊り等盛り沢山。

パネル・ディスカッション
「北海道と文化」

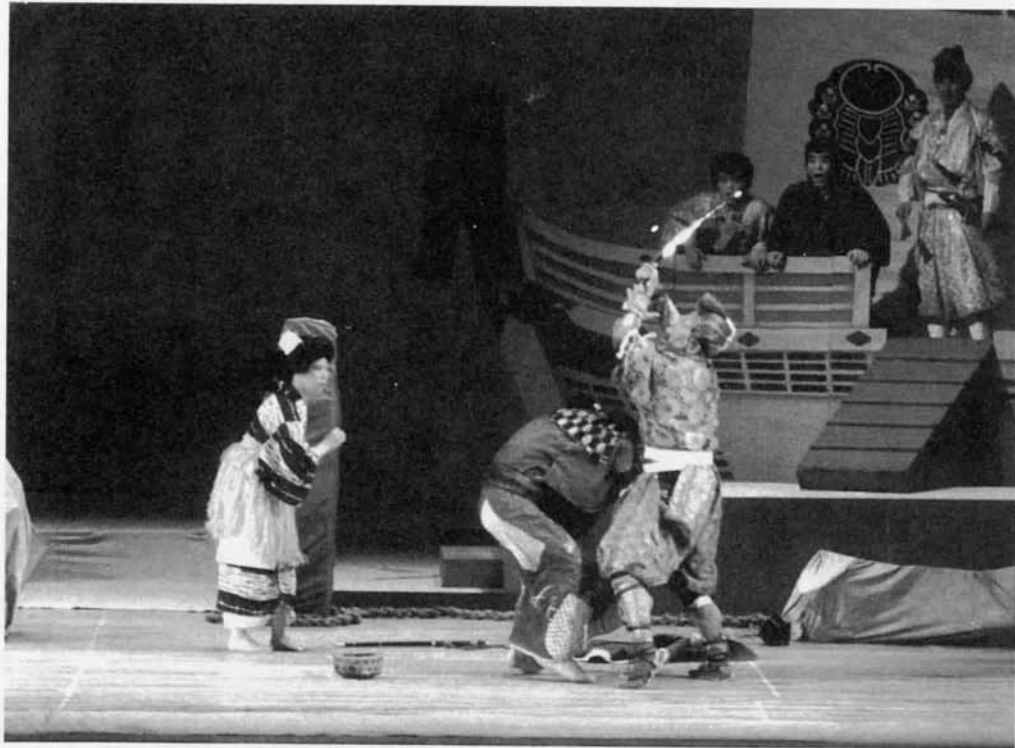
藤本義一・ふじたあさや・竹岡和男の各氏。

・6月30日の集約で東会議210名、西会議55名、道演集
73名ですが、まだまだ増えそうで、事務局は嬉しい悲
鳴をあげています——。

連絡先 063 札幌市西区琴似2-5-44 斉藤アバート
フェスティバル事務局 (011) 613-0576

（予告）「演劇会議」70号は「札幌演劇フェスティバル」
特集号となります。参加者からの感想文の投稿を
歓迎します。締切は1988年9月15日。

「演劇会議」発行所



■劇団すがお

創立25周年・桑名市制50年記公演

「有王塚由来」

作・演出・伍藤かずよし



■劇団未来

「カンナの咲き乱れるはて」

作・こばやしひろし

演出・森本景文

■青年劇場

「鍋の中」一続・夜の笑い第2部

原作・村田喜代子

脚色・演出・飯沢 匡



■劇団だいこん座

「落ちこぼれの神様」

作・園山土筆

演出・高橋 寛



「二つの二十年代を想う」

猿 渡 公 一

六月二十四日夜、広島県の県民文化センターホールで、月曜会の土屋清追悼公演「河」を観る。この舞台は、昭和二十三年（一九四八年）十二月の夜に始まり、昭和十八年（一九五三年）二月で終る。広島から博多へ、最終の新幹線の座席で、私は、昭和二十年代の青春の若さを想い続けていた。ときおり、私の想念に、「河」の三幕二場、八丁堀のデパートから舞いおちるピラが、ひらり、ひらりと、重力に空気抵抗に逆らい、拮抗し、ひらりとひるがえるあの場面がしのび込んできた。

第一幕昭和二十三年、第二幕昭和二十四年、広島での峠三吉の文化運動。すべての物質に、文化が飢えていたが故に、みずみずしく、新しい時代の到来に胸をときめかした混沌の時代――。

敗戦、昭和二十年。戦後の文化運動は全国各地に燎原火のごとく燃え広がった。昭和二十一年十二月、福岡でも珊瑚座が設立される。檀一雄が「嵐の中の青春」で、創立から初公演にむけてのダイナミックで、熱っぽく、かなりいいかげんな青春群像をみごとに描いている。

檀が起草した設立宣言は、「旧套陳腐の演劇観念を打破し、清新潑刺の生命をそのまま舞台に顕現しよう。」に始まり、技巧を廃し、現実の再現にとどまらず生の昂揚をめざす創造と青春の祝祭への志向がほとばしり、最後に「私たちは私たちの本拠を永久に私たちの郷土福岡に置きます。」と結んでいる。

檀が起草した設立宣言は、「旧套陳腐の演劇観念を打破し、清新潑刺の生命をそのまま舞台に顕現しよう。」に始まり、技巧を廃し、現実の再現にとどまらず生の昂揚をめざす創造と青春の祝祭への志向がほとばしり、最後に「私たちは私たちの本拠を永久に私たちの郷土福岡に置きます。」と結んでいる。

このように高揚した青春の昭和二十年代に視線を向けるとき、私は、もう一つの二十年代、一九二〇年代を生きた青春を想いおこさずにはいられない。

ジャズエイジ、ローリングストウエントーズと呼ばれるこの時代は、あまりにも明確な姿をとった三十年代とくらべると、未分化な、多彩な、混沌とした多産の時代であった。それは、まず敗戦国ドイツにおいて生々しく提起された近代主義批判、克服、新しい人間認識の課題、と「演劇の十月」にはじまる革命後のロシア・アバンギャルド芸術の高揚が引き金となっている。今年の四月に東京都美術館で始まり、全国巡回中の「一九二〇年代・日本」という展覧会で、村山知義の、カイザー作「朝から夜中まで」の舞台装置が原寸復元された。一九二四年の築地小劇場の舞台が、私たちに新鮮な衝撃を与える。だが、この年、ゲーリングの「海戦」で幕を開けた築地小劇場の運動は、単に装置や照明が新しいのではなく、新しい人間、新しい人間関係、新しい世界を求めていたのだ。私は、同時期の古賀春江の絵に、同時代を鋭く呼吸するインターナショナルな芸術家の視点を見る。

パラダイムロストの時代、インターナショナルな時代といわれる現代、新しい価値体系を求めて多彩な試みがなされている混沌な時代だからこそ、一九二〇年代、そして昭和二十年代の先人たちが生きた現実批判と現実からの新しい可能性発見の道を生きたいと思う。そして、己の内なる地域へのこだわりを通して全世界と交感したいと思う。



■川崎協同劇団・演劇塾・辻シアター合同公演・第17回川崎演劇まつり
「タック・サインの冒険」 作・黒沢参吉 演出・室野定子



■劇団名芸
「ベニスの商人」
原作・シェークスピア
脚本・栗木英章
演出・柘植 洋

演劇で戦争をどう伝えるか

——わらび座『二月三月物語』、未来「カンナの咲き乱れるはて」
に関わって——

栗原省

一九八八年五月から六月にかけて観た芝居から「過去の戦争をいまの観客に伝えることの意味やむつかしさ」を考えた。今更めくと笑われるかもしれない。それを考えていない劇作家、劇団があるのかと。

だがいま日本で進行している異常な右傾化状況や戦後世代がすでに60%を占め、安保・自衛隊肯定者は70%に近い（総理府世論調査）とか、日本の防衛力は一九八八年仏、西独を抜いて西側世界第三位寸前（アメリカ国防次官の評価『毎日新聞』）などという数字の背後にある状況を思うにつけ、今を「新しい戦前」にしない為、もっと多く、もっと急いで、もっと深く語らなければという焦燥がある。

例えば教科書裁判沖縄出張法廷（二月九日・十日）での争点の一つは家永教科書の次の記述であった。

——沖縄県は地上戦の戦場となり、約一六万もの多数の県民老若男女が戦火のなかで非業の死をとげたが、その中には日本軍のために殺された人も少なくなかった。

検定はこれに対し「沖縄県民の犠牲のなかに……集団自決が一番数が多いのであるから、その記述を加えなければ沖縄戦の全貌がわからない」という「修正意見（命令）」が付され、原告側は「集団自決は『非業の死』の記述に含まれており日本軍のために殺された事実は自国軍隊にあるまじき行為として特記した」と反論したが二度の修正を余儀なくされた。文部省がなぜ「集団自決」を強調し固執するのか？法廷審理で被告（国側）が立証しようとしたポイントは「沖縄県民の集団自決は軍の命令、強制によるものでなく住民の自発的行為であった。一億総特攻の精神、生き

て虜囚の辱めを受けぬ日本精神の発露であった」という点にある。米軍上陸で絶望の淵に追いつめられた座間味や渡嘉敷の村民はカミソリや鎌で、縄や手留弾やネコいらずで折り重って死んだ。それ以外途がなかった住民に「自決」があるだろうか。その惨劇を、崇高な犠牲的精神（防衛庁戦史室「沖縄方面陸軍作戦」）などと賞讃して恥じない状況に、

私達は演劇でどうたち向っていけない状況に。戦争を遠い、懐しい想い出として風俗的に描く作品が多くなった。激烈な戦場場面や虫けらのように敵を殺しつくす戦場の英雄を描く映画は殆んど氾濫し、好戦や暴力信奉の気分をあふっている。新藤兼人「さくら隊散る」のようなリアルに戦争の本質を告発した作品に、観客の集る数は少い。

わらび座『二月三月物語』への疑問

原由子作、津上忠演出で津上氏の客演出で話題を呼んだ。

プロローグは東京下町の高校で時代はいま。

文化祭出演の「みかぐら」練習中の民舞クラブ。練習をしる生徒に、指導の佐々木けい子先生が自由に踊りも踊れなかった母親の時代のことを話す。一転して昭和十六年八月から二年二ヶ月間の出来事が十二場で展開する。岩手県の農村。佐々木先生の母秋子は村の女教師。日の丸と「さんさ踊り」で村人が出征してゆくかたわらで遺骨がひっそり帰ってくる。敵捕虜を逃亡させた罪で銃殺された菊池正太の遺骨箱は赤い縄でくくられていた。

「赤縄」は、非国民の刻印である。村長（地主）と校長は村の体面で菊池の息子ひろしを少年兵に志願させようとするが担任の山田訓導に反対される。（山田は「北方教育の」同人らしい？）ひろしの親友賢三（校長の一人息子）はオリンピックの夢をすて少年航空兵を志願する。太平洋戦争となり、青年学校へ進んだひろしは遂に満州へゆくといい出し、山田は「死ぬな、殺すな」とさすのだが、自分も警察に連行され獄死する。十三場は戦

後。戦死した生徒、生き残った生徒や遺族が交々生死の意味を語り、エピソードが現代と交錯して「えんぶり踊り」と「ひなこけんばい」による鎮魂と再生への折りにつながって終る。この劇にはもう一つの線で伍市という踊りの名手が重要な役割りを担っている。以上が作品のあらすじで、私は地元吉備町体育館（5/25）と和歌山市民会館（5/31）での二公演をみた。

『二月三月物語』のタイトルが示すようにきびしい冬に耐え春を待つ作者の反戦平和への意図は明確で、少年達や底辺農民に寄せる愛情もよく伝わる。わらび座ならではの東北民舞を取り入れた作劇法も評価されてよい。美しいシーンが数々散りばめられハッと息を呑むが、これは演出の成果であろう。流れもスムーズである。にもかかわらず私には舞台から伝わる感動が乏しく、むしろ大きな疑問が残った。以下三点についてそれを述べたい。

①この劇は戦争を正しく伝えているか

この作品の構成は(A)山田訓導とその感化をうけた生徒達、女教師秋子。大正初期小作争議に加わった伍市やリッや伍市の踊りの弟子竹治、正太他小作人達やその家族と(B)地主村

長、校長や軍事教官、刑事等との対立が基本となり(B)グループは滑稽な程ステレオタイプ（絞切り型）の、要玉の見本のように描かれ、演じられている。彼等はいわば加害者として天皇制ファナシトの典型としての役割を果すわけである。一方(A)グループの民衆側？は「戦争はいやだ、軍隊など本当は行きたくないのだ」といわば被害者としての立場を声高く主張するグループである。昭和十六年に中学校へ入学した私の一番大きな疑問はこの点にある。

例えば山田訓導の描き方だが、彼がいかに自覚的反戦教師であり実践家であったにせよ、いやそれなら尚更、客席の方に正面切って「日本中に妙な笛吹きが笛が鳴っていてお前等皆をどこかへ連れて行こうとしている。笛の音を耳でしっかり聞き分けろ。死ぬな。人も死なすな！」とふりしぼるような大声で絶叫させてよいのだろうか。そのあとにすぐ掘ったさつま芋をぐっと突き出して「（このいものように）命というもんが土ん中からむく育ってゆくさまを赤ん坊の時から知っているお前達だ。人間の命がその中でも一番大切なのはわかっているだろう」というせりふがつづく。そう言ったかもしれない。昭和十七

年当時農家の子の私は毎日さつま芋を食われ胸やけに苦しんだ。戦争末期にいのちの憂で飢えをしのいだ戦中派世代の芋への想いは格別に複雑であり、さつま芋の生命力を明日を知らぬ人間の命(生死)と例え暗喩にせよ並べる余裕はない。山田のような感情むき出し且つ無神経な反戦教師だったから戦争をくいとめられなかったのだ、などという逆説的效果をねらった作意ではあるまい。山田の影響のせいか生徒達も時局を見透したすていせりふをばんぼん言う。少年兵志願を決めた賢三が「世界中が二つに別れてしまったものおと戻りはきかねえ」と言うのに対し、ひろしが「弾丸が飛んできたら走って逃げてくれ!」と叫ぶ。芋掘りしながら勤太たちは「億一心尻の玉だ」「ゼイタクはステキ」とゴロ合せて笑いを誘おうとする。小作人達も「(軍隊は面白くないというのに対し)ひとの首切った村に火をつけて歩いたりしてか! (竹治)」とか「おら達はなア。百姓どうしだ。菊池が逃がしてやった相手も百姓だ(信助)」と中国人民への階級の連帯をのべ、伍市は「踊りは売らねい! 酒くらった軍人になんぞ見物させるもんでねい」と村長に言い切る。女性達も「戦はおらだちにな何一ついいことねえ。

それでズッポリもうける奴もいる(リツ)」と大声を話し目の前の地主をかえ歌「弥三郎節」で批判する。あげれば切りがない。私はこういう公然たる真情の吐露や時局批判が当時皆無だったと言つてもいい。しかしそんなに反戦厭戦の表白が日常通用したこの村は当時特殊な存在ではなかったろうか。何か特別の条件や原因が観客に説得的に示されなければ理解しにくい。あの頃理性を保ち得た人々は沈黙し狂気に身をゆだねた人々は饒舌すぎるくらい饒舌だった。「聖戦」「八絃一字」「滅私奉公」の大合唱。なにも村長や校長だけが特別の好戦主義者であつただけでなく、村人がみんな好戦家、軍国主義者になつてしまつたところこそあの戦争の恐ろしさがある。

(みんなに加わらなかつた人々の存在を否定しているのではない)この作品の過剰な反戦感情の吐露は、戦争の恐ろしさを見誤らせ、なぜ戦争を防げなかつたのか原因を見失なさせないか危惧する。同時に日本兵士(その大半以上が農民)が中国や南の国々の民衆を大量殺戮し沖縄では同じ日本の住民を惨殺する、他ならぬ加害者であるという戦争の本質を隠蔽する結果になりはしないか。「戦争

の非人間性を「欲しがりません勝つまでは」とか「天皇陛下万歳と残した声が忘らりよか(露宮の歌)」と専ら感情表現のオペラ・トに包み込んだ戦意昂揚スローガンを想起しました」と観劇後感想を述べる友人も居た。②この劇にはアリティが乏しいのではない

疑問①で長く書きすぎた点と切り離せないことだが、一体この作品には作者のおもいたけを凝縮させた「意味ありげな」あるいは「殺し文句」的なすていせりふが随所に出てくる。例えば「自分の声で歌えないのは小鳥よりも自由のないこと(プロローグ)」とか「一人息子が泣いて泣かねえ母親があるかえ、泣け(八場)」とか「地吹雪で目えあけられねい二月も次には三月(十三場)」とか「皆の大切な大切な若い生命、生きる喜びが体の芯からあふれる本当のおどり、本当の生き方! (エピローグ)」とか前記「死ぬな。人も死なすな!」とかそのまま作品のキャッチフレーズになるようなせりふ群。問題はそれが作品の中で役のことばとしての実体を持つかどうかにかかっている。名せりふの中味となるずつしりした演劇的時間と空間があつて、はじめでそのせりふは生きる。演劇としての実体を

伴わぬ名せりふは修身的徳目かプロバガンダ的スローガンに近い。私も随分これと同じつくり方をしてきたように思う。「差別だ! 差別は許せない」と叫べば、私の観客は「そうだ!」と呼応してくれた。その為に本来仲間であるべき人々を糾弾し敵にしたりした。内容に実体や論理や科学性が失われた時、非合理と感覚的表現が大手をふるい「鬼畜米英!」などと。この作品は戦時下の民衆の生活や願望を伝えるよりも作者の観念や願望を先行させたことでアリティを乏しくしたのではなからうか。

③民族芸能を作劇の道具立てとしてあつかいすきていないか。

わらび座の作品について予定をはるかオーバーしたので端折ると、この舞台には「みかぐら」「そーらん節」「さんさ踊り」「駒おどり」「からす舞い」「長持唄」「弥三郎節」「えんぶり踊り」「ひなこけんばい」などの民族歌舞が重要な役割を担い、それが作者の作意でもある。本来「骨みしめし言わせ」百姓が創造した踊りを権力に売り渡せないというテーマである。しかし一例だけ挙げて私の疑問を言えばラスト。民舞クラブの生徒が中心となり前舞台で蓮の花のように「ひなこ

けんばい」を舞い死者を鎮魂する。舞台奥で「えんぶり」が力づくで春の豊作を祈って平和の再生を踊る——その作意はわかるのだが「ひなこけんばい」や「えんぶり」踊りそのものの魂が伝わってこないのである。地元実行委員会の総括は「わらび座は下手な芝居するより民族の誇る歌舞そのものをもっと掘り下げてじっくりみせて欲しい」というのが一致した意見だった。私もなかば同感である。

未来「カンナの花が咲きみだれ」

— 遠い遠い戦争よ —

こばやし・ひろし作、森本景文演出を大阪府立青少年会館小ホールで観た(5/20)。「未来」はこの会場での公演馴れのせいか、ベテランが多いせいかピンと張りつめたものが感じられない。体調を崩していた私自身の方に問題があつたのかも知れない。作品は本誌掲載戯曲だから読んだ方も多からう。構成だけメモすると——

①戦死者たちの会話。戦後四十年の感想や夫々の死んだ時の状況を話し合う。

②中国湘桂作戦に加つた吉田が新聞記者と戦友の妻を墓地に案内して、十万の戦友が

眠る中国大陸へ想いをはせる。新聞社の企画で「中国慰霊団」が組まれる。

③戦死者達と慰霊団は昭和十九年五月から始つた湘桂作戦の最激戦地衡陽を訪ねる。吉田はそこで繰り上げられた戦況(コレラ蔓延を防ぐため住民病兵を焼き殺した話、ゲリラ討伐の村ぐるみ虐殺や捕えた女性二人を拷問の上刺殺した話など)を語り戦死者が(つまりコロス)その話を再現する。

④通訳が村の老人を連れてくる。殺された女性ゲリラの祖父であつた。テーマ曲「戦争は遠い」の重いコーラスで幕になる。

この作品の素材が読売大阪本社「新聞記者が語りつぐ戦争」⑥(角川文庫)に殆んどそのまま依っていることは今度知った。公演会場には衡陽作戦に実戦参加した方の絵日記が展示され、戦友会の人々も多数観に来ていた。

カンナの花が血の色に咲き乱れる中国大陸のそこでは何があつたのか? 私はこの作品が、そのことを死者達(コロス)中心に多義的に再現される作劇法で貫かれていた方が良かったと思う。戦争の本質はその必然的屬性の中に示されるから、中国での日本兵の犯罪行為

のリアルな再現は戦争の意味や真の贖罪について語ってくれるに違いないからである。

戦争は個人の自由や人権や理性や愛を奪い去り民主主義を押しつぶす。むき出して獣性、加虐性、狂気、暴力が支配し、道徳的退廃と人命軽視、人種差別や公然たる他民族支配、そして大量殺戮……その一つ一つの真の姿をリアルに伝えようとする時、その語り部として第一の資格者は当の戦争の犠牲者である死者自身ではなからうか。死者は自分が不条理な死に追いやられた時間を抱いたまま、その意味を問いつづけているのだ。勿論死人に話せるわけではないが、私達は「死者をして語らせる」という手法で歴史的事実や意味をよりリアルに伝える演劇の伝統を多く持っている。(ただ、未来のコロスの場合、感情移入過多に、あるいは兵隊ごっこ物まね演技にとゆらぎがあつて戸惑った。私はブレヒトの教育劇「処置」をおもひ出した)

舞台が「中国慰霊訪問」の場に移って私の期待はずされたようだ。
劇は記者と通訳とのやりとりとか生存者の吉田と、孫娘を日本兵に殺された老人と、間に立つ通訳三人のやりとりへと重点が移って、死者はせいぜいその解説をする役割りしか与

えられなくなる。特に老人役の波田久夫の演技が見事に迫真的であるだけに、家族を殺された中国民衆の怒りと悲しみの前に吉田は言葉

葉を失ってしまっただけである。(ここは原作では、吉田「中国人の傷はふかい傷です。あまりにも深い」記者「来てよかったですね。吉田さん。」吉田「……(うなづく)」で終るのだが、森本演出では流石に気が引けたのか「吉田崩れるようにしゃがみこむ」というト書で終っている)中国を訪れてはじめてしまった罪の深さに返えず言葉もない——これでは、日本人の良心の問題の方が中心テーマになつてしまつて、個人の良心や善意を超えた巨大な戦争の本質が見えなくなるのである。

今、中国観光はブームである。戦友会などのツアーも多い。慰霊、懐古、歴史の旅、友好親善色々あろう。「ああ、これで四十年の肩の荷がおりた」「中国の人々にも私からお詫びしました。ほっとしました」と言う人が多いという。しかし戦争責任や戦友慰霊が戦争世代のこのころの問題で片付いたというのなら、戦争を知らずに育った60%の日本人にとって過去の戦争など関係ないと言われても当然だ。政府高官が公然と「日中戦争美化論」を唱へはじめている現在、いまの問題として

過去の戦争を伝えることこそ中心課題である。札びらで平和は買えない。

(後記)

この稿では当初の他に、劇団大阪公演「アトリエ」(グランペール作、斎藤誠演出、6/25拝見)と関西芸術座公演「うたよみざる」(川村光夫作、岩田直二演出、5/25拝見)の二作を取上げる予定だった。ごらんのようにダラダラ書くうち紙面が尽きた。関係の方々にお詫びしたい。

劇団大阪「アトリエ」は演出の斎藤氏が「いつかやりたい」と数年あたたためていた作品だけに実にみごたえのある舞台だった。戦後のパリの話でナチスに殺されたユダヤ人の妻とその仕事仲間の話である。この作品は全日本演劇フェスに持って行くので、観てのお楽しみである。関芸「うたよみざる」は岩手ぶどう座川村光夫氏の代表作で、私はこれと川村さんが新しく構成した「現代民話考」(松谷みよ子作)で、戦争をどう伝えるか」というテーマに於ける民話劇の有効性を考えたかったが、機会をみない。

「作家の集い」(東会議)の報告

栗木英章

(劇団名芸)

去る5月3・4日、山梨県の職員春日居保養所で、全リ演(東)の作家会議が開催された。その感想は、大峰(銅鑼)、中村(静芸)両氏から寄せられているので、少し記録風にまとめて、本誌を通じての報告とさせていただきます。(文中、敬称略の失礼はお許しを)

彼の地彼の場合は、東リ演創作部会(?)ゆかりの地とのことで、久しぶりの集いの世話は、当地「やまなみ」の河野氏、土井さんお二方に負うことになり、様々な心配りに感謝。さて、連休の真中、各劇団とも公演等を控え多忙の中、馳せ参じた面々は次の通り。

矢作(北海道)、岡田(東京)、北原(長野)の個人参加をはじめ、矢野(土の会)、岡田(埼玉)、境野(石るつ)、岡安(世仁下)、大峰(銅鑼)、城谷(京浜)、小島・中村(静芸)、こばやし・藤本(はぐるま)、清水・栗木(名芸)に、演劇会議の萩坂と、前記やまなみの二人という所で、他に四日市

の森氏からは、新作「炎と燃えて生命」改稿に奮闘中につき欠席の手紙連絡が入った。

久方ぶり開催に当たっての背景は、はぐるまで準備してもらった呼びかけ(呼びかけ人は、岡安、こばやし、萩坂、矢野、小島、栗木に大橋喜一氏)の次の文章にまとめられているので、長いが一部紹介させていただきます。

「……今日、多様化の中でメッセージが求められる時代がきたのです。とくに大都市では今日既成脚本では観客をひきつけることは困難とさえいわれています。まさに創作劇全盛時代で、考えようによっては書き棄て時代といってもいいほど創作劇が氾濫しているのです。これを否定的に観るだけではいけません。観客から強くメッセージが求められていることだけは事実だからです。即ち、劇団のメッセージなくして観客に切り込むことが今日たいへん困難な時代なのです。今日をどう描くか、今日をどうとらえるか、今日の観客とどう切り結ぶのか。みんなの作品の中から、また問題をもっている人から、今日の課題を出し合い、語り合ひましょう。……」

さて、この呼びかけにもある通り、かなり作品が生み出されており、今回の参加者以外の(東)会議加盟劇団の近作も含めると、



20作はゆうに超え、これらを全部読んで、基調報告という形にまとめる労を、今後また萩坂老に負わせてしまった。ついでながら、作品論、観劇評もふくめ、全演内でもっと批評活動を活性化し、その層、人材も発掘、拓げていく必要を強く感じる。ともあれ以前の演劇大学における創作分科会も含めると、参加者が最低4人のときがあったことを考えあわせると、今日の20人近い参加は一つの驚きであり、新しい作家と佳き作品よ生まれろ！と願いつつ萩坂のみならず、参加者全体にとっても今後へ期待を抱かせる芽であり、大切にしていきたいという共通認識はあった。勿論、それには全体に困難な状況の中でも、とりわけ衰退していつてる劇団に座付作家がいけない例が多いという危機意識もある。

初日午後、時間の制約もあり、準備された意を十分尽くしてもらえぬ形で萩坂報告を終え、具体的な討論に入ったが、いつもそうであるように、話はなめらかに展開しなかった。ただ今回は、事務局（はぐるま）の手により事前の作品配布が行き届き、共通基盤のあったことが、少しずつ話のかみ合いを生み出していったと思う。とりあげられた作品の中で、「演劇会議」や他の演劇雑誌に掲載さ

れたり、「燃える雪」（大峰）のように、全国巡演され続けている所謂知られた作品以外を一部紹介すると、「ごろちゃの夏」（岡田）、「開拓野草の人々」（北原）、「おみつぎつね」（藤本）、「祝いの日に」（清水）等であり、他方、本誌上でその他をほうような上演を噂には聞き知っていた「シホロカベツ川」（矢作）、あるいは企画という点で傑出した才をみせるはぐるま、岐阜市制百年記念（未来博）パフォーム「信長館縁記」（こばやし）など、はじめて眼にした貴重な脚本も何作があった。また帰り際いただいた静芸・中村の「海の見えるところへ」も、帰名後読んでみて、たいした力量の持ち主と感じさせる作品もあった。

私自身に関わることで言えば共産党創立65周年記念文芸作品応募で入選した「受難の像」等に指摘された「いいたいことが書いてあるのと、いいたいことが表現してあるのとは別」という点は、テーマに沿って人物や事件をご都合主義的に配置して構成していく（だけ？）で保っている弱点を、あらためて感じさせられたこともある。

あれこれ、いきつもとどろつ論議していく中で、東京の真只中で活動が続けている岡安の

発言は強烈であった。「一度つまらない作品なり舞台を創ると、希望する劇場企画には二度と取り上げてもらえなくなる」というギリギリの瀬戸際で、毎日を燃焼させている彼の眼からは、今回の一連の作品はおそらくはがゆいものであったろうと見える。だからダメと、彼も短絡的に決めつけているわけでもないだろうが、しかし自分に即していけば、名古屋で自前の小劇場を持ち、悪くても良くても自作を上演し続けてくれる所属劇団があり、財政的にも赤字を生むことはなく、無事公演を続けられることは、その無事続けられるだろうことが、傷つくことも傷つけることもなく、創造へのハングリーをぬるま湯化せしめ、足踏みさせていることを認めないわけにはいかない。もちろん、いくら最良の身内観客といえども、つまらない舞台を二度続ければ、離れていくことは確かだし、そんな中で自分の生きる姿勢を後退させれば、大独占（東芝）の厳しい職場ですぐスボイル化させていく緊張はあるのだが、哀しいかな、それがなかなか創造の内なるエネルギーとは結びついていない、いかな。

長く書き続けている小島真木の「戦争の戯曲化について」「（色々変遷しているように

みえる）私たちのリアリズムについて……」の問いかけや、寡黙な矢野の「観客とのかかわり……」等々の思いを気にしつつ、夕食から恒例の文流会となった。

総会やゼミナールの時でもそうだが、正直、交流会は楽しかった。名芸から参加した22才の清水も、無口ゆえに先輩諸氏から気使いをいただいたが、彼なりに刺激を受け、次への意欲をわかせる楽しいときであったという。丁度彼と同じ年令のとき、つまり20数年前、私は社内教育で川崎へ出張していて、その間京浜協同劇団の稽古場へ通わせてもらった。当時、「テアトロ」誌などで、名前と作品を知り、雲の上の人のような存在であった黒沢さんたちから励ましを受け、ほとんどはじめて書いた「陽光」を、黒沢さんのわざわざの紹介状を添えてもらって東リ演（当時）の加盟劇団へ送り、静芸での創作部会に初めて参加したことがつい昨日のことのように思い出された。その夜、山崎欣太氏、山村金平氏、松岡直太郎氏といった先輩から、厳しい批評と期待の言葉をもらって、それがかるうじて書き続けてきたことの原点でもあるように思える自分にとって、当時の先輩たちの年令に達した今、相変わらぬ小さな力をあらた

めて思い知り、十分眠られなかった。輝しく先頭を走って下さった黒沢さんも、また土屋清さんも、もういない。もちろん、時代は変わってきているし、私なら私なりに、書き棄てていわれてもいいから、その時々には有効な仕事を量的にでも続けられ、それなりに役割を果たしているという気も（非力ゆえに）しないでもないが、しかし、揺れ動いている時代の深部に何とかして爪痕を残して次代へつなきたいという情熱が消えているわけではない、単なる感傷ではなく、もう一度、気持ちを込めていい仕事をしたと強く思った。

翌日午前の討議は、少し作品の個々の指摘からスタートした。「祝いの日に」（清水）

といった若手の未完成な作品を、集団の中でどう評価し、上演まで高めていくのか、またはいかないことで深まることがあるのか、あるいは「燃える雪」のような、脚色の仕事の大切さ、「シホロカベツ川」がとらえている重い現実（炭鉱爆発）への迫り方など、十分とはいえないものの、司会（城谷）の努力もあって一定の話はできたといえるだろう。終了間際、これからの「作家の集い」の持ち方を論議した。「いずれ、適当な機会に……」では持続しないだろうということで、年に一

回、三・四月に定期化しようと確認した。今回の出席者はもちろんのこと、都合やこちからの連絡もれ等で参加できなかった人も次回は是非、新作を持って加わっていただきたい。

とりあえず、事務局は栗木が担当することになったので、次回までに二・三度、書き手連の動向を伝えるニュースを発行したり、次の作品発送の手続などするため、皆さんのメモ寄稿や、作品発送（発送先は後述）を願いたい。作品印刷は、各劇団印刷の時、気配りいただいて、いつも20部位プラスしておいて下さるよう依頼して、まとめを終えさせていただく。

——どうも最後は事務的なお願い事項になってしまいました。今回は、このように書く役目を担当するとは思っていなかったのですが、メ

モも不十分で、従って参加された方の発言引

用も不正確であることをお詫びします。
尚、事務局挨当の拙宅の住居表示が8月より変更となりますので、原稿や台本の届け先というところで貴重な誌面をお借りして紹介させていただきます、よろしく。
〒457 名古屋市南区汐田町11-8
Tel (五二八二) 一三六九一 栗木英章

たった一つの決議

— 東会議作家の集い —

大峰 順二

(劇団銅鑼)

「東会議作家の集い」、私は初めての参加でしたがなかなか楽しいものでした。やはりその人の顔を見て、その人の声で、その人の考え方を識るということが大切です。心にもふれることが出来ますからね。

「集い」は、五月三日と四日の二日間、山梨県の「春日井保養所」というところで開かれたわけですが、連休という条件も重なったことでしょいか、一六名という多勢の参加でした。それと、現地ということ、いろいろお世話をいただいた、劇団やまなみ、のお二人を入れると総勢で一八名なんですね。これには萩坂氏も驚いていたようです。萩坂氏の考え方、というより体験の実感から言えば、劇団の活力は、その劇団に作家がいるかいないかによって大きく違うということです。それどころか、作家のいない劇団は、既成の作品を上演しているうちに次第に低迷し、やが

て解散する傾向が強いということです。その点でいえば、作家志望者もふくめた多数の参加は、きわめて力強いものだったと言えます。岐阜のこばやし氏は、現代を評して「人間の関係が断絶し、生活から創造性が失われて行く」なかで「言葉が衰弱し対話がふやけ」ていて「今日では演劇論すら劇団で聞かれないことがないのである」と言います。彼自身

がなげかけてくる危機意識は、各人に於て、どれ程具体的であるかは別にしても、参加者の一人一人感じていたはずで、だから多数の参加になったのではないかと思います。情勢をなげいてばかりはいられない、そういう人々の集りだったと思うのです。

しかし、何をどう描けば展望がひらけてくるのか、誰にとっても、簡単に語れるものではないかもしれません。とりわけ、「書く」という仕事を具体的に持っている人々の集りでしたから。いきおい、討議の糸口をめぐって堂々めぐりをするハメになりました。というのも、参加者が夫々に課題をもって来て、どれも重要なことであつたからだと思うのです。

たとえば
(イ) 読んで判らなくても、その劇団の舞台を観ると判る。そのとき、台本というも

のをどうとらえたいのか。
(ロ) 作者が劇団をつくる時と、劇団が作者をつくる時、どんな問題が生じるか。
(ハ) 地域性と作家の関係。
(ニ) 現代の若者の目を舞台にむけさせるためには、どんな企画性が、作品が必要なのか。

(ホ) 若者の世界観を、どう受けとめるか。
(ヘ) 全演以外の作者を討議の視野にいれる必要があるのではないか。

(ト) 生きた言葉とは何か。
(チ) 演劇におけるリアリズムと台本との関係についての見なおしについて。

兎に角、たくさんあったのです。「集い」の成果という面からみれば、的を絞って討論を深めたということにはならなかったのではなはだ心細い結果であつたということになるのかも知れません。しかし、夜の交流会では酒のいきおいも手伝って、かなり深まった議論が、そこで展開していました。私なども名芸の栗木さんと「科目」の問題や人物設定のことなど、ずいぶん話しあいました。失礼を承知で、きわどいところまでつっこみだり……。

いずれにしても、そうやって各自、再び自

分の仕事と向きあう時、忘れ得ぬ二日間になつたと思うのです。

結局、この「集い」は、年一回はやろう、という唯一の決議をして、その幕を閉じたわけです。これは、作品をもちよって、という条件つきですから、作者にしてみれば、かなり積極的な決議なんですよ。

帰途、会場の近くを流れる笛吹川の堤には新しい草々が陽光に輝き、初夏の風にゆれていました。来年、また逢いましょう。できれば誰一人として欠けることのないように――。

作家会議に出席して

中村 和光
(劇団静芸)

全演(東)作家会議。まるで自分とは縁のないような集りに参加したのは、劇団のサブリちゃんの「行ってみたら」になんとか首を横に振れなかった優柔不断さだったと思う。

ともあれ、作家と言われている人達がどんな感じでどんな話をするのだろうかという興味

を頼りに出掛けていった。

萩坂さん、こばやしさん、岡安さんをはじめそうそうたるメンバーに、予期していたシビアな批評。なんとか自分がしゃべらずにすむようにとただ祈りながら、話し合いを聞く。

そして、前もって読んでいた作品と作家の顔を一致させながら、あの作品はこの人が書いたのか……と妙に納得したりしなかったりしながら時間が過ぎていく。ところが、人間とは恐ろしいもので、実績も何もない若手のくせに、雰囲気慣れしてくると図々しく口をはさみたくなるのである。「言うことは正しいと思うが、俺達若者の思いの行き場所がない……」。

そして、心配したように発言する番が回ってきた。「皆さんがどちらの方向に進もうとしているのか、戦争も戦後も知らない世代として聞きたい……」この辺まではまだ良かったが、そのうち「若者がのびのび創造していかない窮屈さを感じてしまう」と、ついあらぬことをしゃべってしまふ始末。ホント、自分の軽薄さが情けなくなる。

しかし、中堅の方々の温かい支援に助けられて夕食懇親会。いろいろ気を使って紹介してもらいながら話す。そのうち、ともに

取つたら喧嘩とも取れる歯に衣をきせぬつこみ。皆、第一線に立つて苦勞しながら頑張っている人達ばかりだからこれは……と思いきや、熱い。温かいと言えほどボケていない。僕達若手にとっては、少々熱すぎる情熱でありやさしさだと思つた。しかし……。全演の組織の中では若手だが、20代ではなくない僕自身は一般的にはもう若者とは言えない年である。僕にとっても少々熱すぎる年輩者達の情熱を20代の若者はどう受けとめていくのか……。

演劇をやってみようとする若手の多くは、管理社会という実生活の中では息苦しくて、そこからみだした心ある人達である。その若手が、理念と情熱に支えられた強い指導者の下でのびのび自分を輝かしていくことが出来るだろうか……。

ただ、僕は今回作家会議に参加して心から良かったと思つている。参加者の人達の思いの中から、何かを感じることが出来たから。夢は、来年は大勢の若者と共にこの愛すべき頑固なお年寄りをもっと困らせることだ。来年を又楽しみにしたい。

△ブロックの頁▽

中国ブロック

「劇団に来るのが楽しみなぞ」

―若者座、草の実の若者たち―

レポーター 下村清 一

(劇団莫の実)

六月六日夜八時、徳山から車で一時間三〇分、宇部の劇団若者座の稽古場に着く。まだ二、三人しか揃っていない。向井義秋さんに「演劇会議」の「ブロックの頁」について相談し、若者座の若い人達に集まってもらって、大いに発言してほしい旨をお願いしていたのだ。中国ブロックには、劇団月曜会(広島)、劇団あしぶえ(松江)演劇サークルトラム(山口市)、劇団若者座(宇部)、劇団草の実(徳山)の全リ演加盟劇団がある。可能ならば全劇団の参加で「ブロックの頁」を賑わしたいところだが、地理的に離れていること、公演を控え時間が取れないなどあって、劇団若者座に劇団草の実も入り混じっての企画となっ

た。この度は失礼することになった劇団には、改めて他の誰かにレポート願うこととした。

九時になって、やっと人数も揃い録音用のテープがまわり始めた。二年、三年前の合同公演で出会った何人かの気になる顔が見えないのが少し寂しい。

では、集まっていたいたメンバーの自己紹介から。

(劇団若者座)

伊藤 由美 21才(1) 事務
原 洋子 17才(1) 学生
高橋 巳保子 23才(3) 銀行窓口
高橋 泉 27才(4.5) 保母

向井 義秋 37才(17) 病院車運転手

(劇団草実)

杉林 幸 登 32才(2.5) 建築技術屋
杉林 たか子 27才(1.5) 保険会社事務
松谷 芳孝 34才(2.5) ベンキ屋
() 内 経験年数
司会 高橋 泉



① 原 わたし、中学一年の時にぐれちゃった。それが二年の時演劇部の先生と知り合い、演劇部に入学しだんだん自分が変わっていった。三年のとき部がなくなり、なんだかくやしくて、みんなで文化祭に劇を上演しました。高校に入り、社会人演劇に興味を抱き、若者座に入団を決意したの。

下村 若者座の芝居をみて？

原 「銀河鉄道の恋人たち」と「GOOD LUCK」で即、浜田さん(若者座の創立メンバー)に電話を再三かけつけ、厳しいと言われてもめげずに入団を希望した。(笑い)でも実際はみんな和気あいあいと楽しみながらやって内心ホッとしました。

泉 で、いまは？

原 集りが遅いので、ルーズと思うことがある。でも、稽古場に一度たりとも行きたくないと思っただけ。修学旅行の前日も来なかったけど母親に止められて……(笑い)

伊藤 成人式のときに、若者座の人達が配っているチラシを見て、前から興味があって入団したんだけど実際入って、自分の思うようにはならず演技することは難しいと感じて

ます。今、若者座の中でいろんな人達と接することが魅力。

巳保子 同じく成人式でチラシを見て。高校時代三年間演劇をして、卒業してから宇部にも劇団があることを知り即入団しようと思った。一人で入るのが何となく気恥ずかしくて友達を誘って入ったが、友達は挫折し一人残っちゃった。最初すごく居心地がよくて……暖かく迎え入れてもらえた。ワンパターンの生活、家に居たらレコード聞いたりテレビ見たりで、適当に時間を過ごしちゃうけど、ここに来るといろんな職場のいろんな話が聞けたり、勉強になることも多い……ふれあいを感じちゃう……。

泉 あんまりおらんよね、演劇経験がある人は……。わたしもそういう経験全然なかったし……。何かしたいなあ……。世間で言うお茶、お花とか、習い事とかでないもののつながりで……。ここに居ながら何か出来るっていう……。

たか子 知合いとお酒を飲んで、遊びに来ないかって言われてポコッと行ったら、空いている役があるんだけど……。って言われて、すぐその気になって入ってそれから……。何でやる気になったのかよく分らないけど……。

自分でもそういうのやりたかったのかも知れない。今まで根付めてやってたのを一年ぐらい前にやめて……。精神的にそういうものに對してブランクな期間があったのでやっと、何と言うか休憩時間が終わって……。じゃあ何か体で表わせるものをやってみてもいいかなあ……。どうかなあ……。と思ってた時期だったのかな……。と今にしてみると思うのだけど……。それでやる気になって……。

すぐやる気だったんだけど、なんでやめなかったのかな……。やめるのが寂しかったのかな……。演劇は自分にむいているかどうか分らないけど、何かこう、向かって行けたらいいな……。そういうのってすごく自分の夢なんだと。

現実、会社に勤めないと生きて行けないし、口をあけて待っている人がいるわけだから主婦もしないといけないし……。だからこう……。妥協しながら、ちょっとずつ、無理をせずに、やっていくっていう……。今一番関心があるのは、いかにして主婦を楽にするか……。相手に迷惑をかけずにどこら辺で折合えるかなっていうのと、ずっと勤めるためにはどんなふうな環境だったか……。自分も潰れたくないし相手も壊したくないし……。き

ちんちんやりながら自分のやりたい事を続けて行こうと、それを今考えている。

まあ、劇団では全然動いてないし、動けない感じ……。そのへんがちょっとよく分らない。

下村 お姉さんも、東京で芝居やってるし、つまりそういう環境みたいなのがある……。

たか子 あるかもね。母も好き。

泉 中央に行ってみようかと、地元でやることの本質的なものはそう違いはない？

たか子 いや、かなり違うよ！

泉 違うかなあ……？

たか子 私は、今の生活がきちんとあって三割ぐらいそういうのに傾いているけど、あれはもう一〇〇%没頭で。生活の全てのものを犠牲にしてやってる人とはね……。全然違う。

②
泉 松谷さんは、スタッフ（装置・衣装）で劇団に入っちゃった？

松谷 いや、生意気なようだけど端で見てね。あれぐらいだったら僕にも出来るんじゃないかという……ハハハ。草の実を通して演劇を知ったんだけど、それまでは、もっぱら映画の方がよかった。まあお茶濁しにやって

みようかと言うような……。まああの時と今は全然ちがうんだけど。

泉 何が変わった！

松谷 どうなんかな？ まあ本物って言う

か、僕の気性としてとにかくやっぱり、自分の納得のいくものを作りたいというものがあから。まあ満足いうもんが今までに全くないわけだから……。まあ一生かかって無理だろうけど。まあそれで、かたちあるもので表現してみたいのが実際のあれやね……。だから、今までは絵を書きに行ったり写真を撮りに行ったり、いろんなことをしながら……。

それは、結局個人の、自分自身だけのあれだった。今度はそれが、周りからヤジが入ってくるわけだね、その度にくそっと思いがた……ハハハ。まあ昔からそういうのはあった。みんなの話を聞いていてなにを言おうかなと思ってる……。やっぱり造る喜びっていうのは確かにある。

泉 造る喜び……。

松谷 いや、造っている最中……。やってる最中ってのが僕は一番好きなんよ。結果云々じゃなくて。どうせ結果は……フフフ。

泉 それはある！

杉林 入った動機は単なる偶然。新聞で草

の実際の公演を知り観にいった。大学時代四年間演劇をやった。それも偶然隣の部屋の先輩が芝居に関わっていたのでズルズルと入ってしまった。こっちに帰ってブランクはあったが、草の実際の芝居を観て何か同じ臭いを感じた。体質が合っているっていうか……。学生時代から反体制的なものに興味があつた。成田にも行った。血沸き肉踊るっていうか……。そういうものを草の実際の雰囲気、姿勢を感じた。

泉 草の実でその繋がり持ってた？

杉林 それが無くなれば多分興味も無くなるだろう……。集団でやる方が個人でやるより訴える力も強いし、バ・フォー・マンスとして演劇をするのだし、アビリティがある。自分で納得できる表現方法だ。

泉 ……劇団に入って、何か変わったことは？

杉林 物事の視点がいろいろあることを知った。演劇をやっている人達は本音で話すし、又本音で話さないをやっているところもあるし、人と話をするることによって色んな見方があることも知ったし……。虚勢張って綺麗事ばかり言って本音を出し得てなかったし……。こんなのは信じられないってことも色々

あったけど……。劇団に入って色々な考え方を吸収した。結局、ナンパになってしまった。

泉 ……若者座は若い人が多いし、もっと年齢層が低いから、ちよっと、また発想が違ふんだけど……。

私は保母をしてるんだけど、いまの保育園に疑問を感じつつ働いているみたいなのところがある。例えば、定員よりかなりの水増しをしたり、子供に対してのやり方が押付けだったり、何かが違うという葛藤の中でストレスを感じているんよ。それを劇団に来て、愚痴になるか、皆に聞いてもらおうと精神的に楽になるし、子供達に接することも微力ながら私なりに納得のいくようにしていくようになったし……。「こういう事は、絶対いけない！」って、はっきり言えるようになったと思う。

已保子 私は入ってきた時よりは、自分の思っていることを話せるようになったというか、気持的に引込んでいたものが、前に出せるようになったというか……。

伊藤 我儘のかたまりで、自分ではこれじゃあいけないって思っているが、つい口から出ることは癖みばっかり……。ある日、劇団の先輩にズバッと鋭いことを言われて、

あーもう、こんな性格やめなくっちゃああって思ってる……。少しはましに……。

会社では、見て見ぬふりが多いでしょう。劇団では皆ははっきりものを言うし、それがいい。

原 人の迷惑というか、心配していることが分るようになった。いままでは、自分の思ったことは絶対やろうという頑固な性格だったんだけど……。劇団というのは、家庭以上に自分の存在を認めてもらいたい場でもあるので……。協調性みたいなものも出てきたような……。みんな親身になってくれるし、みんなに嫌われたくないって思う。

松谷 今まで僕自身、今考えると見栄の張りっぱなしだね。だから、ここへ今来ていること自体が一つの演技みたいなものもあるんじゃないかなあ。今まではとにかく人の迷惑と関係なしに自分がよければよかったし、自分が一つの……。とにかく僕の悪いところは何かをやるのお金が目当てだったっていう……。それが自分の満足感になっていた……。

下村 それじゃあ我慢できんように？

松谷 ー……。なんかねえ……。今まではお金で済ませてたんよ。まあそれでもいい

いと思ってたけど、今ごろは価値観が変わったゆんかね。こっちは帰って来て、色々うちこんでみたけど、もう一つ乗り気になれん面があったけど、今割とまあ本気になってやるというんかな……。

向井 演る作品の中から自分がそんなふう

に……。松谷 それはない。つくり上げることで一つの満足感を持つてるし、だから作品では……。僕はあれやないけど、どんなことに対しても一生懸命になれる性格なんです。……。どうなんかな……。どんくささをかくすために一生懸命やってみるかな？。不器用なんです。僕は！生きることに対しても……。

杉林 スマートに生きてたら、芝居なんかやれないかも知れない。

泉 スマートに生きることが、本当に面白いことなんかって……。

松谷 でも、スマートに生きられれば素敵とおもうよ。

泉 どういうのがスマートかっていうものがある。

③
向井 聞いてると、芝居を創る集団じゃけど、芝居のことよりは、みんなと話せること

の方が楽しいから——、確かにそういうところが楽しいかもしれんけど……芝居と自分がどう関わっているかという……。

下村 どうして、なんで、その作品を選んだのか。

向井 作品にもよるんじゃないけど、草の実のやる芝居とうち(若者座)のやる芝居違ふと思うし、生活感を肌で感じるところと、ちょっと離れて感じるところとかかね。いま考えていることがこの芝居じゃたらできる、この芝居は距離がある、とかね。そういうことは作品によってあると思うよね。自分とどういうふうなもので作品に関わっていったのか、それとも全然関わらんで「芝居」ということだけで創ったんか、そのへんが僕はすごく気になる。

伊藤 ……、舞台の上でセリフ言うのが一杯で……、でも、稽古の時に時々、何となく自分と一体感になったことがある。アッこれって感じがして、すごく充実した。でも役は役、自分は自分って感じ……。

泉 自分をさらけ出せて、人生観が変わりたいえる芝居は…… 役にもよるし、わたしにもよく分らない。これから続けていくなかで見詰めていく……。そのために劇団に入っ

ている。いろんなことを考えて、何か少しずつ変わって来たと思うけど、自分をさらけ出せたかという……、うん、……。でも、みんなで芝居をつくって作品について話合うことはとても生き方を問われることだと思ふ。

向井 一つの芝居を創りあげることで、話にでたスマートに生きることで、裸になるってこと、さらけ出されてもそれでもなおかつやってよかったというのがあったのか？それとも、スマートに創ってよかったんか？

下村 作品を解釈していても、さらけ出したことにはならないし……。

已保子 稽古をして、恥ずかしくなることがよくある。

下村 みんな、ちゃんと言いたいことは他のところであって、何となく隠し合ってしまふ。でも、お互い追詰められていくと、衝突したり、強がったり、弱々しく見せたりしていても追詰められていくとさらけ出さざるを得なくなっちゃう。そういう体験が多い方がいい……。

泉 「銀河鉄道の恋人たち」の時はかなりやられました。追詰められて……。

下村 かえって、鉄格子をおろしちゃうことは……？

泉 わたしの場合それは良かったの。初めて的主役ということもあり、演出に言われたら言われた分だけ、あーこはこんな思いじゃなかったんかみたいな、また恥をかくって言うんか……。

已保子 何かこう、言われるのが怖いっていうか……、言われることは、後で考えると自分を大きくすることなんだろうけど、その時は落ちこむけどね。言われた役っていうのはすごく印象に残ってる。その分、練習する時も楽しかった。言われて泣いたけど、終わった時の喜びが強かったから……。

下村 うん……、どうしようかな、もう十一時過ぎてしまったし、これからのことについて話を出してほしいんだけど、喉も乾いちゃったし……。ひとまずここまで……。

(あとがき)

全演に加盟している五劇団は、三県に在し、距離も離れているため、日常の交流はなかなかむづかしい。ちなみに、山口市(演劇サークルトラム)を起点に車で移動するとすれば、劇団あしぶえまで五時間、劇団月曜

会まで三時間、劇団若者座まで四〇分、劇団草の実まで一時間は要します。

しかし、徐々にではあるが観劇交流は頻繁になってきています。劇団あしぶえの「おちこぼれの神様」には、いずれの劇団も「五〇人劇場」を訪れ、丁寧なおもてなしを受けています。劇団草の実へは、劇団あしぶえの園山土筆さんに足を運んでもらっています。ごく最近では、劇団月曜会の「河」上演に十人以上は観劇しているでしょう。このようにここ近年にない交流が深まってきています。また、昨年(一九八七年八月)に西会議ゼミナールを山口市で開催したこともあって、特に山口市内劇団と劇団月曜会とは、ゼミナールの中心となった新編「おどけ開帳」の創造過程で、小倉茂氏をつなかりに、創造的にも新しい出発となっています。小倉茂氏の太鼓が山口市内を伝播する日はそう遠くないでしょう。

さて、このような中国ブロックの状況の中で特に山口市内の特徴的な経過と今後の課題について少し報告させていただきます。以前、「演劇会議」でも報告されたように、新たな運動の皮切りは、全演加盟の三劇団、演劇サークルトラム、劇団若者座、劇団草の実を

中心として取組まれた、一九八五年五月の「憲法集会」の護憲劇「今日、私はりんごの木を植える」(作、ふじたあさや)の合同公演でした。この模様は劇団若者座の天羽新平氏が「演劇会議」No.60(一九八五年八月)で報告されているように、「山口市の演劇史上初めての大がかりな協力態勢」でした。そして、以後三年間「憲法集会」を中心に合同公演が続いています。列記すると次のような経緯となっています。

・一九八五年五月

「今日、私はりんごの木を植える」(山口市) 作 ぶじたあさや

・一九八五年八月 構成詩「いのちをみつめて」朗読 作 丸岡忠雄

・一九八六年六月 (宇部市) 作 丸岡忠雄

「今日、私はりんごの木を植える」再演 作 ぶじたあさや

・一九八七年五月 (山口市) 作 ぶじたあさや

「第三帝国の恐怖と貧困」より「ユダヤ生れの妻」「スパイ」 作 B・プレヒト

・一九八七年八月 (山口市) 新編「おどけ開帳」 構成 村崎修二(猿舞座)

・一九八八年五月、六月 (山口、宇部市) (西会議ゼミナール) 作 峠 三吉

(非核の政府をつくる会他)

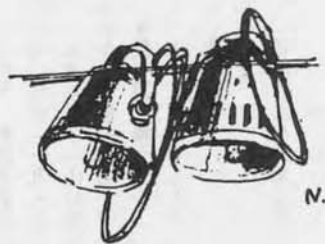
さらに、西会議ゼミナールで創作された新編「おどけ開帳」の芸能は、猿舞座(玖珂郡周東町)も加わっての「遊芸クラブ」が設立され、山口市内の町内会、ボランティアグループ、各種集会、選挙などあらゆるところから声がかかり始め東奔西走となりつつあります。しかし、全てバラ色というわけにはいきません。数々の積残しも同時にあります。ある種の勢いにまかせて次々に計画が組まれていったこと、(勿論、勢いそのものを否定するつもりはありません)一連の合同公演が、「憲法集会」を中心とした取組みのため、その集いの目的、意義等、全団員の合意が得られぬまま突進んだ部分もあり、特に、新しい団員、若い団員との軋轢は消えませんでした。ここで、それをとやかく言うつもり

はありません。むしろあって当然で、問題となるとすれば、そうした声が表に現れてこなくなつた時でしょう。みんな言いたい放題言えることが大切だと思います。

最後に、今後の問題です。それは各劇団で対応すべきこともありませんが、山口県内の劇団の共通した課題として、まず作家がないことです。全国の劇団で活力のある劇団は必ず作家を擁している。作家なしにはいつかは衰頹してしまふ。現状は演出者、指導者による宝探しに頼っています。作家がない悩みはすぐに解決しないでしょうが、より意識的に地域の文学者、詩人たちと接触し交流をはかりながら、地域を見つめ直し、地域としての共通の課題を掘りおこす作業のなかから戯曲化していく。時間はかかるでしょうが、執拗に食ひさがっていかねればと思っています。

いま一つ、リアリズム論の問題です。この春から、久保栄を出発にした「リアリズム研究会」が発足しました。作家がいないこととあいまってリアリズム演劇論については、何ら論議されてきていません。この「研究会」は矢野弘氏のようにかけによるもので数名で出発しました。時期をみてひろげられるものに

していけたらと考えています。今後どのように展開させていくか、皆目不透明ですが、避けては通れない課題として雲上に漂っています。見えにくいと言われるこの時代を描くためにも、そしてお互いの舞台の観劇の評価をより創造的に刺激しあえる関係を深めるためにも、この「リアリズム研究会」を充実したものに発展させていきたいと考えています。



△劇団通信▽つづき

劇団津演

68号の送金が大変おそくなって申し訳ございません。

やっとアトリエ公演「若くなるまで待つて」(作・筒井康隆、演出・岸武雄)「ブラックコメディ」(作・ピーター・シェーファー、演出・笠井峯生)の二本立、6月10日・12日終ったところです。

芝居の出来は二本ともまずまず好評で、楽しく観ていただきました。

観客も五回公演で立見が出るほどの盛況ぶりでした。

七月からは移動公演「べっかんこ鬼」と「ゆきとおにんべ」の二本のけい古に入り同時に秋の公演(12月9日・11日)の、エソデ作「ゴッコロリー伝説」のけい古にもかかります。移動公演も七会場まわっています。全員フル活動です。

(514 津市大門三二一八 仏教会館内
〇五九二二二六二一〇八九)

劇団通信

人間座

全国の仲間の皆さん。お元気で活躍のこととお喜び申し上げます。

私も人間座は京都府ことも青少年芸術劇場として、カリンティ・フリジエシ作、工藤幸雄訳「サーカス」と田中千禾夫作「笛」で中学校を巡回公演しています。つい先日丹後半島へ行って来ました。生徒はとても淳朴で、魚がとてもおいしかったです。

秋には本公演として「京都府文化芸術劇場」として、ロバート・ボルトの大作「花咲くチェリイ」を上演いたします。文学座の北村和夫さんの名演をよくおぼえています。うちの芦田がどこまでやりこなせることが出来るかが課題です。では、ごきげんようしう。

(606 京都市左京区下鴨東高木町十一)

〇七五七二二一四七六三

演劇集団石るつ

梅雨の晴れ間をぬって登場いたしますは、

「石るつ」公演「はったり医者」。

今回は地元の協力劇団「ちるる」との提携公演で、なんと、喜劇をやらして頂きます。

普段の姿をみれば、喜劇を地でゆく我々ですが、舞台にのせるとなれば、はて、どうなることやら。着なれぬ着物の据前をはだけて、お江戸の春に新人類も登場! 観客席も花盛りになりますよう、全員疾駆して、幕開きを待っています。

◇演劇集団石るつ・演劇研究会ちるる

提携公演

「はったり医者」(喜劇)

原作・矢野 喬 台本・演出 境野修次

7月1日(金) PM 七時

2日(土) PM 二時、七時

於 深川江戸資料館小劇場

(いとうエリコ)

(135 東京都江東区白河二一三三八

吉川複写工業内 境野氣付

〇三六四二二六三三三

劇団・伊丹市民劇場・やぎ

伊丹では田植えの準備が始まりました。

さて、私も劇団やぎは去る5月22日、29日、6月5日の各日曜日に、第11回こども劇場「時間どろぼう?!」原作「モモ」(ミヒヤ

エル・エンデ作、大島かおり訳)IIを脚色山

田みどり、演出山本哲也で四ステージの公演を行ないました。毎年恒例の春の児童劇も定着してきたのですが、公演終了後に、主役を演じた中堅の女性団員の退団や、学業専念、健康上の理由からの休団があったりで、たいへんシンドイ局面をむかえております。

昨日も、西会議の梶事務局長よりも、札幌での参加の確認の電話があり、説明しそびれてしまいました。事務局を担当している私自身も美術館の仕事で東に西に出張が多く、劇団のみなさんに迷惑をかけております。

今回の劇団通信は何故か、劇団のきびしい状況報告となりました。こしはらくは劇団やぎの暑い夏が続きます。

(664 伊丹市千僧字船原二〇一九 坂上方

〇七二七七八一六五五〇

(編集部より・卒直な報告だけに、事務局担当の私のお名前が知りたくなりました。)

世に下乃一座

六月二六・一九日 俳優座劇場ワークショップ提携公演に新作、岡安伸治作・演出で

「ドリーム・エクスプレセ・AT」。

八月「かちかち山のブルートン」を携えて、旭川から札幌。

九月 若手下剋上公演 下川志乃が作・演出の「チクロ育ち」 池袋バモス青芸館。

一〇月 「太平洋ベルトライン」で鹿児島
十一月二五―十二月四日 新宿シアター・トップスで。作品未定。

等々、あいかわらずのバタバタです。

◆付記 「小豆島演劇祭88」については、雑誌「演劇と教育」六月号に関西芸術座の道井直次さんの詳しい報告と参加者による座談会が掲載されております。興味のある方は御一読を。

(176) 東京都練馬区豊玉中3-5-2-304

岡安伸治方

〇三一九四八―七三三八

制作についての問い合わせは

〇三一九四八―七三三八 カトー

劇団湖(うみ)

全日本演劇フェスティバル・イン・サッポロまで、あとひと月とちょっと。心はあせれどやるのが沢山あって、なかなか思うように進まず、苦しい時期を迎えています。

よい舞台を創りたいと言う気持と努力をすればそれを手中に納められるという希望があるからこそやっていられることなのでしょうね、芝居とは。そうでなければ苦しいことの

ひとつぶやきたくなっています。

北海道の片隅の炭礦町が、今まさに歴史を閉じようとしている現実の中で、地域劇団がどんなに苦しくともやらなければならないことがあります。しかしより多くの住民を巻きこんで――。

それが、この「ざ・ほろない」なのだ、プログラムを見ながら、それぞれ関わっている人々が自分に言い聞かせているところだ。

かなり無理をしてお上演で、余りの未熟さに笑われるのではないかと、気おくれしたり恐がっている出演者もいます。勿論、創造上の甘えは許されるとは思わなければならないけれど、今、なげ、「ざ・ほろない」なのか。そして三笠市民がなぜこれをするのかを、きっちり胸に秘めて、皆さんの前に立とうと話し合っています。お逢いできる日を緊張と楽しみの複雑な思いで待っております。

(068-21) 三笠市本郷町五七八―九加藤方
〇二二六七―二二三四四

劇団銅鑼

私たちは、五月二五日を皮切りに七〇日間の旅公演に出ました。作品は、大峰順二台本、早川昭二演出の「燃える雪」です。昨年に引き続き全国公演ですが、今年は鹿児島から青

森まで縦断します。旅班は総勢で三五名。かなりの大所帯です。つまり、劇団がそっくり移動しているようなもの――。したがって、東京を守るべき留守部隊はほとんど新人。毎日、なりひびく電話をとっては、???と奮戦しています。それはともかく、「生命の重み」を見つめるこの作品、ただただ旅班の無事と健康を祈るばかりのこの頃です。

そして帰京直後、劇団総会、九月公演(朝日生命ホール・20日・22日)の稽古と夏休み返上のスケジュールが続きます。作品は、ヴィクトル・ローゾフ作、早川昭二演出の「明日へ出発」―グッドラックより―です。この作品では、まさに劇界の明日へ出発する若者たちの躍動的な舞台を狙っています。その後秋ふける頃に「あっぱれクライトン」が九州公演へ旅立ち――。ロングランを続けた作品ですが、いよいよ今年で打上げです。悔いの残らぬ仕事にしたいと思っています。

というわけで、かなりつまったスケジュールを消化していく私たちですが、そこにもうひとつの大仕事、全公演「東会議ブロック」を中心に企画された初の合同公演「ドキュメント三宅島」が加わります。ついに、というかなるべくして、というか……。演出は、我が

劇団の早川昭二ということになりました。参加劇団の活動地域、稽古時間、経営形態等々かなりの相異を克服していかなければ、とうてい不可能なこの取組み……「やっぱりねえ」などと評論めいた冷笑をかわぬよう心してかからねばと思っています。平和を愛する人々が身をもって通す自治主権――きつと、主題が、取組む我々を励してくれるものと確信しています。

ともかく、「燃える雪」に始めて、燃える島、三宅島へと燃焼しっぱなしですが、ときには息抜きの酒でも飲み交しながら燃えつきぬように頑張りたいと思います。

これは、激動する時代のなかであって、劇団が活きて反応していく最大の証ですからね。展望――、切り開く道は、やはり幾百の理屈をならべたてより、確信をもってガッチリとした行動を組む以外にない、と思います。というところで、全公演の皆さん、失礼します。

夏の北海道、88インサッポロでお逢いしましょう。よろしく――。

(J・O記)

(171) 東京都豊島区池袋四一七六四

〇三一九八六―四九七七

劇団名芸

名芸は第32回公演、シェイクスピア劇場No.10として、「ベニスの商人」(脚本/栗木、演出/柘植)を終えたところです。平針小劇場で約五百人の人たちに観てもらったわけですが、アンケートも50%近い回収で、全体に好評でした。とはいえ、喜劇としてのテンポや滑舌に色々課題を残した公演といえます。

引き続き、研究生の卒公の準備に取り組んでいます。(7月9日(土) 10日(日) 平針小劇場)「天使のプレゼント」作/長岡芳枝・栗木、演出/片野耕治です。約7人の研究生が一所懸命取り組んでいるところです。

他方、名古屋は、世界人形劇フェスティバル88名古屋で湧いており、7月31日に名芸の子供劇場のホームグラウンドでもある南図書館ホールで、ジム・ギャンブル マリオネット(米)の「地上最大のミニサーカス」他を上演します。他団体と共に公演成功のため取り組んでいます。人気が沸騰で、2ステージをいかに割りふるか、頭の痛いところです。

夏恒例の子供劇場も、南では20回を迎え、名芸としては「ともだちトムトム」(脚本/栗木、演出/栗木慶子)を上演します。
8月27(土) 28(日) 平針小劇場

9月10(土) 11(日) 南図書館ホール

また秋は、名古屋劇団協議会(名劇協)の合同公演で、大作「ペール・ギュント」(原作/イブセン、脚色/栗木、演出/若尾正氏)に取組みます。

11月11(金) 13(日) 名古屋市民会館ホール。

6月20日、名芸稽古場において、80名近い参加を得て結団式を行い、スタートしました。若尾氏も張り切ってみるし、名芸としても、演出グループの柘植をはじめ、全員参加で成功に尽くしたいと思っています。乞御期待! よろしく!

(468) 名古屋市中区平針一丁目一八〇八

〇五二一八〇三―二九二二

お急ぎの連絡や小包類は左記へよろしく。

(457) 名古屋市中区沙田町11番8号

〇五二一八二―三六九一 栗木

劇団だいこん座

四月十六日に園山土筆作「落ちこぼれの神様」を鶴岡市中央公民館ホールにて上演しました。

アンケートを見ると「わかりやすかった」「楽しく笑えた」「ボロボロ泣けてしまった」など芝居のおもしろさはそなえていたと思

之さんが、何回も八戸に来て下さったことに深く感謝しています。

六ヶ所村（八戸から一時間余）核燃料再処理工場が、県民の意志とは無関係に動き出すとしています。

次の公演も現在（いま）だから、やらなければいけないものと考慮しつつ、団員一同動き出そうとしているところです。（風張）

（031）八戸市鮫町無島町一四 梶谷方
〇一七八—三三—一九一三
劇団群馬中芸

とうとう私達の『未来スタジオ』が完成いたしました。建設運動を始めて十年、県内外の多くの方々の出資や寄附金で今、赤城山の麓にまるで大地から生まれたかのように鉄筋コンクリートの建物が陽光をあびて立っています。

『未来スタジオ』の建設運動は、従来の一劇団がその専用劇場としてでなく、ましてや企業などによる商業劇場でない、この地に新たな文化の興隆を願う人々の精神を結び、きづなを広げ、を希求する「群馬未来劇場」を建設する千人の会（会員数六月末現在一〇六六名）の人々によってその運動が進められてきました。

康子さんを支える全国連絡会がスライドを制作、ナレーションを林陽子がやる。タイトルは『おことわりします……自衛官合祀訴訟の記録』。

●アジア太平洋資料センターが、フィリピンからの出稼ぎ労働者取材してスライドを作った。ナレーションを展望で引き受ける。題名は『生きるために海を渡って』。

●引続き、ま昼のちようちんシリーズNo.四一『開発ユレイ』、No.四二『サンタクルスの病院にて』の改作に取り組み予定。

（樋口千鶴子）
（166）東京都杉並区阿佐谷南三の三の三二
〇三—三九三—二七三九
劇団埼玉

皆さん今日は。

劇団埼玉は今月ちょうど五十三回目の公演を終ったところです。出物は「空を飛んだ鶏」と銀色の松ボックリ（作・可能あらた 演出・川村武夫）

既にかなり上演されているので作品の内容についてふれる必要はないと思いますが、大変シリウスな内容のこの「叙事詞の寓話劇」を上演するには、朗読の素養も要求されるし、歌や踊りの能力も必要とされます。ところが

ですからその機構も今までの劇場や各地の会館ホールと全く異って、劇場となるスタジオ空間には固定した観客席や客席もないフロアーそのままの状態です。そこにこの春から手造りの可動式の舞台と客席を造っています。ブロックに分かれていますので必要に応じてどんな形にもなり、円形劇場風にもできるものです。様々な芸術ジャンルの公演や発表の可能性を内包した創造的な空間です。舞台照明や音響・幕類は、現在は私達の手持ちのものを使うしかありませんが、龍前照明研究所の方々に始め様々な人々の労苦によって劇場としての機能をそなえつつあります。まだまだ設備や機能面では不十分さが残りますが、その名の通り未来に向けて常に動いている、生まれ変わっていく劇場になるでしょう。

七月十七日から一週間、私達の他群馬歌舞団や人形劇団みづばち、劇団風などの公演や音楽家による空間音楽演奏、ジャズコンサートが記念公演されます。

全里演の皆さん、群馬に立寄る機会がありましたら是非『未来スタジオ』に来て下さい。（秋山としひこ）

（編集部より・新しい住所は四三頁にのせてあります。）

劇団展望

●昨秋上演した、ま昼のちようちんシリーズ、No.四〇『押捺』の検討・手直しエンヤってきてヨイヤク、やった！と思っただけなら本年六月一日より外国人登録法の八新法が施行され、あえなく、歴史の芝居となってしまった。新法は「前に一度でも押した人はそれを転写するからよい」と、押捺拒否者の意志を踏みにじるかたちである。詳しくは、展望の雑誌『足手』No.3に芝居、『押捺』とともに最新情報が掲載されます。

●その『足手』No.3には、劇団はぐるまの小林泉さんの「称好！中国通信」、スタニスラフスキーの「俳優の仕事・第三部」にあたる、役に対する俳優の仕事（内田透訳）、展望集団創作『猫足の墓——戸籍を死んで』等々……ザッと四〇〇ページで七月発行。

●六月二十三日、展望企画「ルポルタージュ」の会で『在韓被爆者問題を考える夕べ』を共催。講師はフリーライターの中島電美氏。同氏編集のビデオ、『恨！イルボンサムイ在韓被爆者の訴え』（中国放送制作）も上映した。地方局の力が東京では見られないこともケツコあるみたい。

●殉死自衛官、護国神社合祀、問題で中谷

どれも私たちが大変弱いものばかり。いきおいその弱いものの稽古に力と時間をさかねばならず、ドラマ總体の創造のための力の集中、エネルギーの燃焼が不十分に終わったのが、正直なところだ。

しかし現在の埼玉の若手、新人たちにとっては多くの意味でよい経験、勉強になったことは事実です。観客は約四〇〇名、普及の方でもっと頑張らなければなりません。

今年の後半は七月と九月に児童劇の移動公演が予定されています。なお十二月十二日、十三日には、東京の砂防会館で、『柚之木谷譚』の再演が決まっています。忙しい秋になります。

（330）大宮市染谷一七—一四
〇四六八—八四一—三〇八二
演劇集団・あり

七月三日、鳥取市民会館での県演劇連盟合同公演に、私たちは前田あきら作・演出の、『新釈りんご姫』をもって参加するため、最後の仕上げの稽古を続けています。

歴史もあり安定した活動が続けている鳥取市の二集団との、競演のような型でのホームグラウンドを離れての公演に、不安と期待をもちながら、米子市で唯一活動を続けている

「あり」の力を広める機会だと頑張っています。

近年、地域の高校演劇も盛んになり、質的にも向上しています。先日高校演劇祭を観劇し、我々もより向上しなければと痛感しながら、あの若者の殆んどが地元に着てできないことに復たたいと思います。

せめて、若者たちに文化活動の場をと、市民サイドで、新しい文化ホール建設の運動に私たちも参加し、活動を進めています。

（683）米子市昭和町23
〇八五九—三三—九三〇二
宮倉義文

劇団未来

真夏が近づき、冷房のないケイ古場、汗を多くだそうと思います。

第三十回公演・創立二十五周年記念公演No.2・第十二回大阪春の演劇まつり参加のこばやしひろし作「カンナの咲き乱れるはてし遠い遠い戦争よ」は五月二十一日、四ステージ、観客六八六名で無事終了することが出来ました。

岐阜弁を大阪弁にテキストレジして取り組んでいたところ、この芝居の原本は大阪が舞台で、しかもモデルと思われる人は大阪に現

存しているではないか、さっそく連絡を取ったところケイ古場にかけつけていただき、多くの資料と戦友たちへの呼びかけをやっていたが、今公演が成功した大きな一因となりました。

特に今回の公演はこばやし作品を取り上げたというだけでなく、多くの方々の協力を受け、創立二十五周年記念公演にふさわしい作品となりました。

—今後のスケジュール—

・九月上旬、演劇教室の卒業公演を森本景文の三連投演出で上演。

・秋の新劇フェスティバル参加公演は11月11日、18日、20日、22・23日、12ステージを寺下保演出で劇団ワークスタジオで上演。

(下)

(536) 大阪市城東区成育一四二五

〇六九三九一五七七七

劇団若者座

前略。久々の登場です。

昨年、初めてジェームス三木作の「愛さずにはいられない」に挑戦しました。観客動員は予想以上で四百人。

今までの若者座のカラーを破った芝居で、ファン層も広がってきたようです。今年は引き

き続き、ジェームス三木作、天羽新平演出による「結婚という冒険」を上演します。

日時 11月25日(金) PM 6時

於 宇部市文化会館

この芝居を上演するにあたり、先日好運にも講演のため来宇された三木氏との懇談の場を設けることができ、戯曲に対する作者の意図等聞くことができました。これから夏に向けてたくさんイベントもありますが、とりあえず、わが劇団の老若男女はバワフルにそれぞれの結婚という冒険をかみしめながら、台本とにらめっこしています。かしこ

PS 北海道フェスティバルには残念ながら一人しか出席できません ガマン 次回はぜひ参加したいです。

(755) 宇部市昭和町四一八二六 向井方

〇八三六二二一七四六八

劇団夜明け

今年は五回目を迎えた親と子の劇場「ユタとふしぎな仲間たち」(No 25公演)の、中津川文化会館での公演を6月25・26日に終え、7月3日の恵那文化センターでの公演に向け連日夜遅くまで、稽古場に声が響いています。今回の公演では、演出以外のほとんどが役者につき、人手不足に頭を痛めている公演で

すが中津川公演で二〇八八人の親子に観て頂いた中で、先日発足した、劇団夜明け後援会の方々が、多くの人にチケットを広めて頂けた事に一同心強いものを感じています。

又今公演を、名古屋演劇集団の丸子さん、劇団はぐるまのこばやしさん、遠く東京の青年劇場の田端さんに見て頂き、貴重な意見を頂きました。この意見を参考に、さらに内容を高め、恵那公演に向けたと思います。

八月の札幌フェスティバルには、夜明けから七名参加します。北海道で皆様にお会い出来る事を楽しみにしております。

△次回公演予定▽

第七回稽古場公演(No 26公演)

10月下旬・11月初旬 劇団稽古場

ヴェンゼル・作 小沢僥謳・訳

「家族」

(508) 中津川市北野丸山

〇五七三六五九四九三七

劇団四紀会

創立三十周年記念公演、内田昌夫の神戸庶民史三部作は、それぞれ三十数名が舞台に登場、三箇月間隔の公演、劇団の総力を結集した三づくしの大事業でした。四作目に予定していた桜井敏の未来宇宙を題材にした創作劇

は、討議の結果、戯曲が十分に練られるまで上演を延期することになりました。やむを得ない決定でしたが公演日まで発表していただ

に、ショックは少なくありません。

記念公演に費やしたエネルギーの回復し、三十一年目からの活動を展望するため、現在、日数と時間をかけて劇団総会を開催中ですが、とりあえず秋の公演は有志劇団員の自主企画で小劇場をやるということになりましたが、「演劇会議」が発行される頃には何組かが稽古に入っていることでしょう。

それに今年は演劇教室の二十周年でもあり、卒業生による企画委員会が十一月に記念公演を計画中です。もちろん劇団員がその核です。エネルギーの回復もひととき、今秋は再び目の回る忙しい季節になりそうです。

全リ演劇フェスティバルへは六人が参加予定ですが、よろしく。

(655) 神戸市中央区元町通2-9-11 612

〇七二二三九二二四二二

鉦路演劇集団

六月二日・四日、第六回けい古場公演「花のさかりに死んだあの人」(清水邦夫作、波多野耕演出)、三ステージ、一二三名でした。今は、秋の創立十五周年記念、第十六回公

演「小さき神の作りし子ら」(マーク・メド

フ作、青野陽治訳、浅田要演出)を予定し、けい古に入りました。この作品は三年前に一度上演し、再演となりますが、より完成度を目指し、新たな課題を持って取り組みたいと思います。また多くの団体と共に取り組んでいきたいと企画中です。

団内では、個人個人が責任を持って、劇団・演劇との関わりを持つための自覚を促し、依

存体質を脱けるための話し合いを持ち、それぞれ演劇に対する思いを新たにしました。

公演は十一月十二日、六・三〇、市民文化会館大ホール。

(085) 鉦路市新富士町四一五

〇一五四一五二一四〇五七

劇団すがお

昨夏と今春の創作劇による、創立二十五周年記念公演を終り、ホット長い一息をします。秋の公演は、恒例の員弁郡中学校巡演の予定で、只今、レポートリ選定、学校等と打合せ中です。文化祭シーズンを前に、各学校からも上演依頼が届き、嬉しい悲鳴をあげています。

夏の北海道フェス、二家族、十一名で参加します。

(511) 桑名市森忠睦美丘一〇五八

〇五九四一三一四二一〇

演劇集団土くれ

〇五月七八日、一九八八年度の定期総会を二十一名の参加で開催。

創立二十一年目を、従来のマンネリから脱皮し、大胆な発想で取り組んで行こうと、新運営委員には若手メンバーも迎え入れま

した。

〇現在、若手は、稽古場試演会として、勝山俊介作「嵐」を、二グループに分かれて取り組んでいます。演出抜きの自主稽古も含め、どんぐりの背比べ、よろしく、楽しく、真剣にやっています。

古手は、照明の学習会、秋作品の脚本選定で奔走中。秋の公演は十一月下旬、東働演参加で、二・三ステージの予定です。

〇夏の全リ演北海道フェスティバル実行委員会の皆様、御苦勞様です。私達も集団内で実行委員会をつくり、十数名の参加を予定しています。創造的に大いに吸収し、秋以降の活動に備えていきたいと思っています。(川村)

(105) 東京都港区西新橋二四一

森山ビル4F 福田事務所内

〇三二五〇八一〇一〇四

劇団四日市

六月十二日、「黒さんを偲ぶ会」に出席。今更のように黒沢参吉さんの、演劇にかける情熱のたくましさを感じました。

黒沢語録といふべきか、ひとつひとつの言葉が私の脳裡につきささっておりまう。

「人間ってのは、沢山、ボロを背負って生きて行くもんだよ」。会場内で、私の知らない女性が、黒沢さんに、こう教えられましたと話されました。

午後四時すぎ、このまま帰ってよかったのかなと思いつきながら会場を出ました。本当はもっとも、黒沢さんのことを話し合うべきじゃなからうかなど。黒沢忌を毎年実行されるなら、毎年、私は出席します。

私の創作劇「炎と燃えて生命(いのち)」

—四日市萬古焼異聞—は、第一稿を経て第二稿を書きあげ、稽古に入ろうとして、作者が欲深く、再改稿。劇団員に迷惑をかけています。十一月五日・六日(土・日)、四日市市文化会館第一ホールでの公演は決定しています。(森けんろう)

(510 四日市市北浜町九一〇

〇五九三五一九四二六)

岡崎演劇集団

今年創立20周年ということで、「とわに生きるもの」と「エセルとジュリアス」の公演を終え、次回「深川安楽亭」の稽古にとりかかるところです。

「エセルとジュリアス」の公演には、訳者の中本信幸さんや、演劇会議の萩坂さんに来ていただいて、たいへん力づけていただけました。ありがとうございます。

今、小劇場公演ということで若手中心に「まほうつかいのでし」の稽古にも入っています。若い力が、劇団をどうひっぱっていかるところです。

「まほうつかい」として
8月20日(土) PM 6:30 甲山会館
「深川安楽亭」
12月11日(土) 12日(日)

岡崎市 せきいホール

(444 岡崎市元町3-10-3

〇五六四二四七二六八)

劇団大阪

全り演のみなさま、お元気ですか?

劇団大阪では、今年の大坂春の演劇まつりに「アトリエ」(作/ジャン・クロード・グランベール 演出/斎藤誠)で参加しました。この作品は、戦後のバリのアトリエ(縫製

工場)を舞台に、優しく、たくましい女達を描いています。

ストーリーは、一九四五年、バリの小さな紳士服工場に、ユダヤの女(夫がナチの強制収容所に連れて行かれ消息不明)が新しく入ってくるから始まります。

背景にユダヤ人大量虐殺や、米ソ対立の萌芽があり、「今の世代の人達にどう観せるのか」、「何を訴えるのか」が課題となりました。

また、劇団大阪では今年の八月、北海道でおこなわれます。全日本演劇フェスティバルに、この「アトリエ」で参加することになり、いっそう良いものにして、みなさんに観ていただきたいと思っています。

それでは、みなさまにお会いできるのを楽しみにしています。

(542 大阪市南区谷町7-1-39 103

〇六二七六八一九九五七)

京浜協同劇団

ことし十二月、創立三〇周年を迎えます。

三〇年間休みなく活動を続けてきたこと、創立メンバーが六名(中沢研郎、細田寿郎、原科清、若菜とき子、水野哲夫、室野定子)も現役としてがんばっていることは特徴の一つですが、問題はこれからです。鋭く個性的な

メッセージ、創作劇を産み出せるみずみずしい集団にしていきたいと、いま討論をすすめているところです。

三〇周年記念公演は九月から十一月にかけて、シェイクスピア作、三神勲訳「真夏の夜の夢」を四会場で上演するのを皮切りに、来年は全り演劇東ブロック合同公演で亀井淳作「三宅島」(仮題)、再来年は劇団内集団創作「ヒロシマ」(仮題)の三本の本公演を予定、現在執筆中です。

劇団代表だった黒沢参吉が逝って七年目。ことし三月には黒沢が十五年前に書いた「タック・サインの冒険」を、川崎市内の劇団、辻シアター、川崎演劇塾と共に上演しました。市から百万円の委託を受けて十七年間続いている「かわさき演劇まつり」でやったもので、黒沢さんに育てられた若者たち数十人が結果として成功させました。

六月十二日の「黒さんを偲ぶ会」には全り演からこばやし、丸子議長をはじめ大勢の人が参加して下さり、七回忌にふさわしい会になりました。本当にありがとうございます。札幌での演劇フェスティバルには劇団からほとんど全員三十三名が参加する予定です。実行委員会の皆さん、そして出演劇団の皆さん、たいへんな苦労をされていると思います。どうにかよろしく! 楽しみにしています。

最後に、劇団員城谷護(全り演東会議事務局長)は仲間十三人と共に日本鋼管鶴巻争議で組合活動家に対する差別と闘ってきました。が、五月、十年ぶりに全面解決しました。これまでの差別を是正させると共に「今後は差別をしない」と約束させたことの意義は大いだと思います。全り演の仲間の皆さんには署名などで御支援いただきましたが、心からお礼を申し上げます。

(211 川崎市幸区古市場二一〇九

〇四四一五一四九五二)

劇団名古屋

こんにちには、31年目を迎えた劇団名古屋です。昨年6月の「イーハトーボの劇列車」で幕を開けた30周年記念公演も、今年3月の「きらめく星座」で無事、幕を閉じました。

この間には、2度のアトリエ公演を打つ、創作劇を上演するなど、様々な試みをし、一応の成果を得たと思っています。しかし劇団としては、舞台創造力以上に観客動員が出来ずにいるという問題や、劇団員全員が結果として創造に取組む事が出来ない、出来たとしてもそれを持続することが出来ないといったよ

うな問題が残されています。

その問題に取組むべく、31年目の第一歩として、同じ全り演の仲間である「世仁下乃一座」の岡安伸治さんの作品「別れが辻」を名古屋演劇フェスティバル参加作品として上演します。連日のケイコの中、本家「世仁下」の世界にどこまで迫れるか、乞う御期待!

そして秋には、名古屋劇団協議会の合同公演として、「ペール・ギュント」に取組みます。こちらの方も、普段の劇団の枠からはみ出して、参加していきたいと思っています。

そして今度は40年を目指して、劇団員一同がんばっていきます。では、北海道でお会いしましょう。

(456 名古屋市中区新栄二二二一九

〇五二一六八二一六〇一四八夜間V

五三一一九九四七八屋間V

久保田方)

名古屋演劇集団

創立40周年記念行事も、一月のレセプション、五月に記念公演第一弾、井上ひさし作、浦はじめ演出「国語元年」も好評で、動員もまずまずということで終えました。

今、団内において劇団史の学習、記念文集出版の準備にかかっています。

今後の記念公演は、秋は名古屋劇団協議会の合同公演となりますが、劇団としては40周年行事の一つと位置づけて、取組む予定です。

演目はイブセン作、栗木英章台本、若尾正也演出「ペール・ギュント」で市民会館で、11月11日（金）・13日（日）の五ステージの予定で、それから40周年記念行事の打ち止めとして、若尾正也の名古屋市芸術特賞受賞記念を兼ねて、三月に「楽園終着駅」の再演を予定しています。

北海道演劇フェスティバルの参加は、お盆の連休が続くこともあったりしてか、五名程の参加となります。（沢田靖一）

（451）名古屋市中区庄内通り四一六・一三〇五二一五二四一五九七五

劇団京芸

〇 四年目をむかえた「陽気な地獄破り」は、各地の「おやこ劇場」を巡り、四月には劇団としては実に三〇年ぶりの東京公演で何人かの方に観ていただくことができました。

〇 「ホルストメー」ある馬の物語」（トリスイ原作・M・ローゾフスキー脚色・藤沢薫演出）は全国高校を巡演中です。

〇 九月公演・京都府文化芸術劇場・九月十五日より十七日（文化芸術会館）・十九日

（大阪郵便貯金ホール）は、レフ・ウスチーノフ作の「金の花束」（藤沢薫演出）に決まり、このところソビエトづいていきます。

〇 北海道演劇フェスには劇団から二名参加します、皆さんとくに北海道の劇団の皆さんにお会いできるのを楽しみにしています。

（612）京都市伏見区納所北城堀31・18

〇七五・一六三・二六〇九

劇団からつかせ

第一九回公演の「ザ・シュルター」（作・北村想、演出・鈴木克法）、7月1・2・3日を無事終了しました。今回は活動劇団員も少なく、演出、舞監が共にキャストをも兼ねるという苦しい状態でした。

けい古場にも毎回5・6人しか集まらない状態が続き、さみしい思いをしました。しかし芝居自体は非常に好評で、がんばった甲斐がありました。ただ、キャストの人数が少なかったためお客さんを今一つ集めきれなかったのが残念でした。

今回は、けい古場ができて最初の公演ということで、練習当初からけい古場が使え、実際に舞台装置を設けての練習を重ねることができて、けい古場のありがたさを身をもって感じました。さて次の作品も決めなければな

りませんが、先にのべたように劇団員の減少が著しいので、新人募集から始めなければならないようです。

（431）02 浜松市篠原町二一五〇五

万五三四・四九一〇九三七

△編集部より・上演写真は次号になりましたのでご承知下さい。次の同胞も同じくV劇団同胞

真夏日が続く旭川です。この暑さの中で第

20回公演、宮本研・作「人を喰った話」を、沢田和彦・演出で上演しました。6月25日、旭川近郊の当麻町で一五〇名の観客がありました。7月3日、旭川での2ステージでは、北海道演劇集団・旭川・留萌ブロック演劇ゼミナールも兼ねたもので一四〇名の観客でした。ゼミナールの劇評会には、羽幌の「うみがらす」、オプザバーの旭川「ネブラズ」、加盟検討中の旭川「シアター・ゼロ」の参加。

前号の劇団通信で秋の公演に後藤竜二・作「地平線の五人兄弟」を予定していましたが、登場人物が多く、劇団の状況では上演不能となり、かわって吉田足日・作「忍者落第生」を団員の大門正の脚色により行う予定です。

（071）旭川市末広千条8丁目 高桑方
〇一六六・一五七・一三八三六

東会議・総会を終えて

石垣 政 裕

（仙台小劇場）

川崎は暑かった。首筋がべっとりと汗ばむような天気である。ついこのあいだまでセーターを着ていた仙台からきたものだから、息苦しくて耐えられない。駅前にそり立つ大手スーパーの壁面は、輪郭のぼやけた太陽の光を、高架と壁面との間を申し訳なさそうに通り返して行く歩道の上に、なんともメタリックに照り返した。店の前につくられた、なんとも殺風景な、コンクリートの窪みが「広場」だという。日中だと云うのに平板に薄暗くライトニングされた地下街も含めて、このような空間を移動する間に人間はついぶん機械的な圧縮・膨張を繰り返させられている。そしてそのたびに、自分の中の格子にゆるみを生じ、一本一本抜け落ちていくような気がしてならない。川崎は「労働者」の街だとばかり思っていた。彼らの息子・娘はここで生き生きているのだろうか。

総会の討論は「展望なんてそもそものなかっ

たんじゃなからうか、なくてもやっていけるんじゃないだろうか？」という意見が総括した。あっちこち歪んだ格子を釘で一つ一つ固定する作業に手古ずっているうちに、上から透明の薄いフィルムですっぽりと覆われてしまったような気がする。妙に体が軽いのだ、みんなと分かれた後、課題の重さにひとり溜息をつくような例年の総会とは色調が違っていたようだ。

全日演東会議の総会は6月4日から5日昼にかけておこなわれた。川崎市内にあるサンライフ川崎と神奈川県労働教育福祉センターのとなり合った二つの施設が会場である。参加は21集団、37名。議長は昨年に引き続き石垣（仙台小劇場）、境野（石るつ）が当たった。この議長の選出理由が、激論を戦わせた一昨年の総会を受けた去年を穏健のうちに終わらせた功績だそうで、なんとも、最初から

妙な気分の開幕であった。

議長団を代表してこばやしひろし議長が挨拶。総会議案書には議長団として本音で書き合った議案書に載っているのだからこれを発表として議論を出し合って欲しい。今日、各集団がどんなことに悩んでいて、組織的統一の困難性を抱えている。それを本音で話し合うことが必要であることを強調した。また、北海道演劇フェスティバルを成功させるための討論を期待するとも。

西会議を代表して仲武司議長が挨拶。

今日は「演劇花盛り」の時代なのだろう。演劇をやっていることが文化的装いとなっているのだそう。後で報告のあった名古屋の場合は如実にそれを物語っていると言わなければならない。演劇フェスティバルに若い小劇団が殺到し、整理に苦慮しているとのことだ。だが、それを喜んではかりはいられない、と警告する。世界最大の広告会社「電通」がいよいよ学校演劇にも進出してきたのだ。手弁当で「いい品物ですよ。一つ手にとってご覧になって見ませんか」と足で稼いだお客さんの自宅にスーパーのきらびやかな折込広告

が突然配達されたようなものだ。学校演劇と劇団との橋渡しをやるということで、いい反響も得られているらしい。こんなわずかの手数料で世界最大の広告会社が単純に動くわけがない。とすればと仲さんは分析する。ペビームが去り、各学校ではそれぞれ生き残り策としてより、個別的な特色のある活動を生み出そうとしている。これが、小集団がそれぞれ特色のある舞台を目指して百花繚乱のごとく咲き誇る今日の演劇というものに結び付けていくだろうと「電通」のブレインズは考えたわけだ。それは、学校に限らず、自治体なり、地域の顔と密接に結び付くことによって資本が動いていくことを彼らの鋭い臭覚が感じとっているのだろう。

仲議長は「われわれにとっては地道な努力によってしか生き残る手だてはない」と言い切った。

議長団各位、各ブロックからの報告を受けて、その中から問題の抽出をやるうということになっていった。そして次の二つが問題としてくることができた。

(一) 若者をも包み込む地域の現代化、多様化にどう対処していくのか。その中で魅力的

舞台とは一体なんだろうか。
(2) 指導者が疲れている原因は何か。どうしたらそれを打開できるか。

釘崎氏(東京芸術座)によれば、今は、企画を考える基盤が緩んでいるとの報告があった。対話劇では生徒が騒ぐからと学校公演ではミュージカルが増えているのだそうだ。

「歌と踊りに若者が集まっていることはわかるが、一方では「カンナの花……」や「今日私はりんご……」の様な硬派の作品も出ている。」(はぐるま)と言う発言と「今日私はりんご……」はいろいろあった挙げ句一〇〇〇人のキャバに二五〇人しか動員できなかった(弘前)と言う報告とは矛盾している。それじゃはぐるまが動員した「今日私はりんご……」の観客はなにをよりどころに集まってきたのだろうか。

地域性というものの捕らえ方がメディアや交通の発達と共に薄らいでいる。(仙小)だからこそ地域性により固執する自治体がふえつつけている。

北海道では行政からの要請があり、雪まつりのときにアマチュア劇団の合同公演をおこ

なった。その後、道の主導で移動公演もできた。このような活動から行政サイドからも認められた。(渋谷健一：北海道演劇フェスティバル実行委員長)

生の舞台を見ることに対する喜びが地方にも生まれてきている。「労賃」東京の芝居を見る」という構図だけの鑑賞から離れ始めた。従って地域をどう掌握しているかが問題なのだ。「八戸にいるんだ。岐阜にいるんだ。」という意識を確立し、地域を踏まえた創作劇を作り出す必要がある。東京だって「使い捨ての創作劇」「二度と他の劇団ではやられない創作劇」で息をしているわけだから。「コントでもいいから地方に根ざした劇を書く必要がある」(こばやしひろし)

コントでなく芝居を生み続けている劇団は強い。

征谷さんが書き続けている「東風」。「はぐるま」の一連の作品。「銅鑼」の「燃える雪」。これから三宅島の問題に取り組むことになった関東ブロック合同公演。

しかし、多くの劇団は、「地域的にふれ合いの機会があるのだろうか、芝居だけに陥っていないだろうか(弘演)」という疑問を噛みしめなければならないのだろう。

劇団の指導部が疲れているとの指摘(中沢)がある。

稽古場を自前で作っているうち疲れてしまった(からっかぜ)場合もある。演出が早く来てご飯を炊き、三々五々集まってきた劇団員に夕食を食べさせてからやっと稽古に入ることでできる(支木)涙ぐましい場合もある。男は疲れているのだ。8時間労働などと言う言葉は拳を振り上げている昔の自分とともにセピア色の写真の中に行儀良く収まっている。労働時間の半分が残業だと言うケースまである(仙小)。

男の劇団員が入らない。現実問題として稽古場から男が消えた。文化から男が消えた(支木)。スタッフのチーフがほとんど女性になっている。「俺は九州男児、女が威張っている劇団は嫌いだ。」といつもしょうがない。無視されるだけである(仙小)。

組織的に力はある場合であっても、自らが創造した喜びになっていないので、創造的鋭さが欠けてくることもある。全員にやる気をおこさせるためには、マンネリから抜け出すためには、古手を見習わぬように新人教育をしている(土くれ)場合もある。この場合残

された古手はどこへいったらいいのだろう。

創造の過程で徹底した民主主義を貫く。話合いだけでなく、その責任をとうとうという姿勢でいる(銅鑼)。それはとてもきびしいことだ。とにかく、男は疲れている。

「うむ、確かに俺も疲れている」と思っていると「一見劇団がうまくいっているときは男性が頑張っているように見えるが、それは砂上の楼閣で、現実には女性が支えている。」(銅鑼)という意見がでた。集まった男性の参加者に大脳皮質を直接コッソンと叩いたような刺激を与えたことは確かである。

女性のカルチャー、演劇志向を「抑えて議論して欲しい」という北原さん(演集)の意見は全くの現実である。疲れている指導者は男に違いない。

選挙にしても女性のパワーの時代だ。(こばやし)そういうばい最近、四国で原発反対の町長を当選させたのは女性票だと言う。

「自分の子供——よその子供——地域」という図式を持っていて、地域という考え方自体、それは女性的な考え方にちがいない(名古屋)。「教育がかつてそうだったように文化もそうなってきた(中沢)」という言葉

を待たずに、演劇こそがそこを先取りしてみたいものである。

この問題は演劇会議の座談会として是非とありあげてもらいたい(京浜協同)との提案があった。

さて、この問題の途中「男性の頑張り」砂上の楼閣論から発展して「展望なんて本当はなかったんじゃないか、なくても生きていけるのではないか」「展望なんて役に立っていないかった」(銅鑼)ということばに、当然会場から反論はくるだろうなと思っていた。が、ものの見事にその期待は裏切られた。「そういっても、わたしもふくめてみんな昨日まで展望を求めてきましたよね。少なくとも自分の劇団で展望のない総括には反対してきましたよね」とそういう目で意見を促そうとしたのだが、何しろ自分自信がギブスを外したときのあの感覚と「展望なんて本当はなかったんだ」と思い込むことの秘かな罪悪感との間を揺れ動いていたのだからしょうがない。

「創造と普及、劇団を維持していく部分とを分けてみる。そして目に見える問題と取り込むことでやるが見えてくる。」という

言葉に否応なしに励まされてしまうのである。

「展覧なんて本当はなかったのだ。砂上の楼閣だ。」といわれるとボケーンとなってしまふ。「男が作り出した妄想だ」といわれるとハアとしか言い様がない。

仙台小劇場も何年か前までは何ヶ年計画を立ててきたが、途中からそれが成り立たなくなってきた。そしてある時から何ヶ年計画そのものが総会には登場してこなくなった。これは指導部の怠慢だという意見があったりしたが、そんなことはもう身丈に合わないんだということをもみんなが意識し始めていた。劇団体制も公演を重ねる度にどうやら弾力的に運営できるか試行錯誤を続けている。そしてむしろその方が、劇団を長く続けていくコツだと薄々感じている。ただそれを明文化するのは勇気が少しばかりいる。そんな展望のないことではないといわれ続けて来たからである。なにか肩の荷が降りたような気がする。「これからだ。これからだ正念場は。」

総会ではこの他に渋谷健一北海道演劇フェスティバル実行委員長を迎えての討論の機会

と「演劇会議」についての討論があった。ので付記しておく。

北海道演劇フェスティバルは当日の集計で全り演からの参加者が二〇〇名を超えることが確実になった。自治体からの援助もうまくとりつけることができて成功しそうだとのうれし報告があった。

「演劇会議」については、例年、三〇分ぐらいしか討論がされなかったがこの日は飲みたい酒を前にしても充分討論をすると言うことをやってのけた。紙面の都合で十分書くことができないので歯がゆいほどである。ここでは主要な項目だけを羅列する。

(1) 編集長の負担を軽減するため各ブロックで責任を持ってやってほしい。一括納入制、前納制なども考えてもいいのではないかな。

(2) 戯曲特集号は別に出したらいい。その時には編集者を別にすることも可能だ。

(3) 内容については、ブロックの頁中部・奥羽は好評だった。

劇団訪問をぜひ実現してほしい。親しみを受ける。複数になればよいが簡単には行かない。これはブロック会議で日程から段取りまで考えてほしい。

全り演・前議長 黒沢参吉氏 七回忌 「黒さんを偲ぶ会」から

城谷 護
(京浜協同劇団)

六月八日は全り演前議長黒沢参吉氏の七回忌。「黒さんを偲ぶ会」が、六月十二日(日)川崎市内の県立北労働センターでひらかれた。

黒さんが見続けた「夢」を形どって「梵」と大書されたホリゾント代りのパネルには、「演劇は誰れにでもできる」、「芝居ってのはネ、観客を怒らせることだよ」などの、黒沢語録も散りばめられ、その周りは名も知れぬ雑草で飾られている。

偲ぶ会の主催者は川崎文化会議、京浜協同劇団、萩坂桃彦、黒川シズエの四者。主催者を代表して萩坂桃彦「演劇会議」編集長がまずは開会のあいさつを兼ねて「黒さんと青春」の題で語る。二十代から黒さんと演劇活動を共にしてきた萩さんの話はさすがに奥行が深い。「黒沢論を書きたい、書きたいと思いがらまだ書けない。」と語る萩さん。「演劇

会議」に連載して欲しいと思ったのは私ひとりではなからう。

司会を務めた京浜協同劇団の中沢研郎と岡田千尋をあわてさせたのは、多忙なこぼれひろし議長長の到着の遅れ。気の毒にも代って登壇させられた丸子礼二議長が、「もうそろそろ見えると思いますが……」と言ったところへこぼれ議長が「いやア、いやア」と汗をかきながら駆け込んできた。この絶妙なタイミング！ 予想を超える九十六名の参加者の会場が湧く。

「七回忌だから、あんまりしめっぽくやるのはやめようよ。黒さんの思い出じゃなくって、カラッと、黒さんと私、でいこうよ」と話し合った実行委員会の狙いはスタードからキマッタのだった。

夫人黒川シズエさん(黒沢参吉氏の本名は黒川律)のあいさつは実に明るかった。私は

(4) 劇評はブロックの組織的バックアップが必要である。

(5) リアリズムという理念で貫いている雑誌はこれ一つだということに大事にしているかなければならない(後藤)。運動しながら機関誌を利用しようという気がないのはいか。むしろ演劇という行為が運動という範疇に入らないのではなからうか、概念がないのではないだろうかと言う気がする。集団としてこれをどう利用しようとしていくのだ(萩坂)と言う問いはまさにどう運動を展開して行くのかと云うことと同義語なのだ。



三十年前からお世話になってきたが、こんなに明るいシズエ夫人を見たのは初めてである。シズエ夫人は一つのエピソードを話した。自宅付近の道路工事に來ていた男の人に声をかけたら、その人は黒さんの最後の作品「サチの唇」の上演に協力したこともあり、群馬中芸にもいた石橋教二さんという人だった。あまりの奇遇に二人はびっくり。その日はちょうど黒さんの命日だった。神主をやったこともある石橋さんは作業衣から神主の衣裳に着換えて黒さんの霊前で笛を吹いたという。

その笛の音は偲ぶの席上録音テープで披露されたが、エピソードを語る夫人はまるで黒さんと再会したかのようにいささか興奮気味だった。

夫人は、この日に向けて発行された小冊子「黒さんを偲んで」(写真及び文集で二十人の寄稿がある)の中で黒さんと結婚やその後の苦労、競輪競馬労組での活動などについて書いているが、単なる苦労話に終らず、自分と黒沢との関係は何だったのかを静かに見つめ直そうと試み読みごたえのある一文である。

さて、会には遠くから劇団四日市の森健郎さんもかけつけ、黒さんが欲しかったという

麻のベレー帽を紹介しながら献金の音頭をとってくれた。また、劇団やまなみの梅津幸三さんは前日打上げた「象の死」公演に触れ、大幅に減っていた観客をとりもどしつつあると、黒さん、に報告した。

川崎の地で演劇を通じて古くからつき合いのある須田輪太郎川崎文化会議議長（ひとみ座代表）、劇作家の大橋喜一さんも「黒さんと私」について熱っぽく語った。

また、「演劇は誰れにでもできる」と黒さんが各地につくった教室の教え子の団のぼるさん（川崎演劇塾）、大企業の労働災害で夫を奪われ、「稲垣労災訴訟をすすめる会」会長を黒さんにやってもらった稲垣美恵子さん（京浜協同劇団）もあいさつし、元氣いっばいがんばっている報告をした。

注目を集めたのは黒さんを知らない若い世代の登場。「タック・サインの冒険」で主役を演じた藤田るみさん（川崎演劇塾）と明元雲飛子君（京浜協同劇団）らは劇中歌を奉げた。「タック・サインの冒険」は、黒さんがベトナム民話に基づいて今から十五年前に書いたもので、七回忌にあたる今年三月、川崎市内の三劇団が力を合せて上演したものであり、若手が大いにがんばったものである。



お礼の言葉に代えて

黒川シツエ

黒沢没後六年、たまたま三十年勤務した職場を定年退職した私にとって一つの節目でもありましたので、劇団と萩坂さんにお願ひし「黒沢を偲ぶ会」を催していただき、その名にふさわしい集いになりました。

若手に負けじとばかりに、黒さんと長いつき合いのあった人たちが黒さんの遺影を持って壇上に駆け上がり、黒さんが好んで歌った「仕事の歌」を歌い出す。そのとき、輪の中から飛び出し、腕に力をこめて指導をとり出した石渡健司さん。石渡さんはうたごえ運動の先駆者のひとり、神奈川合唱団の団長をやっていた人である。棒を振る氏の胸のうちは万歳の思いがあったにちがいない。

偲ぶ会には黒さんの長男で印刷業にたずさわっている明さん（37才）一家、次男で演劇鑑賞団体づくりに専念している栄さんをはじめ、親せきの人たちも大勢参加してくれたが、明さんや栄さんにあいさつをしてもらう機会を失ったのは残念だ。

そして、ここでは紙面の都合で紹介できなかった人たちの、遠路から多忙な中で参加して下さったその気持ちに感謝しながら、偲ぶ会の報告を終わりたい。

たぶん城谷さんの方からご報告のことと思いますが、私にとりましては、黒沢が何らかの形で、みな様方のお心のなかに生きていることが感じられ黒沢への思いを改めて深く致しました。

貴重なお時間をご都合しお運びいただき、また準備にあたってくださりましたみな様方に感謝の気持ちでいっぱいでございます。

たまたま今日は、黒沢が死ぬ七ヶ月前に「演劇」と教育という月刊誌に投稿した「演劇のがわから、地域のがわから」が目にとまり、しめくりに書いた「ぼくは地域の劇団が、すぐれた演劇をつくることで地域に根ざそうと努めることを、けっして否定はしませんが、少くともその営為と合せて、地域のあらゆる土壌に演劇の種子を蒔きそれを伸ばす作業等を自分たちに課してほしい、とおもいます。

地域のすみずみに演劇でのいきいきした実践をひろげることは、劇団の発展を地域定着の最もたしかな保証になるでしょう」のこの文が、とても言いわたったことではなかったかと感じました。

黒沢は晩年、林竹二の教育論を研究し、地

文集「黒さんを偲んで」

内容

想いの写真集 十三葉

私の中の黒さん

黒さんにおしえられて

戦闘的だった黒さん

つらい幕切れ

黒さん、と、街灯

黒さんとの出会い

黒さんはいつも一緒

クロさんと私

黒沢参吉さんのこと

黒さんと四本の芝居

料理好きの父

僕が京浜に来た日

七回忌に

一枚の写真

優しく強い男

温かい魔力

「タック・サイン」で

出合いがキッカケ

黒沢と歩いた私の半生

あとがき

田島 紳

森けんろう

山本忠利

神谷量平

佐藤張二

和田能久

梅津幸三

大橋喜一

安達元彦

団のぼる

黒川 栄

中沢研郎

萩坂桃彦

須田輪太郎

芹沢清人

こばやしひろし

室野定子

根倉藤子

黒川シツエ

城谷 護

域の文化と、演劇をとおして人間とのかかわりのなから豊かな人間性を生み出すことに ついて熱っぽく考えていました。

私もおもうのですが、私たちが観る側だった文化的なものが自らやる立場になっている（例えば音楽、スポーツ、舞踊、演劇も以前と比べかなり広がっている）ことをおもうとき、その困難性は、わかるような気がするけれども、指針としては正しいといえるのではないだろうか。

演劇について何も知らない私が、おかしいかも知れませんがお赦るし頂ければ幸いです。最後にみなさまがたのご健闘をお祈り申し上げます。

（附記・文集の余分が少しはまだ奥さんのところにあるかもしれませんが、ご希望の方は問合せてみて下さい。

245 横浜市戸塚区上矢部一三二九

〇四五―八一一―三三三―八

黒川シツエ

それにかぎらず、おたよりをぜひ・萩坂）

英国観劇雑感 平田 康

一九八七年三月末から一年間、勤め先の大
学からの留学ということで、ロンドンに滞在
して、主に芝居を見る生活を送った。この間
八月には十日間だけ、スコットランドの首都
エジンバラで行われる国際演劇祭に出掛け、
十二月には一週間、ストラットフォード・ア
ボン・エイヴォンに泊まり込んで、三つの劇
場に通った。

僅か一年のことで、しかもほとんど系統立
てず、手当たり次第に劇場通いをしただけな
ので、現代英国演劇の動向はこうだ、などと
偉そうな報告は出来ない。しかし帰国してし
ばらく日が経ち、短い文を書いたり、あちこ
ちで話したりしているうちに、自分なりに少
しは見えてきたことがあるように思われる。
読者の関心にうまくマッチするかどうか分か
らないが、そしてほとんど他に誰も見ていな
い舞台を種にするハンディを承知の上で、敢
えて駄文を草することにする。

シェイクスピアは現代劇

英国演劇で最も大きな財産は、言うまでも
なくシェイクスピア。特に十九世紀末以後は
シェイクスピア劇をそれぞれの時代に合わせ
てどう演出するかが、一つの大きな柱となっ
て、演劇界全体が進んできたと言ってもいい
だろう。

とはいっても、正直のところ、八七年四
月に見た三本の悲劇は、どれも面白くなかつ
た。ナショナル・シアター（国立劇場、以下
NTと略す）の「リア王」など全然印象に残っ
ていない。同じくNTの「アントニーとクレ
オパトラ」は、壮大な装置の下で小さな人間
がうごめいている感じで、個々の俳優の演技
には感心したが、何か遠い国のお話を見てい
るようで、胸に迫ってくるものは何もなく
た。

ロイヤル・シェイクスピア劇団（以下RS

ラで見た、モスコ・南西スタジオ劇団の「ハ
ムレット」については、他のところに書いた
ので省くが、不満はありながら、「状況の暗
さ、一人一人の孤独さ、権力の無情さ、とい
つたものが強く印象づけられ……エネルギーと
現代感覚にあふれ、強いインパクトを与えて
くれ、戯曲解釈の点でも色々と示唆に富んだ
舞台であった」。

そして、ロンドンのリバーサイド・スタジ
オで見たルネッサンス劇団の「十二夜」、ス
トラットフォードでの（今はロンドンに来て
いる）RSCの「シンベリン」「ヴェニス
の商人」などは、大変に現代を感じさせる面白
い舞台だった。ここでは、その中の「ヴェニ
スの商人」を取り上げてみたい。

この劇の演出には様々な歴史の変遷がある
が、七二年と八一年とにロンドンで見たRS
Cの舞台などでは、「三組の恋人達の喜劇」
という側面が強調されていたと考えられる。
どちらにも一幕二場のポーシャの登場が、鮮明
に記憶にある。前者の舞台には、ほとんど装
置らしいものがなく、ブランコに乗っていた
ポーシャとネリッサとが、それから飛び降り
て、床を転がりながら男の品定めをしてい
た。ちょうど私の席の回りには夏休み中のア

メリカ高校生の一団がいたが、グリーンワ
ンピースを着た舞台の二人が、その女子高校
生とだぶって見えたのを記憶している。

八一年の時は、ポーシャはレインコート姿
で現れ、レインハットをはつと脱いで頭を
振り、丸めていた長い髪の毛をばつとほぐし
てから、この「小さな体には、大きな世界が
つくづくいやになった」としゃべり始めた。
「父親の遺言で自由に結婚出来ない」と涙を
流したのが、未だに目に焼き付いている。そ
してどちらにも、個性あるシャイロック像は創
造されていたものの、恋人達のはつらつとし
た印象を越えるには至っていなかった。

ところが今回は、明らかにユダヤ人差別の
テーマが前面に出て、しかもそれが劇の本来
の枠の中に収まりながら、強い衝撃を与えた
のだった。

舞台の中央には、ヴェニスのリアルト橋を
思わせる橋が掛かっている。奥の壁には、ま
るでゲッターの壁の落書きのように、ダビデ
の黄色い星が書かれている。そして、この星
は裁判の場のシャイロックの衣にも付いてい
た。橋の上を子供達が走り回り、「ジュー、
ジュー」と叫びながら、ユダヤ人を罵る。
それにじつと耐えていたシャイロックだった

Cと略す）の「ロミオとジュリエット」は、
マイケル・ボクダノフの演出。舞台奥の大き
なスクリーンに、先ずは現代都会のビル写真、
やがて各国の指導者の顔が映る。自転車
を押した女の子やローラースケートの男の子
が登場したかと思うと、ティボーはピカピカ
の赤いスポーツカーに乗ってさっそうと姿を
見せる。こうした現代的風俗と同時に、ヴェ
ローナの大公は独裁者、モンタギュー、キャ
ピュレット両家の主人は実業家、という割り
切った設定がなされている。生のロック・パ
ンドが演奏を続け、最後は大公がテレビカメ
ラやフラッシュに囲まれた記者会見の場で終
わる。若者の純粋な愛情が、大人の金銭欲に
駆られた競争の前に、もろくも崩れるという
テーマを押し出そうとした意図は理解出来る
が、不思議と現代性が感じられない。「一体
演出家は「ウェストサイド・ストーリー」を
見たことがあるのだろうか」と酷評した批評
家を見たが、全く同感だ。いくら衣裳や装置
が現代のものであっても、観客が身近に思
うとは限らない。この場合には、理屈の説明が
先行して、行動のリアリティに欠けていたと
言う外にない。

ところが、失望ばかりではない。エジンバ

が、愛する娘のジュシカがキリスト教徒と駆
け落ちした時に、彼の中で何かがブツンと
切れる。例の「ジューには目がないうって言う
のか」という人権宣言には、彼のどす黒い恨
みが詰まっていた。

全体として、この舞台では現代に通じる差
別の本質を見事に見せられた気がした。一つ
は、いわば「普通の」社会人が差別者になる
恐ろしさである。アントニオとその友達ヴェ
ニスの商人達は、仲間に対しては実に礼儀正
しく、上品な物腰の連中なのだ。それが一度
ユダヤ人の方を向くと、聞くに耐えない悪罵
を放つ差別者となる。

もう一つ、差別は差別する者とされる者と
の双方の非人間的存在に陥れること。すなわ
ち、裁判の場面で一時間位に立ったシャイロッ
クは、これまで自分が受けてきたのと同じ仕
打ちをキリスト教徒に仕返しをする。アント
ニオにべつと唾を吐く。その前に、黒人奴隷
の首根っこを掴んで引き摺り、「あんたらは
これを跡取りにするかね」と詰め寄る場面と
共に、彼の悪意ある非人間的行為にぞっとさ
せられた。

すべてはシェイクスピアの本にあることな
のだが、その可能性のどの部分を強調するか

によって、劇は無害な昔話にもなれば、観客

に対する刺激溢れる挑発ともなる。そしてし
つこく繰り返せば、現代性とは決して風俗で
はない。この「ヴェニス商人」の装置は十
七世紀風に思われたにも拘らず、そのメッセー
ジはまさに現代のものであった。

シェイクスピアについて書き出すときりが
ない。一年間の収穫の一つは、同じ劇の、連
う舞台がいくつも鑑賞出来たことだ。例えば
「マクベス」を、半年の間に四本見たのは刺
激的だった。英国チーク・バイ・ジョール劇
団の、装置の一切ない、十二人の黒づくめの
服装をした俳優による、緊迫感溢れる舞台。
上海からエジンバラ演劇祭に参加した昆劇の
伝統様式と斬新な解釈を大胆に結合した楽し
い公演。そして帰国直前にテレビ・チャンネ
ル4の深夜放送で見た、勇壮な部将の登場す
る黒沢明の映画「蜘蛛の巣城」。さらに帰り
に立ち寄ったポーランドのテレビでたまたま
出くわした「マクベス」は、権力者の孤独
さと、相手の言葉を聞きながらじっと心の奥
を覗き込もうとする疑心とを強調することに
よって、極めて現代的な感じを出していた。

しかし、これ以上シェイクスピア劇につい
ての詳述は避けて、「現代」作家の作品を見
ることにする。

伝統をふまえた現代劇

英国演劇の伝統には、劇作の面では観客に
一夜の楽しみを提供するウェルメイドな喜劇
やメロドラマ、そしてそれを支える高度な俳優
技術、特にややスタイリッシュな喜劇的
演技（もちろん台詞術を含む）がある。ロン
ドンのウエストエンドの商業劇場では、これ
が主流と言える。

アメリカの観客を多数吸収しているこれ
らの劇場の舞台が、内容的に現代を鋭く照射
していることはまだだが、形式的にはほとん
ど変わりなくとも、なんとか古い皮袋に新し
いワインを盛り込もうとする努力が見られな
い訳ではない。

フリンジ（ウエストエンド以外の小劇場）
の一つで、スイス・コテッジにあるハムステッ
ド劇場は、このところ評判になる作品を次々
に上演している。八七年九月からのステイー
ヴン・ビル作「カーテンズ」は、好評のため
に今年二月から、ウエストエンドのホワイト
ホール劇場へと移った。

題名の「カーテンズ」には、「一巻の終わ

り」と、物を隠す「幕」という、二つの意味
があり、それが内容にびびったりである。

それほど広くない家の居間。車椅子のアイ
ダが八十六歳の誕生日を迎え、二人の娘とそ
の二階にいる姉妹の息子と、隣りのジャク
ソンさん（七十歳）に任せている負目があっ
て、娘達はプレゼントやケーキでアイダの機
嫌を取ろうとするが、彼女は本当にばけてい
るのか、その振りをしているのか、関心を示
そうとしない。そのどちらかが見抜けないの
は、舞台の人達だけではないのだが、当事者
でない観客はばつの悪さを感じることなく、
気楽に笑っていられる。

このばつの悪さを救うのは、例えば妹の方
の夫ダグラスが、壊れた芝刈り機を庭から居
間に持ち込んで直そうとするのに、皆の関心
が集中する時だ。一人取り残されるアイダの
表情が何とも言えず見事で、健康な人の中
で、体の不自由になった老人の疎外感が伝わ
てくる。

そこへ、若い時に身持ちが悪くてアイダに
追い出された末娘のスーザンが帰ってくる。
そしてうわべを取り繕っていた家族の平和に
少しづつ亀裂が生じ始める。初めは誰か分か

らなかつたアイダ（「これ誰なの」と聞く相
手は、毎日世話して貰っているジャクソンさ
んで、血のつながる娘ではない）が、スーザ
ンの持つてきたばらの花の匂いで、昔の思い
出が蘇ると同時に彼女が分かって、手をすこ
い力で握り緊める。しかし十分に意思を疎通
し合えないことが、悲劇への伏線となる。

その悲劇は次の場でおこる。目で必死に訴
えるアイダの頼みに答えて、長女のキャサリ
ンが発作的に安楽死させようとするのだ。か
ねてから二人の間には「約束」があったのだ
が、その実行を迫る直接のきっかけは、アイ
ダがスーザンだと分かりながら、長年の間に
積もった自分の思いを、彼女に伝えられなかつ
たことである。少なくともキャサリンはそう
解釈する。すなわち単に肉体の苦痛から逃れ
るための安楽死ではなく、人間としての尊厳、
アイデンティティの問題なのだ。

ところで、このキャサリンがアイダを死な
せる場面が実にこっけいで、恐ろしい行為を
見ているはずなのに、観客はげげら笑い通
してある。先ずいつも飲んでいる睡眠薬を多
量に飲ませようとするが、アイダは苦しまぎ
れにそこら中にべっぺと吐き出してしまふ。
今度は部屋にあったスーパーパーのビニール袋か

ら中の物を開けて、頭からかぶせる。ところ
がそれには穴が開いているために窒息させる
ことが出来ない。やっとクッションを顔に押
し付けて目的を果たすのだ。この、手際の悪
さを巧みに演じる技術と、ブラックユーモア
を楽しむ観客の存在を目の当りにしたのは、
あるショックだった。

さてこの現場を、キャサリンの夫ジョフリー
が目撃して、今度は彼が「喜劇」の担い手と
なる。大袈裟に手を振り回し、台詞の語尾は
ほとんど飲み込み、次々とその場に姿を見せ
る他の家族に、なんとか真相を隠そうと必死
になる。それほど躍起となるのは、先ず自分
が事の真相を認めたくないからだというのは
明らかだ。しかし、長い医者の検死が済むの
が待ち切れず、キャサリンは自分から真実を
話す。一人一人の受け止め方が対比的に示さ
れる。

息子や妹が、例えば母親や姉であっても罪は
罪だと正義演説するのに対して、ダグラスが言
う、「われわれみんなが彼女を死ぬに任せて
いたのだ……何もしないのと、積極的に何か
するのと、どっちが悪い？」と。彼は自分の
両親の悲惨な状態を見た体験を持つと共に、
人生の「挫折者」として他人の苦しみと共に

出来る基盤があると思われる。

作者は決して「問題劇」を書いたのではな
いと力説する。一つの危機に遭遇した時の、
人間の不条理な行動を描写しているのであ
って、それを距離を置いて観察すれば、喜劇と
いうことになる。しかし強いて問題を浮かび
上げようとする意識はなかっただけに、返っ
てその行動の前提となった安楽死の問題が、
より鮮明に見えたと言っているのではないだ
ろうか。それにしても、同じ老人問題をテ
ーマにしたわが国の「三婆」とでは、笑いの質
に大きな隔たりがある。一口に言ってしまう
と、乾いた笑いと言った笑いということだろ
うが、その原因は単純には割り切れない。比
較文化論だけでなく、言語の違いにも関係し
そうである。

ところで同じ系列に属すると考えられるもの
に、既に大家となったアラン・エイクボーン
の「小さな家族ビジネス」（TN）がある。
この題名にも二重の意味があり、「家族で経
営している小さな同族会社」と「家庭内のく
だらな問題」との二つが重なり合ったこと
ろに、悲喜劇が成立している。

装置は、階下が真中の玄関ホールを狭んで
左右に居間と台所。二階が寝室とバスルーム

とになっている。郊外にある中産階級の典型的住宅の断面図だが、これが、ちょっとライトを変えるだけで、四家族それぞれの家となる。舞台の経済効率がいいというだけではなく、どここの家庭も画一化されているのを示している。

こうした類型化は人物像にも及んでいて、イタリア人と浮気する妻を持つ夫は、ヨット遊びやCD集めに余念がない。料理に夢中で自分のレストランを持つのが夢の夫を持つ妻は、兄弟よりも小犬の方が大事なのだ。高校生の娘は、お定まりの疎外感を持っていて、万引きもすれば、薬中毒でもある。

この環境の中で、会社の経営を義父から引き継いだ正直者の主人公は、間もなく家族中がその会社を食い物にしているのを発見するのだ。しかし彼もまた、娘の犯罪を隠匿するのがきっかけで、自分の主義に反して、不正に目をつぶらざるを得なくなる。

観客は身近にいなような人物達が、自分の家庭にもあるいは起こるかもしれない事件に振り回されるのを見て、半ば共感しながら、半ば痛快がって笑っているようだ。典型的な人物と都合のいい筋立ては、決してリアリズムではなく、ソープオペラの一変種と決め付ける

ことも可能だ。しかし見方を変えれば、民主主義の根底にあるべき個人の倫理規範が、企業の論理と消費経済のニーズによって、脆くも崩される様を、笑いの中に描き出したとも言えるのだ。少なくとも、「家庭の幸福は諸悪の根源」という、三十年間忘れていた言葉を思い出させてくれる効果はあった。エイクボーンをどう評価するかは、もう少し時間をかけて考えてみたい。

次には、こうした喜劇という多くの観客に受け入れられやすい形式でなく、もっと直接的に現代の問題を描こうとしている試みに触れることにする。

重い現実を写す舞台

八七年の英国マスコミの失点の一つは、六月の総選挙の祭に、サッチャー率いる保守党のあれほどの対象を予測し得なかったことであつた。しかし全国各地の選挙区で、予想を上回る得票を獲得した保守党も、スコットランドやイングランド北部では惨敗。新たな南北問題だと騒がれる始末。原因は色々あがれるが、何よりも産業の不振、貧困がある。その現実を適確にとらえた舞台が、エジン

バラの演劇祭に姿を見せた。二十五歳のニック・ウォード作『ジョージ以外には』がそれである。九十分の小品だが、その迫力はすごかった。

観客が劇場に入ると、俳優は既に椅子に腰掛けている。パイオリンを持ったミュージシャンが一人、壁の途中に、まるで宙に浮いたかのように座っていて、弾いたり、他の機械で音を出す。沼地を吹く風の音とそこに住む鳥や動物の声をアレンジした音響が大きな役割を果たす。時計が時を刻むのは、パイオリンの弓で足場の横木を打つことで表わしている。すべて表現をぎりぎり最少に押さえている一つの現われである。

半生を農場労働に捧げてきたジョージが不況のために解雇される。彼は近頃では訪れる人のあまりない教会堂に入り込み、手足を伸ばして腹這いになる。文字通り村の余計者となつて牧師は、彼の行為の意味を理解出来ず、滅多にない訪問者に有頂点になつて自分だけがしゃべりまくり、彼の悩みが聞き出せない。ジョージの妻が農場主にどなりこむと、人のいい彼は、彼女を家事手伝いに雇うことで辻褄を合わせようとする。

「新聞を買いに行くのよ。仕事を捜しなさい」

い」と妻になじられても、ジョージは長い足を一杯に広げて椅子に腰掛けたまま、動こうとしない。床を磨いている妻が、足をどけるように言うと、わざとごみを撒き散らす。実直で農業以外につぶしの利かない男のやり場のないいらが伝わってくる。

農場主の家で、同じように床を磨いているジョージの妻のお尻を、雇主が椅子に座ってじっと見ている。何かが起こるのかと、下司のかんぐりをしても、何も起こらない。ジョージは再び牧師のもとを訪ね、「知りたいのです、ラヴレスさん。(間)私の生きる目的は何ですか。教えて下さい。何ですか」と詰め寄るが、「大きな問題だ、ジョージ……もつと多くの人が提起すべき問題だ……」という答えしか返って来ない。「墓石は要りません……忘れてもらいたいのです」と言っただけで、自ら命を断つ。

少しも早くこんな所から出て者きたいと、口癖のように言い続けていた娘が、「くたばって嬉しいよ。誰にもそんなこと言わないけどさ」と告白するのは辛かった。妻は「泣けなかった、悲しいと思えなかった」と言う。

矛盾や対立が舞台上で爆発している間は、まだ救いの望みがある。しかし、どうにも逃

げ道の見出せない現実を表現するのは、こうした押さえに押さえた表現しかないことを見せてくれた公演だった。評判になつて、ロンドン公演が実現した。こうした芝居を受け入れる素地がまだ残っていると思うと嬉しかった。

(この文章の一部は、日本経済新聞、兵庫民報に載せたもの、神戸親子劇場、劇団四紀会などで話した内容と重複していることを、お断りしておく)



△劇団通信▽追加

演劇集団和歌山

この四月から四名の新人団員を迎え、劇団はようやく活気づいてきました。

今後の公演は九月九日(土)、一〇日(日)、一六日(土)、十七日(日)の四日間、和歌浦小劇場にて、横内謙介作「オウムとカナリア」を、馬場田貴文演出協力、楠本幸男演出で上演します。けい古に入りました。

(641) 和歌山市和歌浦南一―一四
〇七三四―四五―四五三七)

劇団群馬中芸の新住所

このたび県内外の多くの人びとの協力で赤城山の麓に「未来スタジオ」が完成。十九年間拠点としていた前橋昭和町から移りました。

371-01 群馬県勢多郡富士見村

大字赤城山字大河原

六二六―四九八

未来スタジオ内

TEL 〇二七二―八八―二七〇〇

ブレヒト生誕九〇周年祭

——東ドイツを訪れて——

堀江 ひろゆき

(劇団大阪)

二月八日、午後一時発のアイロ・フロート機で成田空港を立つてから十時間余り、凍りついたシベリアの灰色の世界を眼下に、初めての異国の地に驚嘆しつつ、モスクワ空港に着いた時は夕方五時というのに既に夜を迎えていました。一面の白樺林を前にして、あのチェーホフの、トルストイのモスクワに今、俺は立っていると思うと、収容所のようなホテルにもかかわらず感動をかくし得ませんでした。翌朝、プラハ経由で東ベルリン入りした私たちは、荷物が行方不明になるハプニングや、言葉が通じないもどかしさに悩まされながら、目的地ホテル・メトロポールに着き、ブレヒト生誕100年祭の六日間を迎えることになりました。このブレヒト・ダイアローグと称する催しは、私たちの予想以上に大掛りなもので、アフリカ、南米、アジア等世界各国のブレヒト研究者、演劇人が三百人近く集り、この国の新聞の第一面に報道される程

でした。同時に東ベルリン市民もよく知っていて、招待者の胸のブレイトを見れば、話しかけて来たり、列の後方に居れば前に来いと云ってくれたり、市民挙げての取組みになっていました。私たちが昨年上演した「マハゴニー」も、ダイアローグニュースの一面を割いて報告され、ビデオテープも三回に渡って上映されました。

ベルリンに着いてからの過密スケジュールは、朝の九時から晩の十時まで、夕食はその後、毎日四時間平均の睡眠時間、おまけに水が飲めない為、ビールが水替りといければ、常時酩酊状態が続いたわけです。このビールが実に美味で、さすが本場の味だと思いました。

二月十日のブレヒトの墓参から始ったダイアローグへの参加、劇場でのセレモニー、アマチュア演劇のシンポジウム、ブレヒトの住家の見学、毎日の観劇、寸暇を惜んでの市内見学、今から思えば瞬間の一周間でしたが、そ

の時々は、これ程充実した時を過ぎたことは今までになかったことと思います。特に良かったと思うのは、一週間、ベルリンを出ずに徐々になじんだ事だと思っています。ベルリン市民と直に触れたように思えるのです。自分がどこに居るのがわかる程な始めた点です。その中で感じた事は、我々に対する偏見がないことです。交流した日本の留学生が、西ドイツではアジア人に対する差別が有り、日本人が入れない所も有るが、東では無いと云っていました。教育の中で、平等がうたわれるこの国では、日本人も黒人も同等なのです。驚いたことに、私たちが国電に乗った時、途中から乗車して来た老婆が、私たち日本人に先を訪ねて来て困ったことが有りました。大らかな国です。朝は早いですが、午後三時から四時過ぎが帰宅のラッシュ時間で、この旅行に来る為に、毎日九時過ぎまで残業して来た事が、いくら説明しても理解されてないように感じました。

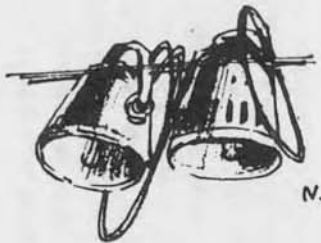
出発前に東ドイツが社会主義国で、経済面に於いて暗いイメージを持っていましたが、十日に行われたブレヒトの映像の除幕式で、文化省の偉い人がたくさん来る中で、式の主人公が、その像を建立したヘルメット姿の労働者なのです。海外特派員のカメラの放列の中で得意顔の彼の顔は、まさに社会主義だと思いました。この像を建てたのは俺たちだと胸を張っている姿は、日本では有り得ないでしょう。こうして迎えたベルリンでの六日間は、特徴的には、ベルリーナ・アンサンブルの舞台を五本も見れたことです。

簡素な舞台、役者の徹底した役割の認識、無駄の無い舞台は見事なアンサンブルを造り出していたと思います。

但し、最終日の労働者劇団との交流の中で「アンサンブルの舞台をベルリン市民は見ない」という事には注目しました。古典化した生きた化石のように云う。我々はお祭りさんのように、一週間で五本も見ただ。シンポジウムでは、後進国からの発言が、自分の国の矛盾の中に於けるブレヒトの有効性を訴えていたのに対して、先進国の発言は、方法論に終始しているのが印象的でした。こうしてみると、アンサンブルの舞台に疑問が生じて来た。この劇団は誰に何を見せようとするのか生活も保証される社会主義国の東ドイツで、何を主張し、どうブレヒトの意識と関わり合うのか、単純な疑問が浮んで来た。では我々はどうなのか、物質に囲まれた生活の中で、経

済大国ニッポン、後進国から搾取することで成り立っている生活の中で、日々満足している我々が、今何故ブレヒトなのか……。以前「荒野の落日」の上演の際、大阪自演連の合同公演の方が、俳優座より勝っていたと云う意見があった。もしそのまま受け入れるとすれば何が違うのか、私たちが歴史の矛盾の最先端である労働現場に属しているからではないだろうか、仕事、家庭、劇団の生活のサイクルから来る人生への貧欲さではないだろうか、矛盾を矛盾として受けとめにくい日常生活の流れにあって、絶えずハングリーな感性を維持する事の困難性を意識できて初めて、演劇は成立するのだろうか。残業を切り捨ててまで劇場に足を運ぶ努力を強いる舞台が、何の発見も与えられなければマスターベーションに過ぎない。同時代を共有する観察と共に、つくる舞台こそいい舞台になることを思えば、常に時代感覚を身につける努力の中でこそ、ブレヒトは生きてくるように思う。そんな思いでブレヒトに接した時には、ブレヒトの提示する問題が恐さとして突きささって来る。何となくお手盛りの舞台が多い中で、ブレヒトは恐さを提供してくれる作家の一人であるように思う。

飛行機が東へ行けば行く程、夜が白じんでくる。帰りの機中で一時を自分にかえて、こんな事を考えてみました。



「国語元年」を観て

— 劇団演集創立四〇周年記念公演 —

栗木慶子

演劇活動の端っこにしがみついているだけの私が、大先輩劇団の舞台批評などと思いつつ、いつも中部ブロック全体の劇評を演集の丸子さんが担当されていることで、演集自身の劇評が「演劇会議」に紹介されないのでは片手落ちとの意見もあり、おこがましくも担当することになりました。そこで名芸の身近な面々も含めて、まとめる形で記します。

ご存知の通り、演集は東リ演の創立劇団であり、故松原英治師の教え以来一貫してリアリズム演劇づくりの先頭に立ち四十数年を迎えました。その記念すべき第一弾が今回の「国語元年」(作・井上ひさし、演出・浦はじめ)です。

この公演は名古屋演劇フェスティバル参加作品として、五月十九日・二十一日名演小劇場で上演されました。記念公演としては、劇団の積もる思いをストレートにぶつけた自ら

の創作劇であることがふさわしい気がするし、書き手である丸子さんが書かれなくなったのを残念に思いながら客席に座りました。お客様は年配の方が多く、演集独特の雰囲気を感じさせる中、幕がきました。

装置(狩野)は紗幕をうまくつかって、日本地図にこの劇に使われる地方の言葉が配置することで導入部がわかり易く工夫されていました。ものがたりは、明治初期、小学唱歌集を作った評価のあがった文部省役人南郷清之輔(遠山・長州弁)が、新たに「全国話言葉統一制定」の命を受け、各地から寄り集まった形の奉公人たちの方言を縫い合わせて、悪戦苦闘していくあり様が、独得の笑いとベ

ままならず、つかまってしまいます。作者の分身とも思われるその若林の「言葉には歴史や生活がかかっており、上からいじくったりするものではない」という意味の批判が伝わってくる形で幕になります。井上作品を時折名演の例会で観る機会もあり、少しテンポがのろいな…という感じもしましたが全体的には浦演出により、演集らしい誠実なスタイルにとり込んだ形にまとまり、安定した舞台に仕上がっていたと思います。

演技陣では、清之輔の妻・光(内田・鹿児島弁)が、おさえた色気で好演しており、奉公人頭加津(北原・江戸山の手言葉)も、身のこなし、立ちふるまい含め、要としての役割をきちんと演じていました。その他の奉公人たち、たね(万福寺・江戸下町方言)、太吉(竹林・無口なピアノ弾き、車夫弥平(沢田・南部遠野弁)、カメラずきの書生修二郎(小熊・名古屋弁)、ふみ(佐藤・羽州米沢弁)らも、各々持ち場をこころえた演技でした。各々個人的にもよく知っている演技者たちの、各々の出身地の方言とは全く異にした方言を、かなり苦労してこなしている様子はまた別の面白さでもありました。言語学の師を名乗ってちゃっかり居候するあやしげな公

家、公民(土屋・京言葉)も大変しやだった演技で、ひときわ印象に残りました。

途中、入り込んでくる形の鉄火肌の女ちよ(速水・大阪阿内弁)は熱演ですが、少しムリも感じました。また義父重左衛門(丸子・鹿児島弁)は、やや表情で説明しようとする演技で少し異質に感じたのは私だけでしょうか。さて、いつもながら、スタッフにソツがなく、…といっても、つなぎの音楽には、少し異和感がありました。このところ続いた「検察官」「落ちこぼれの神様」とならべても最もいい舞台だと思いました。

その上で、少し不明なところもありました。それは、結局清之輔(遠山)主として長州弁)の果たした役割と存在が何であったかということ。人の良さなどをひょうひょうと好演していたのですが、果して奉公人たちが、あれ程一喜一憂して尽くすような人間であったかどうかということです。話し言葉統一に賭ける情熱が、下女へのくどきや、義父へのケンカ売りへとエスカレートしていくその異様さが結局終幕への異常さへとつながっていくのだと思いますが、その具体的な変化がもう少しくっきり出ていたら、もっとよかったかと思われます。また下女たち各々の

仕事とか、かかえている背景も、口先の方言に流されて少し不明確でもあった様な気がします。

あれこれ、生意気なことを書きましたが、とにかく井上戯曲をたつぷり楽しませていただきました。客数も最近の公演では、六百、七百、八百と上昇しているとのこと、これから

劇評 ■

第十二回・大阪春の演劇まつり

今泉 おさむ

一、はじめに
十二回目となった「春の演劇まつり」も、今年以来年に向けて、存続の危機が出てきた。

それはメイン会場である「青少年会館小ホール」が、来年建て変えられ、しかもこれまでの主要利用団体には一言の相談もなく、現在流行の多目的ホールに衣替えすると言うのである。幸い、スタートする事前に情報をキャッチして、何とか、元通りの劇場形式に戻すよう、そして使用料金の植上げがないよう、交渉は署名活動をバックに進んでいっている

ようだが、こういった事態を聞くにつけ、利用者不在のお役所仕事の発想が、文化行政にはあまりに多いことに憤りを感じる。

さて、内容であるが今年は各々の劇団が、自分の守備範囲というのか、オーソドックスに作品を取り上げて、成果を上げている。以下、12劇団のうち大阪自立演劇連絡会議・加盟劇団を取り上げてみる。

二、①劇団息吹 5・14 かわち小劇場
「天満のとらやん」
作・かたおかしろう

演出・岩崎 徹

地域に根ざした村芝居の再現といった雰囲気でお客呼び込み、三十周年記念公演の稽古場劇場は満員で熱気に溢れていた。まずこれは、劇団息吹の財産とも言えるべき作品。

鐘・大太鼓・小太鼓・鼓・木魚などなど音曲も賑やかに囃したてるノラクラモンとらやんの一代変転記。とらやんのぶつかる出来ごとの数々を、お囃しにの語りとマイムでスピーディに進めていく。そして、囃子かたが順にマイムの人物を受け持っていく。観ていて、それなりに楽しい。だが、でも、もっともって活力が、楽しさがあってもいいのではないか。それは、役者の表情であり、しぐさであろう。心の底から浮き立つもの、それがいまま少し欲しい。特にとらやんがお囃子に乗るのではなく、お囃子を引きずっていく野放図さがいる。そこから、型破りの活気が湧きでてこそ、真の面白さであろう。

初日なので、まだ緊張が先立って堅い、がこれは公演を重ねればよくなっていくだろう。

① 「彦市はなし」

作・木下 順二

演出・大坊 晴彦

併演作品。装置をよく作っている。だから

灯りによる場面説明は必要ない。彦市の憎めないわる賢さ。子天狗の直情さ。殿様のノホンとした長閑さ。それが、一気に絡み合っただけで進んでいくところに面白さがある。考えて分別ができてはいけない。その点が出来上がっていない。彦市が分け知りになっている。だから、物語が理屈で進行してしまふ。対する子天狗はまだキツパリとしていていいが、殿様はもたついている。おおかさをもって出してほしい。ラストの水中乱闘に、せっかく「浪の市」まで出すのなら訓練がもっと要る。使うことであがっている。そして知らぬままに、ふたりの殿様はあふりたてなければならぬ。それではないと、拍手で幕は閉まらない。

② 劇団未来 5・21 青年会館小ホール

「カンナの咲き乱れるはてに」

作・こばやしひろし

演出・森本 景文

戦争の重さ・犠牲者は誰なのか。「すんだことだから仕方がない。」「お互い、不幸な出来ごととは忘れましょう。」この言葉に甘えていて良いものなのか。突き付けるドラマである。「日本人も死んだのだから侵略とは言

たくない。」などと言うあきれた論も出てく

る。民族としての責任を一人一人負うことが真の愛国心であろう。まず、兵隊たちの歌の対象が何か疑問に残る。兵隊としての自分自身へなのか、観客（国民）へ対してなのかによって、歌い方が異なるはずである。そこが乱れている。兵隊たちのモノローグにしても、その立場の視点が、自分の死への未練なのか、反省なのか微妙である。

記者の描きかたは類型的で、教科書問題への質問など、いかにも唐突である。兵隊達の表現、やわい。30kgの重さが身に伝わっているのか。兵隊役はどんな役者も様になるという時代は過ぎた。戦後40年、身体をもっといじめねばならない。

吉田（南勝）は抑えたなかに悔恨の情を

滲ませていた。範（石塚重美）は中国女性通訳の雰囲気表現している。佳作である。だが、舞台としては、カンナの咲き乱れる形象が欲しい。言葉だけでは表現し切れていない。

③ 演劇集団わだち 6・3

青年会館小ホール

「小さないのちの家」

原作・いぬいとみこ

脚色・演出 奥村 和巳

ブルーのコップ一杯のミルクで生活する小人のアッシュ一家と、それを託された森山家の人々。だが、そのミルクさえも無くなっていく太平洋戦争の最中。それは、人々が美しい心を失っていくのにも似て……。児童文学の問題作品の劇化。

プロローグの信州のおばさんの声は不必要。

すんなりと、ミス・マクラランと達夫の場からでいい。といって、その役者が精一杯で新鮮な驚きがない。ここで、幻想にのめり込ませていく力が欲しい。それよりも、根本の疑問として、小人のアッシュ一家をどう表現するかである。小人は幻想世界の存在であるべきではないか。それと、森山一家と取り巻く現実状況との対比から、いのちの大切さ・戦争への反対を描き出すべきではないか。従って、小人一家の生活及び演技をリアルにさせると、これでは、戦時下の庶民生活描写と変わりなく、この作品の意味が無くなる。

舞台構成は努力している。だが、小人の存在感をもっと出すために、まだまだ小道具に凝って欲しい。鳩の弥平も、声だけではない舞台形象が欲しい。そこにもっとロビンとの交流が生み出されるはずである。ラストの

ロビンの帰還の処理はなんらかの工夫が絶対に必要である。全体的に見て、まだまだ安易に作り上げている。それと、このままでは、90分一気に持たすことは難しい。2幕に分けるほうがいい。

④ 大阪府職員演劇研究会 6・11

青年会館小ホール

「わたぼうしとんだ」

作・田坪 文一

演出・三輪智津子

養護施設に勤める夫と公立病院看護婦である妻。夫の施設は行政改革の一貫として、他に委託されようとしている。職員たちは反対運動と異動希望調査とのほろまで揺れ動く。そこへ、炭坑閉山と造船不況を経験している夫の父がやって来る。闘いは負けたが、自分たちはわたぼうしのように、飛んでいった先でまた根を下ろして、花を咲かせよう。台本は仲々さわやかに書かれている。

だが、舞台としては、伝統ある劇団として、気配りの抜けがあまりにも目立つ。小道具で、宅配便のカラオケ詰め箱が開き、レコード店の袋、お茶を出す盆のプラスチック、決起集会の山川の腕章無し、鞆一つ持たずに来る父、その顔は赤銅色だが腕は白い、そして、居間

にはほとんど何もない、その最たるものはラストのわたぼうしで、出現したらいというものではあるまい。演技も言葉だけで済ませられ、看護婦であり、学園教師である生活実感が感じられない。役者のほとんどが余裕がなく、客席に顔が向けられていない。

⑤ 劇団大阪 6・24 谷町劇場

「アトリエ」

作・J・C・グランペール

演出・斉藤 誠

第二次大戦後1945年から7年間の、お針子たちのアトリエでのさまざま。妹を収容所で殺されている女主人エレヌ。他からお高く止まると好かれていない警察官夫人のローランス。感情の起伏の激しい子持ちのジゼル。この間に結婚し子どもを生むマリ。思ったことを何でも言うてしまいが心優しいミミ。こういった仲間の中に、子ども二人を抱え夫は収容所送りで行方不明のシモエヌが加わる。シモエヌは子ども達のため夫の死亡証明書を買おうと奔走するが、一方で死を認めたくない。それが、うまくいきかけた収容所生き残りのプレス工との中も崩れる。そういった女たちの仕事場での日常がエレヌの夫レオンを交え進んでいく。

舞台は、その女たち一人一人をせめぎあいの中で、じっくりと描き出している。生活の匂いのする女の仕事場、手仕事なので口々にかまびすしい。葛藤も生まれる。そして、大戦中、残酷な目にあつたユダヤ人の姿が浮彫りになってくる。女たちも生きている。だが、今一步、彼女たちの7年の時間がはつきり現れない。時の変化がどうなのか、上手前に小さく表示されるが、舞台上では不鮮明だ。

⑥劇団きづがわ 6・15

青少年会館小ホール

「愛さずにはいられない」

作・ジェームス・三木

演出・山田 一巳

35歳の大王で定時制高校生の落合勝利が担任の小坂麗子先生に恋をした。ところが、彼女は結婚詐欺にあつて以来極度の男性不信、人間不信に陥っているから、さあたまらない。さて、この二人どうなるか。ヒットメロデイに乗って、この奇妙なラブゲームの結末は……。現代のTV風ウエルメイドブレイをど

う処理していくか。

喜劇として、観客はよく笑ってくれた。これはともあれ成功である。だが、ドラマによってどういう演技表現にするのか。そこに問題がある。勝利を取り巻く環境では、コメディタッチにして、定時制高校になると、急にシリアスっぽくなる。その落差に戸惑う。だから、教室の場面がいただけない。それでいて、高校生たちは生活を引かずつけないし、個性がサッパリない。そこがもたつこので、3幕の二人の変身が生きてこない。コメディとリアルがない混ぜになっているから、二人の演技も定まらない。涙ぐましいくらい可愛くて純情で、ということがこの程度かと思いたくなる。

多少、作品の巧さによりかかり過ぎている。もっと面白くなるはずである。

三、おわりに

作品の上演意図そのものは、劇団としてさまざまなに討議され、決定されるであろうが、それよりも喜劇は喜劇としてというか、舞台表現への思い切りが必要である。なにか、リアルでないものへの後ろめたさがありはしないか。それと、主役中心役者だけではない、たとえ僅かな出番でも、その劇のポイン



トとなるべき役をもっと大切に配役することが重要である。それが劇全体の引き締めになることと思う。と共に、もっと演じることへの役者としての訓練がいる。舞台上に自分をさらして、受けを取るといった最近の演劇に流されてはいけぬ。

(近畿演劇と教育の会・事務局長)

劇評

メルヘンとクラシック

—中部ブロック3月中旬—6月の上演から—

丸子礼二

(1) 6月12日は「黒さんを偲ぶ会」。黒沢参吉全り演議長が、なくなつてから丸六年、所謂七回忌にあたる。未だに京浜協同劇団の人々を始め、全り演の仲間には、忘れられない黒さんである。先週に総会があつたばかりの川崎へ、また出掛けに行った。

やまなみの梅津さん、四日市の森さんそして大橋喜一さん……懐かしい雰囲気浸っていると、進行から、「挨拶の予定のこばやしひろしさんが未だ到着しない。出番に間に合わなかつたら、議長団だから丸子さん何とかお願いします」と困りきつた顔で頼まれた。

萩坂さん、黒川シズエ夫人のいいお話にホロリとしながらも、眼は会場入口の方へ、何とか間に合つてくれなやか、と願ひもきかず順番が来てしまった。

「私のような者が、各先生をさしおいて、挨拶するについては、実はさつきから、入口

ばかり見ているようなわけで」と説明していると受付から、例の元気な声！「来ました、来ました」で満場爆笑。後で萩坂さんが「まことにピッタリの演出だったよ」と大笑い。黒さん一人の抜けたアナを皆でよってたかつて埋めている状況の実演となつた訳である。

(2)

3月中旬から6月迄の上演は次の通り。

劇団はぐるま 第77回公演 御浪町ホール

公演No.11 3/22 御浪町ホール 横内

謙介作 なみ悟朗演出「まほうつかいのでし」

劇団名古屋 創立三十周年記念公演第5弾

3/25・26 名古屋芸術創造センター 井

上ひさし作 久保田明演出「きらめく星座」

名古屋演劇集団 創立四十周年記念公演

名古屋演劇フェスティバル88参加 5/19 22 名演小劇場 井上ひさし作 浦はじめ演出「国語元年」 第24期研究生卒業公演 3/29・30 名演小劇場 川村光夫作 北原雅子演出「うたよみざる」

岡崎演劇集団 第39回公演 5/28・29

甲山会館 レオン・クルチコフスキー作 中

本信幸訳 浅井克彦演出 「エセルとジュリアス」

劇団名芸 第32回公演 シェイクスピア劇場No.10 6/10 12 名芸平針小劇場 W・

シェイクスピア原作 栗木英章台本 柘植洋

演出 「ベニスの商人」

劇団夜明け 第5回親と子の劇場 No.25 公

演 6/25・26 中津川文化会館 7/3

恵那文化センター 三浦哲郎原作 梶賀千鶴

子作 劇団夜明け演出部潤色 鈴木弘文演出

「ユタとふしぎな仲間たち」

劇団すがお、劇団四日市、上野市民劇場は

この期間公演はなかつたようである。

(3) オンボロ四畳半に住むツトムがなんと救世

主に選ばれて、この世のすべてを焼きつくす

火の源を封じこめたランプを守る任務を与え

られる。「まほうつかいのでし」のタバタ君

は使命のために、三つの願がかなう力をくれると言う。(タバタ君の莊加真美が可愛くよく動いていた)

それからは、ランプを狙って白アリ駆除隊と称する美女三人組やら、ドスの利いたお兄さんやら、おしゃれなクズ屋、隣室の手塚さん、大家さん等が襲いかかる。ツトム君の心の反映グラムボンという変な存在まで出て来て、最後は火を消す為の洪水をツトム君に起こさせ人類を流してしまふのが真の狙いだったと人物たちはすべて宇宙人かなんかに変わって去って行く……というメルヘン(?)若手たちが活躍できるために、そして若いお客さん達に楽しんでもらう為の、時々こういう企画も、はぐるまの一つの顔である。

喧しやの大家(松久美保)が正体を現して宇宙人の美人に戻ったり、クズ屋の金の延棒でランプを買い取ろうとしたり、駆除隊の踊など、なかなか面白い。ツトムの高島康貴と手塚さんの片岡隆司のコンビのイキもよくあっていて、若手が元氣一杯やっている感じは充分、なみ悟朗演出のテンポもよかった。

客席にも沢山ツトム君やその女性版のような人達はいたようであるが、この人達にとって、心やすまるメルヘンになったかどうか、

私には、それは一寸わからない。しかし、弱気とドジのために結局洪水はおせず、グラムボンが変身した青年に導かれて新しい生活に出發する結末が、もう一つ胸に落ちなかったは、私のトシのせいだろうか。あの辺にメルヘンの本当の狙いがあるのだろうか。うと思ったことは思ったのだが……。

(4) 開演前から「小さな喫茶店」や「青空」の懐かしいメロディーが流れ、私のような世代は一寸いい気分にはせられる。「きらめく星座」の舞台は東京、浅草のレコード店、しかし時は昭和15、16年、太平洋戦争直前、文化の受難時代である。

長男正一が脱走兵となつて、周囲の非難が集まり、長女のみさを傷兵権藤はこの家に名譽を挽回、正一を追う憲兵権藤はこの家に泊まり込み、時々戻つて来る正一とあわやの場面が何回もある。傷兵軍人の婿源次郎(矢野弘次が、素朴で頑固で意外と人間味ある性格をよく出していた)の「軟弱文化追放」の方針と主人信吉(清水甚也)との対立が狂言廻しの面白さがあつた。そして明日出征するという若者達の最後の願いが、市川春代の「青空」のレコードが聞きたい、しかし、そのレ

コードは追放されてもうないのだ。信吉の妻ふじ(ことうてるよ)は、レコード歌手だった昔に戻つて、心から「狭いながらも楽しい我が家……」と歌う。その翌日、日本は太平洋戦争に突入する。

権藤がバケツをみやげに持つて来る事が、物資不足の深刻化を表し、正一が大型電気蓄音器のボックスに隠れているのを誤魔化す為の防空用バケツ体操となり、最後に逃げる正一に遠くからふじが投げる弁当をバケツをグロップ代わりに受け止める等小道具の遣い廻しが面白い。コーヒーが「敵性飲料」だったり、兵隊が決死の突撃の前に頂く、恩賜の煙草、を正一が吸つてしまつて、騒ぎになつたり、追っ掛けつこと対立が組合わさつたテンポのある展開で飽きなかった。

長い間劇団名古屋の芝居を見つけている私にとっては、役者諸氏がいつも同じ物言いのテンポで終始していることなどが苦になるが、お客にはそんな事は判らないだろう。脱走兵の頭髮が長いままだったり、ふじが元歌手という設定が生きていなかったり、といういろいろ文句もあるが、舞台の熱気だけは買いたいのである。

(5)

名芸シェイクスピア、今回が二度目の「ベニスの商人」。初演の「十二夜」以来十年位たつたろうか。長い付き合いである。これだけシェイクスピアをやらしてもらえなんて幸せだな、などと思いつつも通い続けて来た。しかし、今度のは何か力不足を感じてしまった。もともとシェイクスピア作品の本格的上演となるとかなりな技術も必要だし、私はむしろ、どこまで原作から離れて名芸独特の味を出すことが出来るかが勝負のような気がする。勿論原作の構成はそのまま頂いての話で、栗木英章といううってつけの台本作者がいるからだ。

今回の「ベニスの商人」はそういう意味で一寸おとなしすぎたのではないだろうか。ユダヤ人シャイロックの、キリスト教徒による迫害と蔑視に対する怨念などもセリフで形どおり言われるだけでは、現代日本のお客にはピンと来ないのではないか。シャイロック役の片野耕治がスリムな体格で、地味な服装、セリフも柔かに言うので、ますますピンと来なかった。人種差別より性格的な片意地が悲劇の原因のように思えてしまった。

ポーシャの屋敷の箱遊びにしても、最後の法廷にしても、形どおりでは、役者のうすさ

の方が目立ってしまった。

ネリッタの成田美佳とグラシアノの糸井重喜が脇役としてはやり過ぎなくらい色々工夫していたのが、かえって主役を食つてしまつてた。何か全体にエネルギー不足な感があり、演出(柘植洋)も全体を纏めるのに手一杯になつて、思ったことも出せずに終わってしまったのではないか。はじめの頃の「十二夜」や「真夏の夜の夢」のような破れかぶれのエネルギーでもう一度挑戦のし直しをして貰いたいと思う。小さい役だが老ゴボーの寺沢宏行や召使いの加藤信子はそういう意味で成功していたのだから。

(6)

「ユタとふしぎな仲間たち」は名芸のコードも劇場で見たことがあるが、劇団夜明けの台本はかなり違った内容だった。都会から来た勇太が、山村の子供たちにいじめられ、友達を求めて、座敷わらし、という妖怪達と知りあいになる発端は同じだが、わらし達が手製エレベーターで出現したり、自己紹介を鼓や笛太鼓の古めかしい鳴り物入りでやつたり、なかなか楽しく工夫がされていた。間引きによつて殺された子供たちの霊が何百年もさまよい続けているという設定も、かなり後の、

ユタがわらし達と一緒に訓練され、強くなつて来てから物語られるなど現代っ子たちにも理解しやすいような配慮があつた。

わらし達に教えられて、ユタが雨が降るのを当てるどころや、わらし達が自分でおむつの洗濯をするところ、最後に火事のため古い屋敷が無くなつて、わらし達が住むところがなくなるなど、なるほどと思う所が多かつた。勇太(ユタ)の林いづみが小さな身体でくつきりした演技をしていたし、座敷わらしの五人と村の子供三人のチームワークもなかなかまとまっていた。

中津川文化会館の舞台はかなり大きく、舞台装置も大きく、場面転換はかなり大仕事だったが、意外に頻繁に場面が変わる。人物の数が少ないのに、一寸大変すぎる感じがした。それと、セリフがマイクに入る所と入らない所が混じつてかなり聞き取りにくかつた。そんな点にも小人数の劇団夜明けが目一杯に頑張っているのを感じて、地域の力がもっと集まるといいな、とつくづく思った。

観劇雑感

岡崎演集・世仁下乃一座・蒼生樹・石るっ

萩坂桃彦

「エセルとジュリアス」(岡崎演集)

やっと見ることできた岡崎演劇集の舞台である。考えてみるとここだけが抜けていた。名古屋、岐阜などは足をはこぶくせに、岡崎の素通りは前から気になっていた。しかし岡崎へのご無沙汰は、むしろそこからの情報や誌代の送られ方が模範生だったための安堵感が裏目に出ていたということもある。上演毎の様子は丸さんの劇評でおおよそのことは想像つくということもあった。

それでは済まされぬという気になったのは浅井克彦さんからの熱いお誘いと、こちらの残された古い先も余りあるまいという自覚からである。

東岡崎の駅に降り立つと、喧騒な、あの川崎の街から逃れて来たという実感がわく。すっぱりと線に包まれた、ほんとに静かな街で

ある。どこか由緒ありげな、このつつましいやさしさは、劇団「岡崎演集」にもあてはめられそうである。

帰りに駅まで送ってくれた車の中で、平岩千尋さんにそんな話をする。「きょうの舞台のメンバーも私と同世代で定着しています」ということであつた。それぞれ生活をかかえているので、はげしくはないが永続きしているというのである。

このどこか自己完了型になっている(という風に見える)劇団の体質と「エセルとジュリアス」の持つ思想性の純度の高さとがせめき合っている舞台での泡立ちがばくの興味の対象となつたのは当然である。

レオン・クルチコフスキーの脚本(訳・中本信幸)が手許にないので立ち入って書けないのが残念だが、死刑執行までの六時間とい

う極限状況でのローゼンバーク夫妻、そしてその夫妻をめぐるの、検事や弁護士、裁判官、女看守たちの切迫したセリフのやりとりは、それ自体リアリスチックではあるが、根幹はフィクションであろうと思う。もちろん架空ではない。だから隙間なしのベタ押しのリアリズムのセリフ劇に仕了うせては息づまるだけなのだ。演出(浅井克彦)の仕事の稽古期間の不足のためか、その壁をつきぬけてはいない。ゆとりやあそび、時には誇張さえもが、一見この劇にはふさわしくない表現と言われそうだが、必要なのである。結果として、劇の純度はたかまる。

もう一つの難しさは、エセルとジュリアスの間で交わされる愛情表現のリアリティ、それはしぐさでもありことばでもあるが、それがそのまま客席へのメッセージとなつて質を変えてゆく微妙な変化である。あの夫妻の愛情表現の会話を露骨に客席を意識してしまふと少女歌劇である。しかし密室で交わされる二人だけの睦言であらうはずがない。

このあたりも専ら俳優のシンセリテイにたよっている。ジュリアス(石川雅彦)は着実にこたえたし、エセル(梅田恵美子)も前段セリフが浮きがちだったが、後段ジュリアス

とかみ合ってきて、その良質なものが客席にとどいて成功した。

セリフ仕立ての芝居に追いつく未熟な段階では覚えたセリフが空回りしている。この「エセルとジュリアス」はセリフ劇の論法では仕上がらぬと、ぼくは思う。ナチュラな状態で凭れ合っているもチがあかない。後にも先にも確実に自分の領域をつくり上げることである。

この必要性の典型は検事(杉浦英憲)の役である。彼自身の中にドラマがある。焦燥、矛盾、強圧、時には哀願となつて彼自身をズタズタにしている。杉浦氏はよくやっていて、どうやらお人柄らしい善良さがチラつくのが惜しかった。それはメイクの工夫で補える程度のものであつたが、場面の妙かつた弁護士と裁判官は破綻を免れた。

女看守(山本久枝)はシチュエーションを正確におさえた仕振りで、とくに最後の登場のところは透逸。赤いミニスカートの、検事の情婦でもあるらしいジュシイ(山田深雪)の効用を演出が引き出しておらず、電話修理工(河合直和)は反対に演出が生きて、幕切れは感動的。

初めての使用のために劇場を消化しきれて

いなかったり(開幕のベルなど)、刑務所の臭い、独房の雰囲気足りなさなど装置や効果などに注文もあがぶが、真直ぐに戯曲と向き合つた演出、演技の、誠実さと力量は可成りのものである。(5月29日宇山会館)

「ドリーム・エクスプレス・AT」

(世仁下乃一座)

近頃「世仁下」の評判も高いので、こんなぼくの雑文も正直、尻込みしがちである。とは言いつつ、やはり感じたまま書くしかない。

こんどの「ドリーム・エクスプレス・AT」は例の「大平洋ベルトライン」と全く同工異曲であると言つたら叱られるか。「ベルト」の長距離トラックが「ドリーム」では東京・大阪間のハイウェイ旅客バスとなり、「ベルト」では助手席の商社マン一人だった乗客がこんどは七人になってバラエティにとませる。主役の運転手が里村孝夫であるのにはどちら

も共通していて、それに加藤金治が里村と組んでバスの乗務員となつて活躍してみせる。走行中の趣向も両者、そんなにちがわない。しかし、休憩なしの二時間、客席との緊張感に少しの弛みを見せず走りつづけるのは、「世

仁下」も練り上がったものだと思う。

ストーリーは重要であるような、ないような、七人の乗客の献立メニューの記憶も不確かな点もあるが、一応ならべてみると、東京を出ると、浜名湖畔のパーキングエリアで一時間停車しろとさかんに喋りまくるヤクザ風の男(伊藤イサム)、そこで親分筋の姐さんにヤクザのようなものを渡すらしいとは次木憲さんの演劇時評で知つたが、その男を筆頭に引かれたヨメ)らしいティムという女(山崎千晴)がいたり、大阪へ出張のコンピュター会社の営業マン(俵一)、彼に首つたけの女(二村説子)、やたらとカメラのフラッシュをたく鉄道マニアの青年(平林広宣)、戦死した亡夫の骨壺をかかえて乗り込んだお婆さん(三原和枝)、二歳の幼児をかかえた若い女(藤波ひろ子)などが無関係に混在している、それが危機を及んで走るバスの中でもみくちゃにされるのである。

危機というのは、これも岡安ではおなじみだが、バスの仕組みはオートマチックで、コンピュターで操作され、運転手はハンドルを廻していれば済むのだが、これがそれではすまなくなる。神奈川県米軍基地の厚木あ

たりを過ぎるときジェット機の響音を浴びておかしな感じがした。スピードが50km以上出速しなくなったかと思うと、こんどはブレーキを踏んでも、どうにもとまらない。

乗客の混乱と恐怖をかかえたまま、乗務員（里村・加藤）の東京営業所への必死の連絡もむなしく走りつづける。（営業所がバス・ハイジャックに遭ったと早トチリして乗客の要求はナンダというあたり、客席は爆笑である）

結局は、ヤクザ男の願いもかなわず、浜名湖畔あたりでUターンして、こうなったら、日本一高い富士山のハイウェイに突っこんだら、昇りつめたところで止まるだろうとなる。

そこは、しかし富士山麓の演習地。突入と同時に射撃を受けて全員死亡の大惨事となっておわる。ところが幕切れに二つのウソを添加する。一つは、全員命拾いで記念写真を撮るシーン、一つはラジオニュースで「ドリーム・エクスプレス号」は日本坂トンネルを出たところで衝突事故をおこして全員絶望、運転手はもと国労で仕事のことと悩んでいたらしいとしめくくったところである。

この結末も、そこにもりこんだ岡安の思想もばくにとつてはすでに意外性はない。むしろ、書くとなれば、彼の演出力だ。

バスの中の乗客七人のセッティングには感心した。バスの座席を天井から一束にして投下した十本程の命綱を手にとると、それが座席である。偶然乗り合せた人たちの抱えた問題もたぐれば根は一つかも知れぬという暗示かといううがった受け方を八橋卓氏の劇評で読んで、むしろその方に感心したりした。

車の出勤、走行、急停車、カーブなどで振りまわされる身体の実現も自由である。綱を二本切りはなすとそこで二人だけの会話も可能だ。この仕振りはどこかで見たような気もするが思い出せない。里村孝夫、加藤金治、伊藤イサム、二村説子などもはやり人気スターである。（6月16日 俳優座劇場）

「ねずみとり」（劇団蒼生樹）

そのおもしろさは一寸したものである。犯人当てが興味の中心ではあるが、さいごにドンデン返しがあるので、出回っている赤いカバドのついた早川ミステリー文庫の原作は、読まずに観ることをおすすめする。実は何年前かに読んでいて、そのことが気になったのだが、ありがたいことに、記憶が、そこだけすっぱり抜けていたすかった。

しかし種明しを承知の上でもこの芝居はそれ以上のものであるらしい。作者アガサ・クリスティのお国では一万回を超えるロングランが続いている、とある。

劇団蒼生樹の上演でも演出者（梨地四郎）の言葉に、これは単なる推理劇ではない、社会のひずみを背景にした不幸な人間の運命を見るという風に言っているが、しかしこの程度の話をくり返し見たいはずはないので、何とんでもやばり、その筋はこびと登場人物の配置のうまさ、そしてわかつてはいるが、あのドンデン返しのきわ場のスリル感が言い様なく刺激するのだ。そうなることは、「ハムレット」や「オセロ」と同様、役者の芝居ということになる。

ぼくの坐った席のとなり、うしろに三人はどの中老の婦人連がいて、芝居の途中から犯人当てのおしゃべりになって閉口したが、こういうお客は招待してでも、もう一度見せるべきである。

ところで推理小説（ここでは戯曲）の詮索をしてはじまらないが、どうも、この出来すぎた本にもあやしいところがあって、そもそも、雪でとじこめられたマンスウェル山荘に、しかもそのオブニングをめざして

集った顔ぶれの都合の好き、裏返せば、そうでなければ成り立たないセッティングではあるけれど、彼らがここに寄って来た動機がいかに曖昧である。誰かにたぐり寄せられたようでもあるし、あることが気がかりで、それぞれが集ってきたと見えぬこともない。仔細に聞いていけばどこかで言われていたのかもしれないが、見ていた限りではわからない。

さて、ことの成りゆきで一寸登場人物の紹介をすると、まだ新婚生活一年というジャイル（三瓶俊一）とモリー（清水泰子）の若夫婦がいて、ふたりが夢を託した民宿マンスウェル山荘のオブニングの日である。

幕が上がるとロビーを兼ねた広間のしつらえを見せ、ラジオが鳴っている。ロンドン、カルヴィア通り二四番地でおきた殺人事件、殺されたのはミセス・モリー・ウィンという女性。現場付近で目撃された、黒っぽいオーバーに明るい色のマフラーを身につけ、ソフット帽の男を重要参考人として捜索中。

このラジオの放送にうかつでいると、この劇の半分位はわからなくなる。

最初に現れたのは、落着きのない、調子っぱい受け答えをする、クリストファ・レン

という青年（北原良彦）。山荘と若夫人が気に入ったらしくさかんに喋りまくる。板についていてソツがない。

次に、見るからに権柄のボイル夫人（浅野怜子）。ちょっと拵えすぎの感じはしたが、やがて職業が治安判事だということと納得がいく。「私は感情的な人間にはまんががならない、自分が理性的な人間ですから」とひどく感情的に言ったりしたのがおもしろかった。三番目の登場は中年のメトカーフ少佐（鈴木弘明）。諸事折目正しい。客席のヲパチャン、あれがきつと犯人よ、とささやいた。

つづいて、ミス・ケースウェル（渡辺孝子）という、ちょっと運葉な感じの若い女。この女優さんはたしか「頭痛肩こり樋口一葉」で花蜚の役で軽妙な味でたのしませたはずだった。そこへ五番目の登場人物、バラビチーニ（河住晴一）という真紅のベレー帽を頭に

ただいた小肥りの年輩の男。作者のクリスチイはどこかアルキュール・ボワロの風采を思わすのでご注意、などと読者をからかっている。この男はどこか異国人らしく、言葉つきの変化を、身体にシナをつくった女言葉でアクセントをつけていた。彼は、この雪の中、道に迷って、この山荘にたどりつき助けられ

たと言っている。

これで一応出揃って、山荘の主人をふくめて男四人、どの一人を見ても冒頭のラジオできかせた殺人事件の犯人臭い。ジャイルの帽子はソフト帽である。

ところでこの仕組みのなかでは、誰もがいかにもそれ（犯人）らしく見せるという芝居が生まれてくる。実際にはその逆のほうである。しかし彼らのどこか犯人らしい行動をとるといふことにはそれなりの理由があるはずで、じつは、そこがこの芝居での、演出、演技のしどころなわけだ。

演出のちからはさすがで、どの人見をも生活背景にしたおさえ方で、ナチュラに見せる。持道具、小道具のあしらいは梨地四郎のお手のもの。

さて後半になって、トロッター刑事（岡たかし）というのがあらわれる。この山荘の宿泊人の中にロンドン・カルヴィア通りの殺人事件の犯人が居り、さらに第二、第三の犠牲者もいるはずだというのである。彼はスキーを駆って乗りつける。現れた理由はロンドンの殺人現場の近くに手帳が発見され、そこに犯行のあったカルヴィア通り二四番地とこのマンスウェル山荘の住所が書いてあったという

のだ。

トロッター刑事のいささか狂気じみた取調べが展開する。刑事らしからぬなどと気にすることはない。大詰めですべてがわかる。

やはりこれは種明しはしない方がいい。この刑事が一枚一枚皮を剥いでギラギラと本質を見せてゆくテクニクは推理劇の謎解きを超える。

精緻な装置や行きとどいた出道具、置道具にも感心したが、実は「ねずみとり」の訳書（鳴海四郎）には、写真まで添えた委しい見取り図があるのに気づいたので、この要め言葉はひかえることにする。メトカーフ少佐が結局その名の少佐ではなかったという最後のオチをふくめて、少佐の拳指は重要であった。鈴木弘明がそれらしい風格の表現にとどまったのが惜しまれる。好漢河住晴一のパラピチ・一二は討死というところか。

（6月18日 横浜市教育文化ホール）

喜劇「はったり医者」

（石るつ・ちるる提携公演）

「深川江戸資料館の小屋にふさわしい芝居があるんだよ。十年位前に書いたものだが、

落語ネタの喜劇なんだ。役者が勝負の面白い芝居だよ」とは、原作者の、土の会の矢野喬さんが、石るつの境野氏に語った言葉としてリーフレットに紹介されている。

「役者が勝負の面白い芝居」——は正にお説のとおりで、実際の舞台が、そうならなかっただけの話だ。

お江戸は春爛漫、お花見の人出の中で見染め合った利三郎（永井孝喜）とお里（高山由美）のきっかけではじまるこの芝居にはしかけがあつて、利三郎は商家、慾深の功兵衛（手塚孝夫）の放蕩息子、お里は、これも劣らぬ慾深の、蔵医者竹済（ひぐち丹青・大活躍）の娘、しかし、利三郎とお里をひき合わせたのは商家の手代の吾助（飯島健治・ぬーぽうとした味）と医者家の下女しの（いとうエリコ・らくにやりすぎ）が、ひそかに惚れ合うというもうひとつの根つこの話からむ。

喜劇は慾深の竹済と功兵衛の、結納金、持参金をめぐってのかげひき計略合戦、もちろん、医者のお房（匹田あき子）も商家の女房（荒木雅子・味を出している）もこれに唱和する。その間隙をぬっておしのと吾助が何とかうまく世帯をもちたいための才覚が入りこんで混乱するのである。

午後七時開演というのは夕食、そしてひとよってはアルコールタイムである。川崎から江東区白河町の江戸資料館までは一時間半かかる。緑日の夜店見物や夜桜見物気分には遠すぎる。

というのも、こんどの「石るつ」と「ちるる」の提携公演は、日頃お世話になっている地元のご最良に、宵のひとつとき、ご一緒に遊びましょうという企画なのである。

太鼓、笛の音、手踊りの花見の宴で幕が上がると、それだけで拍手である。

川崎から来たりアリズム演劇の老人は呆然としている。

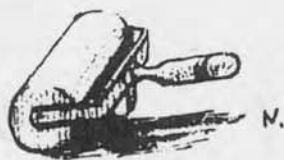
ま、落語ネタであろうとモリエール張りでおろうとそれは頓着しない。ただセリフが役柄によって工夫されているらしい努力は買ふとしても一練り上がらず、上ずって不明瞭きままるのには参った。これは喜劇のとりちがえである。それにしぐさもあらっぽい。おそらくテンポを狙ったのだらうけれど、走れば済むことではないはずである。平野屋と名の大金持（小森一平）の幽霊の出現なども煙にまくが、もうひとつわからない。

それにしてもそこに生ずる小さなチグハグが客席にうけるのだから言いようもない。

川崎の老人は、客に出すお茶の花碗を指でかまわしている医者やしぐさのところだけ笑っていた。

笛、太鼓、三味線などの、石るつの芸達者は別として、セリフ・物言う術をもう一度勉強しなおしてほしいと思う。にこりとも出来ず、不気嫌になって帰ってきた。台本・演出は境野修次。

（7月1日 深川江戸資料館小劇場）



●豆評

「三婆」（文化座）

「三婆」ときくと、どことなくわかった気になるのは、この芝居の評判が行きわたっているせいである。慾深の三人の老婆のだまし合いという知識でそれは流布している。たしかにそのとおりなのだが、もう少し具さに立ち入ってみると、これは有吉佐和子一流の辛口の人生喜劇であることがわかる。

金融業者武市浩蔵の、妻の家の風呂場での頓死で幕があくこの芝居は、残された妻と本妻と浩蔵の血をわけたたった一人の、六十歳でまだヴァージンという妹の、三婆との間の憤絶な遺産争いに展開してゆく。そのかけひきの中で隠見するかの女らの本質は醜悪、老猿をきわめるが、また言い様なく哀れ、可憐でもあるわけだ。

この三婆のひとりひとりに過不足なく、むしろ存分にその見せ場を提供しているのは小幡欣治の脚色（演出も見山武久）のうまさであつて、これには芝居巧者だった原作者も舌をまいたかもしれぬと思われる

ほどである。

東宝芸術座の市川翠扇、北林谷栄、一の宮あつ子の初演の舞台は知らないが、つづいた文化座のお三人も決してそれに劣らぬと野村喬さんが書いて見えるので、この芝居の醍醐味は文化座でも満たされたと見ていい。

本妻の松子（河村久子）の、夫の死によって失地回復とよろこぶ、つかの間の女心を妖しく見せるくだりのうまさ、狡猾の極地を、するどい喜劇味であらわす妹のタキ（鈴木光枝）、華麗な粧いがボケに転じてゆく妾の駒代（遠藤慎子）のおかしさ。それは客席の年輩の女性のお客を泣かせ、笑わせてやまめのである。抑えたりアリティが有効的。

この三人の妖怪めいた老婆たちになった一人男の配色がある。社長の死後をとりにきった専務の瀬戸重助（小金井宣夫）。その変貌の一刷けが生きる。

誰にでも必ずおとずれる老人の孤独な憐れな姿をこの芝居は見せる。

いろどりで若さをいっばいに見せた女中お花（吉川なが子）が好かった。（もも）

あゝウエディングドレス 和田 葉子

登場人物

水原頼子 (みどり洋裁店経営・60歳位)
堀木尚子 (百貨店デザイナー・60歳位)
宇野君江 (みどり洋裁店の家主・頼子の女学校の同級生)
寛一 (君江の夫)
理江 (寛一と君江の娘)
西城真一 (理江の婚約者)
坂口悦男 (クリーニング屋の隠居)
修 (悦男の息子・クリーニング屋)
泉 隆夫 (頼子のかつての恋人)
中野 (看護婦・既婚者)
小山 (看護婦・独身)
かおり (頼子の弟子)

1

スの仕上りと比べてみている。

秋の夕暮れどき。

かおり、スカットで歌いながら、ときどき歌詩を口ずさんでいる。

かおり へ……アナタインノシマエー、オヨ・メーニクノン……

中野 私もなんなん着たいない、もいっぺん。

小山 もいっぺん？ メッタどあつかましいやん、おぼんのくせに。まだいっぺんも着てへんもんの身になってほしいわ。

中野 おぼんとはなんやのん。まだ、おねえちゃんって言われるんよ、高校生に。

小山 へえ、その子ド近眼やわ、きつと。私はおっとこ前でやさしいて、家庭第一、仕

みどり洋裁店の仕事場。
道路に面して、ショーウィンドー。
ボディに平凡なスーツが着せてある。

部屋には大きな裁断台、アイロン台。
ミシンが3台。

別のボディにピンクのウエディングドレス。

中野と小山が、ミシンに向って仕事を
している。

もう一つのボディに、かおりがスー
ツの上着を着せてみてウエディングドレ

タシこれや。

中野 水原先生、ありがとう。ワッお腹にこ
たえるこの匂い。帰ろ。

小山 チョイ待ち中野さん、私はもうちょっ
と……。いや帰ろ帰ろ、お腹すいてきた。

かおり (ウエディングドレスを見ながらつ
くづく) うーん、古いなあ。

ちょうど水原頼子が出てきた。

頼子 古いて何が？

かおり え？ このレース。

頼子 古いものほど値打ちがあるのよ。君江
さんが神戸で見つけてきはったんやわ。中
野さん見せてごらん。(子供用のズボンを
見て) 初めてにしたらまあまあやね。

中野 何点ぐらいですか。

頼子 技術点は四十点、愛情点六十点で百点
かな。

小山 アタリー！ ご正解！ 二泊三日のハ
ワイ旅行！

中野 バカ！ ありがとうございました先
生。

小山 (作りかけのスカットを見せて) 先生
先生、私は次のときファスナーつけやねえ。

頼子 ちょっとむつかしいけどがんばって
なさい。中野さん、赤ちゃんがいるのに三
交替勤務をしてはるんですって？ えらい
ねえ。

小山 えらいのはこの旦那さん、中野さん
が夜勤のとき旦那さんが寝かせるし、保育
所の送り迎えも。タクシーの運転手さん。

頼子 そう！ 男の人も変ったんやねえ。

中野 はあ、私に変えました。

頼子 恐れいました。

小山 先生、私はね自分でウエディングドレ
ス縫いたいですねん。ね、お願いします。

中野 その前に恋人をキャッチせんと。

小山 ドレスだけ先に出来たりして。(笑う)

中野 ねえ、先生、看護婦の仕事ってね、一
生懸命やってるけど、なんかこう形が残ら
へんでしょ。だから編み物とか洋裁とか、

何か作りたくりますねん。

小山 ほんでもね、空き時間がまちまちや
から、なかなか好きなことできへんやん、パッ
カみたい。

頼子 わかったわ、あんた方の都合のいい時
間にいつでもいらっしやい。朝でも夜でも
私はいいのよ。

小山 お願いしまーす。

事第二という男がおったら、うち一生食べ
さしたげるけどなあ。ね、かおりさん、誰
が着はりますのん、それ。すごい上等で
すね。

かおり へ……イクナート、ナイター……。

これ、この先生の娘みたいな人のん。

小山 へえ？

かおり なんてそんなに結婚にあこがれるの？

小山 ちゃん。

小山 えっ！ かおりさんは憧れませんか？

かおり 別に。

小山 夜勤の仕事なんかメッタきついですが
ん、看護婦って。

中野 一生貢ぐというたん誰や。

小山 せやからマッチみたいな男やったらの
話。

かおり 歌手の？ マッチ？ (笑う)

小山 ピンポン、ピンポン。(かおりと一
緒に笑う)

中野 出来たあ、作品第一号、シンちゃんの
ズボン、かわいい、ほら。

小山 わあ、メッタかわいいやん、かあわゆ
い！

かおり なるほど、それが幸せ。

小山 職場と家庭、両手に花、女の夢はピッ

中野 ありがとうございます。
小山 見たいな、それ着る人。
中野 よっぱどエシのお嬢さんやろね。
中野・小山 さよなら。

中野と小山去る。
頼子、二人を見送る。
ショーウィンドーのブラインドを下ろす。

頼子 冷やりしてきたわ。

かおり 秋ですわね。秋になると私、調子が出てきます。(姿見で髪を整えたり、洋服のベルトを直したり)

頼子 今日はいいこと?

かおり ちょっと、フッフ。私も行く先、決めんことにはね。

頼子 そう?

かおり はあ?

頼子 違うの?

かおり しませんよ結婚なんか。それより先生、いいんですかあの二人。ずっと教えてもらう気です。

頼子 それ位のことではできると思っわ、これから。

かおり 私も丁度いいチャンスだったかも知れませんが、先生がこのお店辞めはるの。
頼子 まだ決めてしまった訳ではないけど……。

かおり でも商売替えしはるんでしょ。私、前々からチャレンジしたいと思うてたんです。ほら今度大阪城のあたり、副都心ビルがジャンジャン建ってるでしょ、ユキ・モリエのスタジオが来るんですって。ひょっとしたらそこへ紹介してもらえるかも知れませんね。

頼子 そう、超一流のデザイナーさんが、大阪へ……。

かおり 先生にはほんとに感謝してます。基本をきっちり腕に仕込んでもらいました。

頼子 改ってそんな風に言われると……そのスーツは仕上げてくれるわね。

かおり はい。(窓の外の紅葉を指して) わあ、もみじが光ってる、夕陽が当たって。

頼子 花よりも華やかなんよね、秋のもみじって。たった一本だけであんなに一生懸命……健気やわ。

かおり 先生そんな文学的なこと言わんといて下さいよ。(笑う) あっ焦げくさい、の

と違います?

頼子 あら、シチュウ!

水原頼子キッチンの方へ飛んでいく。
かおり、くすりと笑う。

電話のベル

頼子、杓子を持ってあわてて飛び出してくる。

かおりが電話を取る。

頼子、かおりへの電話であることを確かめてキッチンへ。

かおり はい、はい、はい。心斎橋のバルコの前の……はい。大丈夫車で飛ばすから。うまいこといったら今夜は私がおくる。はい、はい、了解。(電話を切る。一人でVサインをして) これでグー。(キッチンを覗いて) 失礼しまーす。えらいごちそうですわねえ。今夜は旦那さん、お帰りが早いですか?

頼子 (声のみ) 気まぐれやからねえ、うちの旦那さん。

かおり バタンナーの助手の口、決まるかも知れません。行ってきまーす。(去る)

頼子出てきて、かおりを送り出し、入

口のドアに施錠する。そして仕事にかかる。

しばらくして、鏡の前でさっき、かおりがしていたようなポーズで身なりを整える真似をしてみる。馬鹿らしくなってキッチンから花を持ってくる。花瓶をさり気なく置いてみたいのだ。あっちへ置いたりこっちに置いたり。やっと置くべき場所を定める。

はっと気がついて、入口の施錠を外す。時計を見る、まだ早い。

ウエディングドレスとかおりが縫ったドレスを見比べる。

ウエディングドレスをボディから外して、鏡の前で自分の身体にあててみる。その内に着てみたくなる。勿論ファスナーは止まらない。鏡の前でうっとりとした色んなポーズ。

そっと宇野理江が来る。

頼子 理江ちゃん!

理江 すんません、チャイム鳴らすの忘れた。

頼子 (脱ぎながら) このね、か、肩のあたりの感じがどうもね。

理江 ううん。私はその感じが好き。頼子おばさん、よう似合いはる。

頼子 理江ちゃん!

理江 ほんと。おばさん此頃ものすごく若いもん。うちのママと同年やなんて、とって

も思われへんわ。

頼子 理江ちゃん、もういっかい着てみて。理江ちゃんの洋服はちっさいときからずっと私が作ってきたんやし、どんなデザインが似合うかは解ってるつもりやけど……これ、お袖の感じがちょっと古い……ことな

いかしらん。

理江 いいですって、それで。

頼子 えらいご気嫌が悪いみたいやね、どないしたん。

理江 尚子先生は?

頼子 今夜は弟さんとこへ泊ってるって。理江 うちのママ来ませんでした?

頼子 いいえ。理江ちゃんの結婚式のこと、あれこれと走り廻ってはるのと違う?

理江 頼子おばさん……私、結婚……止めようか思います。(どつと涙)

頼子 え? ほらハンカチ……あ、ティッシュ

ユ。(ティッシュペーパーを一杯渡す) 理江 かわいいティッシュ入れ。(鼻をかむ)

頼子 どうしたん。

理江 自信ありません、私。

頼子 そんなこと! このウエディングドレス勿体ないやないの。

理江 このドレス着て式だけあげて、すぐに別れよかしらん。お母さんもきつと、「このレースなんぼしたと思うてるのん!」ってギンギンになって怒るに決まってるし。

頼子 結婚する前から別れるなんて、そんな段どりのええこと言わんといて頂戴! お母さん、反対してはったけど、やっと納得しはったんでしょ。

理江 しぶしぶね。

頼子 だったら話をあと戻りさせたらあかんなやないの。

理江 今度は彼が怒りだしたんです。

頼子 西城さんがなんでも……。

理江 昨日、彼がうちに来てお母さんとやり合ってた……それで彼が私に当り散らして……親に反対された結婚なんて、きつとうまいこといかへんのやわ、これから先も……。

頼子 なんと古臭いこと言うの、好きなんですよ、好きな人なら、地震、雷、火事、親父、誰が反対しようと家出しても一緒に

なるもんよ。理江ちゃんみたいなお嬢さんは、手鍋さげてもの心意気は無理なんかしらね。

理江 そんなにボロクソに怒らんといて頂戴。

頼子 私だって理江ちゃんの結婚式楽しみにしてるんよ。一体何がこんがらがって喧嘩になったん？ え、ジュリエットちゃん。

理江 お母さんが悪いんやわ。結婚式に、彼の子供……とし君を出席させんといてくれと言ふのよ。うちの方の親戚に、彼が再婚なんをかくし通すつもりなんやわ。私は初めにはつきりさせたい方がすつきりすると思うんやけど、ほんとうちのママは頑固やから。

頼子 うん、それは真実に近い。

理江 第一、とし君が可哀想やないの、私は、とし君が大好きやのに。零歳児から私が受け持ったんよ。とし君のお母さんはお気の毒に病気で亡くなりはったんやし、保育所の友達みんな賛成してくれてるのよ。

頼子 解ったわ、私が話たげるお母さんに、結婚というのね、チャンス逃がしたら、追っかけても追っかけても二度と捕えられへんかもわからへんものよ。しっかりするんよ、理江ちゃん。

理江 頼子おばさんでそんなに情熱家だったんですか。

頼子 (ハッと恥しそうに) いややわ、理江ちゃん。

理江 おばさんみたいにやさしい人が、なんでも一人でははったんか不思議やわ。

頼子 おいしいものは先に食べてしまわんと、翌くる日には口に入らん時代やったもん。

理江 うちのママも言うてるわ。南瓜の蔓でも薩摩芋の蔓でも口に入るだけましやうた。パパとの結婚、ママは後悔してるのと違ふかしらん。

頼子 そんなことはないと思うけど。

理江 でも私と姉さんの母親が違ふことで親戚の人達にメッチャ気兼ねをしてるみたい。だから彼との結婚を徹底的に反対してたんだよ、知ってはるでしょ。

頼子 君江さんがね、夫の苦勞、子供の苦勞、親戚つきあいの苦勞いうのはね、一種のよろけやと思うて聞いてたわ。後悔なんかしてるもんですか。私はずっと君江さんのこと羨ましいと思うてきたわ。

理恵 うちのママは頼子おばさんの方がすつきりして羨ましいっていつも言うてますけど。

頼子 おかしいなあ、私と君江さんて。(笑う) 何か食べる？ お腹すいてるんでしょ、サンマの塩焼きとシチューと小芋の煮いたのがあるけど。

理江 えーっ、サンマとシチュー？

頼子 え？ あらほんと、おかしい取り合わせ。私、緊張すると、すぐにこういうスカタンやってしまうの。

理江 尚子先生が帰って来やはらへんのに、えらいご馳走作りはったんですね。

頼子 あ、明日でも食べられるから。

理恵 私、今日は食欲どころか……。

頼子 そう。そしたらいいもんあげる、ちょっと待っててね。

頼子 キッチンへ。

理江、部屋の中を見廻す。ウエディングドレスを眺め、お花が活けてあるのに気付く。

理江 誰かお客さん？

頼子 いいえ。(ウイスキーボンボンとお茶を持って出てくる) 理江ちゃんに取っつたんだよ、これ。

理江 ウイスキーボンボン！ 大好き。

頼子 あっ、レモンティの方が良かったのにね、ごめん。

理江 尚子先生には長いこと会ってないわ。

頼子 尚子さんはお酒が飲めるけど私は甘党。まるで旦那さんみたい、彼女。今年一杯でね、尚子さんも停年でデパートを退職しやはるの。それで前から弟さん夫婦と一緒に暮すことになってるの。

理江 そしたらおばさん……一人ばっちに……？

頼子 そう、でもいいの。

理江 おばさんって強いわ。私はほんとに意気地なし。

頼子 元氣だしなさいよ、甘いものをちよつと食べたなら氣持が落ちつくでしょ。彼と仲直りしなさいよ。(チャリと時計を見る)

理恵 そんな単純なことではないんです、彼とママの喧嘩。私って保育所へ勤めて一人前になったつもりでも、おばさんが言いはるようにどっか甘い所があるんです。こんな上等のウエディングドレス、ほんとにママに断ったら良かったのに。だから彼が怒るんやわ、彼は自分の考えをちゃんと持っている人なんです。

頼子 ウエディングドレスのことで喧嘩にな

ったの？

理恵 い、いえ、そういうことではなくて……

……彼の考え方に私が近づけるかどうか……昨日、うちの両親の前で自分の意見を述べる彼、初めて見たんです、ああいう一面。

頼子 ここへ来た時も「はあ」「いいえ」しか……あんまり喋らんとニコニコしてはる人なのに。

理江 あー、なんであんな人を好きになってしもたんやろ……。

頼子 悩みなさい悩みなさい、若い人って悩んでる時でも綺麗やわ。

理江 おばさん言うたら、今日はちっとも話に乗ってくれはらへん。

突然、玄関のチャイムが四回鳴る。頼子、極端に驚く。

頼子 はあーい。

理江 私、帰ります。

頼子 あ、そう。

理江 また近いうちにゆっくり。

チャイムが再び(一回)鳴る。

頼子 どなた？

坂口修 坂口です、クリーニング屋の。

頼子、玄関へ出る。

頼子 あの、始めてまして、水原でございます。

理江 失礼します。(去る)

頼子 あの、あの、理江ちゃん。(呼びとめるが理江は行ってしまふ) どうぞ。

坂口修 (中に入りながら) 昨日親父から聞いたんですけど……ちょっとこの近くまで急ぎの品物を届けに来ましたんで……このお店をですか。

頼子 あ、はい。あの私は……お店の方は別に……いえ、でも。

坂口修 うちの店ではズボンの裾上げとか修理とか……お直しをするおばさんが急に病気になるましてね。

頼子 あ、はい。あ、坂口さんに色々相談に乗っていただきまして……すみません。坂口修 いえ、親父はこのあたりだけを廻ってましてね、取次店の話はうちとしても採算が合うかどうか……。

頼子 ですから店の方は別に……あの、あれですけれど……。

坂口修 (首をかしげて) そうですか……。
(店の中を見廻す)

宇野君江がやってくる。

君江 お客さん? (ウエディングドレスを見て) わあ、すごいのが出来たやないの。
頼子 君江さん!

君江 例のおばさんとかへ招待状を持って挨拶に行ってきた帰りの。

頼子 あ、ほら、坂口さんの……。

君江 へえ、クリーニング屋さんの。私、このお店の……ほれ、あのこの人にずっと使っていたいてます。

頼子 家主の宇野さん。

君江 はじめまして。

坂口修 はあ。

君江 おたくのお父さんがね、ここで取次店やったらどうかって言うてくれはりましたね。

坂口修 しかし、取次店というのは……。

頼子 ですから私は……。

君江 このマシンとか裁断台はどっかへ片付けてやね、ここにカウンター作って、うしろの方へ棚を作ったら充分いけると思いま

すけど。うちの知ってる工務店さんに頼ん

ますわ。うちの主人、運送会社やってますね。私はまあこんなお店を二・三軒、みな他人に貸してますねんけど。私はかま

へんのよ、このお店を改装しても、頼子さん。大きな品物、絨毯とかお布団とかはね、

ここでは預らんことにして、普通の衣類だけにさせてもらうて。この辺にクリーニングの取次店は一軒もないのやし、開店の前にチラシなんか入れて充分宣伝したら、き

っとお客さんがつくと思いますけど、なあ坂口さん。お父さんもえらい乗り気になっ

てはることやし。(頼子は、坂口修と君江のお茶を持って来ていた)

坂口修 乗り気ですか。

君江 結構なご隠居さんですよ、お酒が好きで陽気なお方で。うちの主人なんかお酒も煙草もいけん人やさかい、ほんまに窮屈で。(笑う)

坂口修 ここでお酒を!

頼子 い、いえ、いっぺんかにへんだけ、私の相棒と三人で。あ、君江さんとも一回。

坂口修 親父、酒にはだらしもないもんで。ほんならまあ、うちの奴と考えさしてもらいますわ。

君江 まあよろしいに、おたの申します。

坂口修去る。

頼子、見送る。

君江 行ってきたんよ、京都まで、いげすばっかり言いはるおばさんとこへ。はい、このお二人は絶対に出席してくれはるわね。

(四角い封筒を二つ渡す) それからこれは京都の鯖寿司、おいしいねんよ、このお店。

頼子 君江さん……!

君江 え? どうしたん。

頼子 いえ、これはありがと。でもほらさっ

き。

君江 あら私、なんか要らんこと言うた?

あんたは商売気がないからちっとも話がハキハキ進まんやないの。

頼子 いやそれが……。

君江 ああ赤い鼻のクリーニング屋のおじいさん……(笑う) おじいさんはいかなかな、

私らとあんまり年が差らんやろに……あの人の息子さんにしたら、えらいシャッキリした人やないの。

頼子 君江さん、私、結婚するかもわからへ

んのよ。

君江 え! 結婚! 何を言うてんのん頼子さん。

頼子 ううん、本気やわ。

君江 今迄苦勞なしでやって来たのに、何を言出すのん、しょうむない。結婚なんてね、ほれ、このドレス着たまま、泥田ん中へ飛び込んで田植をするようなもんやないの。あんたは何も解ってえへんの。京都へ

理江の招待状持っていったらね、ほしたらきっちりやられてきたわ。「へーえ、実の娘やから遠慮して、白無垢も打ち掛けもなしでおやりやすの」って一本取られてきた。

そんなんよ親戚づきあいて。やめときゃめとき。……なんやのその顔、誰と結婚する気?

頼子

せやからあの坂口さん……。

君江 阿呆なこと。(笑う) あんたの理想は

シューベルトやゲーテを好きな人やないの。はいでやね、あのおばさんが出席しやはるのに、子供連れの結婚式やってみなさいな、

「へえ、えらいフロクづきどすなあ」ってやられるに決ってるやないの。理江もええ年やし、早いこと片づけてしまわんと、ア

たら、そのドレス着られんようになってしまうやないの。

頼子 三年も反対してたんは誰やったんですか? 昨日喧嘩したんでしょ、さっき理江ちゃんが出来たわ。(時計を見る)

君江 もう報告に来たん? 理江はなんでもないに私に逆のやろ。上の康子の方がよ

っぽど私の言うこと聞いてくれる。ようまあ康子を育てておいたことやと思うわ。

頼子 理恵ちゃん、結婚止めるって言うてたわ。

君江 ようそんなこと! 止めるんならうちの娘、サラッピンにして返してもらわうわ。

昨日、この招待状が出来たんやうちへ来たんよ、西城君が。話のはずみで私が言うたことにえらい噛みついてくるんやないの。

まるでこの前の戦争を始めた責任が私にあるみたい言うてね。

頼子 戦争の責任?

君江 私らは戦争のお陰でひどい目に会った言うたらね、何やら訳のわからん理恵を言

い始めてなあ、今の若い人らには何が解るもんかいな。どうも好かんわ、あの子だけわ。

頼子 トシ君のことで喧嘩したんやなかった

の。

君江 それもあるけど。理江も理江や、なんであんな中古車にいかれてしもたんやろ。

保育所なんかに動めさせたんが間違いやった。あんたが「勤めに出せ勤めに出せ」というから、あんな悪い虫にひつつかれてし

もって。

頼子 あんただって康子ちゃんが居て良かったと言うたやないの。……ねえ、とし君結婚式に出したげたら。

君江 そらあかんわ、誰が何と言うても。

頼子 ご主人も反対してはるの。

君江 何を考えてはるのか解らん、口に錠前

かかっているあの人。

頼子 あんたが三原山の噴火みたいにボンボ

ン言うからやないの。

君江 私が喋らんなんたら、二人でずうーと、

にらみっこしとらんなんのに。

頼子 君江さん、理恵ちゃんを私みたいに一人ばっちにさせたいの? ほんとにその方がええの!

君江 ……私は理江を誰にも取られとうはな

とこへは来てへんわ。
頼子 贅沢言いなさんな、何十年も夫婦やってきて。

電話のベル。頼子飛びつく。

頼子 あ、はい、みどり洋裁店……え？ 焼きそばは作ってません。(切る)

君江 さ、帰ろ。結婚の取り消しやなんて今更……首に縄つけても結婚させるから。私からこんなドレス、逆立ちしても着られへんかったのに。

頼子 ねえ！ (時計をちらりと見る)……さて私、お風呂に入ろかな。

君江 あんたはあかんよ、男はんが欲しい年でもないやろに。

頼子 肌寒いから風邪をひかんといてね、帰り道。

君江 尚子先生、遅いねえ。しかし殺生な人やなあ、何十年もあんたと組んでやってきて、停年になったら、ハイサヨナラやなんて。

頼子 そうよ勝手なんよ、もともと。私なんか飯炊き婆さん。

君江 ほんまに勝手もんやわ、あんたのこと

なんかちつとも心配してはらへん。

頼子 でもね、弟さんとの約束はずっと前から決ってたことやし……ま、サバサバしてる人から喧嘩もせずすんだし……仕方ないわ。

君江 ま、帰りはったらよろしいに。

君江去る。

頼子 時計を見る。鈴虫の鳴き声。お茶とウイスキーボンボン入れをキッチンへ。シャワーの音。

頼子、玄関の鍵をかける。電話！と気づいて、古い金盞を持って来て、電話器をその上に置く。一度受話器を外してみて、ツーツーの音を確かめて確実に置く。

頼子、腕時計を外してシャワーを浴びに。

遠くでピアノの練習曲。……間……チャイムが四回鳴る。

頼子、ガウンを着て飛び出して迎える。坂口悦男がそろりと入ってくる。

頼子 早かったんですね。さっき息子さんが……びっくりしたわ。

坂口 息子が？

頼子 何か仰言ってました？

坂口 入れ違いに家を出たから。

頼子 言うてくれはったんですか？ 私らのこと。

坂口 それは折を見て……まず店のことが……

……あんたの生活のことが大事やから。頼子 ありがと……。

頼子、感激して黙ってしまう。

坂口 そんなことがそんなに嬉しいでつか。頼子 尚子さんがデパートのデザイナーやっ

てて、注文服を私が縫うてたんよ。その相棒が居らんようになるんですもん、もうすぐ。

坂口 せやから僕も必死に考えたんですわ。頼子 来てくれるんでしょ、ね、ここへあん

たが。

坂口 へえ、僕もまだ注文取り位自転車で廻れますさかいなあ。

頼子 夜になったら、あんたがここでお酒を飲んで……私は内職の洋裁位の仕事ならあると思うし、修理の仕事なら簡単に来れるし……。たまにはコンサートなんかにも一

緒に行きたいわ。

坂口 へえ、うちで二人一緒にテレビをぼんやりと見ながら、あやなあ、こうやなあと話が出来たら……そばで嫌みを言う人間がおったらたまりまへんで。

頼子 ねえ、お酒にします？ 変なおかずですけど。

坂口 お酒はあとでよろし。(と頼子の手を取る)

頼子 はい。

坂口、部屋の電気を消す。

二人、手をつないで隣りの部屋へ。

暗闇の中で鈴虫の声激しく。

遠くでバイクの爆音。

暗転

2

口笛の音。

前場より数日後の、みどり洋裁店。

明るくなると、堀本尚子が口笛を吹きながら裁断台で布地を裁っている。銀髪。しゃれたパンタロン姿。

尚子 へーえ、かおりさん、ユキ・モリエのアトリエに就職決ったん？

頼子 (声) うん、そう。

尚子 あの子なら、他のお弟子さんに負けんとやっついてけるやろけど。

水原頼子、髪をとかしながら出てくる。大きく伸びをする。

頼子 あー、よう眠った。第一体操、ハジメッ！ チャンカチャンカチャンチャン……。

尚子 おお、おお、ギョクリ腰になっても知らんよ、ハッスルしすぎて。それで挨拶もせずに辞めたわけ、彼女。

頼子 尚子さんが二・三日留守だったから。

又、改めて来ると言うてたけど。

尚子 ふん、私、あんなズルズルの服、嫌い

！。頼子 ユキ・モリエ？ そう、私もあんなズ

ルズルのスタイル、嫌い。ね！

二人笑う。

頼子、ショーウィンドーのブラインドを開ける。

尚子 で、どうだった？ 留守の間、一人で恐かった？

頼子 恐がる程の年でもなし、大丈夫よ。で、尚子さんの方は？ 弟さん夫婦どう？

尚子 うん、まあね、彼女も勤めてるしね、甥と姪も中学と高校だし、ま、私は食べる

物は何でもいい方やから大した問題はなさそう。

頼子 そう、良かったね。

尚子 一昨夜ね、私の還暦祝いと退職の前祝

い兼ねて、ロイヤルホテルでフルコース、みんな一緒に。勿論、私の奢り。甥も姪もえらい喜んでね。自分で自分の還暦祝いをするなんてね。(笑う)

頼子 年が明けたらいいよ再出発という訳やね。

尚子 長いことありがと。お陰でこの二十五

年、いっぺんも台所をやらずに済んだ。頼子 いいえ、至らぬ女房でございました。尚子 ここれらの道具全部置いていくからね、使って。

頼子 ありがと、でもクリーニング屋さんやるとしたら、この裁断台はここでは邪魔になるわね。

尚子 (布を裁断して) はい、じゃこれお願い。うるさい奥さんのやからよろしく。私、出かける。

頼子 お帰りはいつもの通りでございますか、旦那さま。

尚子 坂口さんも一緒に飲もうよ今夜。ご馳走作っというて、ええでしょう？

頼子 彼ったらね、少年みたいよ。(含み笑い)

尚子 (頼子の頭をポンと叩いて) アホ！

頼子 いってらっしゃい。

尚子 お隣りのもみじ、そろそろ色づいてきたねえ、一度行こうか京都かどっかへ。みんなでさ。

頼子 賛成！ デパートお休みの日にね。

尚子、出かける。

頼子、尚子のデザイン帳を見て、布地類を丁寧に片づける。さて縫いはじめようとする。

チャイムの音。

宇野寛一が来る。宇野運送の制服を着

ている。

宇野 お早ようございます。

頼子 まあ、宇野さん！ お早いですねえ。

宇野 えらいすんまへん、吃驚さして。

頼子 君江さん……お変わりございません？

宇野 へえ、それが……。

頼子 まあどうぞ。お茶でもなにしますよつて。

頼子、キッチンへ。

宇野、ウエディングドレスを眺める。

宇野 かいらしおまんあ、ええのんこさえてくれはりましたなあ。

頼子、レモンティとボンボン入れを持ってくる。

頼子 結婚式、尚子さんと二人で楽しみにさせてもらうてます。チョコレートですけど、どうぞ。

宇野 へえ、おおきに。(お茶を飲む。ボンボンを握み) これ、ウイスキー入ってまっしゃろ。

頼子 雀の涙程ですよ。

宇野 それが……今、運送の途中ですねん。

頼子 まあ！(笑う) それ位で？

宇野 それであきまへんねんなあ、僕。

頼子 君江さん、どないかしはったんですか。

宇野 なんてこないに、うちの中がワヤクチャになるんかいな思うてねえ。

頼子 理江ちゃんが……？

宇野 上の康子ですんねんがな今度は。

頼子 康子ちゃんはお母さんにはハイハイでしよう？

宇野 そう思うてたんですわ僕も。所が康子がえらいいけったいなことを言いよりましてな。

頼子 へーえ。

宇野 あれは婿の実家のもんが言い出したに決ってますねんけど。あっちの家の法事にやってからの話やさかい。

頼子 法事がどないかししましたん？

宇野 いや、それがな、「お墓には夫婦ひと組しか入れへんのやな」とポロツと言いましたんや。つまり君江は後添いですやろ……。

頼子 でも君江さんは、康子ちゃんが一歳の時から……二人きりの新婚時代なんて一日

もなかったんでしょ。私が呑気に洋裁学校へ行ってる時分、君江さんは康子ちゃんをおんぶしたまま仕事してはった位ですのに。

宇野 僕はもうな、「墓なんか要らんさかいに、今からそんなこと気にせんといてくれ」とみんなに言いましたんやけどな。

頼子 ……残酷な話ですわ。

宇野 僕らの時代は、くじ運が悪うおましてんな。先生とうちの奴は女学校の時分から友達やから、何もかも知ってはると思いまっけどな。前のなにとは、復員してから一緒になりましてんけど……へえ、前のは、おとなしいんでしたけど、元もと身体が弱まずてなあ、僕はまだ動機に出てまして給料は安いし、ものは高いしで、ええことなしでしたわ。そこへ僕のテテ親が口喧しい親父でしてなあ、ま、なんやかんやで腎臓がなあ。今やったら助かる病気のやのに。

頼子 ですってねえ……お気の毒に。

宇野 えらいすんまへん湿っぽい話で。所でああ先生、僕の頼みですんねんけど、(胸のポケットから劇場の入場券を取り出す) これであれの気分を変えてやってくれまへんか。あれにひっくり返られたら、何もかも

ストップですがな。(と渡す)

頼子 杉良太郎！

宇野 配達のついでがあつたもんでさかいに、新歌舞伎座へ行つて切符買うてきましてんや。あれのお陰でこまで来たようなもんですしなあ。あれと一緒に買ってから借金してトラック一台買うてね、割と商売の才覚がおましてな、あれは。

頼子 たまにはお二人で行きはつたらよろしいのに。

宇野 減相もない。歌舞伎座まで行って喧嘩するのんかないまへんがな。虫が合わんのかして、僕がひと言いうたら、十こと返ってきたまねん。黙つたらんと仕様がおまへんやろ、と言うて放ついたら(ウエディングドレスを指して)この話がワヤになつてしまふしなあ。

頼子 困った夫婦……君江さんはちよくちよく行つてはるらしいけど、私はもうひとつねえ……。

宇野 そんな殺生なこと言わんと助けてくんははれ。それはそうと先生、えらい若返りは……ええ話がおまんねんな？ 杉良太郎もたまには好らしいで、先生。

頼子 仕方がないわね。で、理江ちゃんの結

婚式に、とし君を出席させること、ご主人も反対……。

宇野 いいえ、僕は何も言うてまへんで、何も。僕が康子を連れて結婚したんやさかい。文句なんか言えますすかいな。理江もええ年でさかきになあ。

頼子 理江ちゃん、私の娘みたいな気でいますねんよ。

宇野 康子が小さかったもんで仕様ことなしに一緒になつた様なもんですねんけどなあ。子供は出来へんのやろと思つてましたんや、それが、あんまりまたがんようになってから、ひょいと出来た子でな、手離すのんは惜しい気もしまっけど……え？ どないしはりましてん、先生。何が恥かしおますねん。

頼子 はい、はい、あとで君江さんにお電話させてもらいます。

宇野 おおきに、えらいすんまへん、恩に氣ます。ほんなら！

頼子 お氣をつけて。

宇野 車に乗ってる時が一番気楽ですわ。

宇野、一礼して去る。頼子、見送る。そして、チケットを手にして溜め息。

杉良太郎の「すきま風」。

拍手の音。

3

前場から数週間後の夜の公園。

坂口がベンチに座ってハーモニカを吹いている。

頼子 ハミングで歌っている。「ふるさと」である。

曲が終った。

頼子、ハンカチで涙を拭く。

坂口 泣いてますのんか？

頼子 いいえ、あんまりきれいな曲で……

「埴生の宿」吹けます？

坂口 え？ なんのやど？

頼子 ヘハニウノヤドモ ワガヤード……

坂口 そんな聞いたことおまへんわ。

頼子 あ、すんません。頭がガンガンしてた

んです。杉良太郎オンステージ。私が古いのですからね、すごいボリュームで目の廻るようなライト……ついていかれへんのです。やっと心がすっとしました。

坂口 そら良かった。一生懸命稽古しましてんで。

頼子 ありがとう。

坂口 僕ね、この唱歌習った時「兎がおいし

い、かの山」と思ってたんでん。頼子 私「忘れがたき」いうのは、「仇討ちかしらん」と思ってた。

坂口 小学校の時、エシの女の子が一人、オルガンなんか弾きよってね、音楽室の。

頼子 「ネコフンジャッタ、ネコフンジャッタ」。

頼子 そうそう、私のクラスでもエシのお嬢さんがピアノを。私は「タコフンジャッタ、タコフンジャッタ」と……

坂口・頼子 「タコフンジャッタ、タコフンジャッタ、タコフンジャッタ、フンジャッタ」。

二人笑う。

坂口 久しぶりやなあ。

頼子 え。

坂口 声を出して笑うなんて。頼子 私も。

二人、顔を見合せてフツと笑う。

頼子 寒いことありません？

頼子、上衣を着る。

坂口、さり気なく手払って、ちょっと髪にさわる。

頼子 こんなこと……。

坂口 え。

頼子 誰もしてくれへんかったわ、親のほかに。

坂口 ああ。

頼子 坂口さんとうなるまでは、心の底でいつも泣いてたんです。胸の中は涙の海……誰にも頼るまい、誰にも甘えるまいって、からい涙……。でも今はね、思いつきり甘い涙で泣いてみたい。おかしい？

(笑う)

坂口 子供みたいですね。

頼子 そうなんです、子供にかえったみた

い。変ですわ、さっきから母のことを思い出して。最後まで見たんです、だから心残りはないんです。

坂口 それで一人で……。

頼子 両親のお骨は天王寺の「一心寺さん」に納めてありますね。私はいつかはそこへ行きますわ。

坂口 そんな話、やめときまひよ。

頼子 「生れてすみません」って言葉、流行ったでしょ、大幸治。

坂口 えー？

頼子 生きてて良かった、今日まで。

坂口 本の話か、本ねえ。子供の時は、あ、若い時にはアレコレ読みましたけどなあ。

クリーニング屋言うたら、あんた力仕事やし、熱いし、地獄でっせ。息子の嫁なんか、昔の苦勞何にも知りやらんくせに、嫌味ばっかし。今はあんた、クーラーなんか入れよってからの。しかし、僕が一代で土台を作って来ましてんで。

頼子 お嬢さん、しっかりしてはりますのん？

坂口 口ばかりですわ。

頼子 (おおげさに) ああ、こわ！

坂口 今から馬鹿にされてたまりますかいな。僕の楽しみは、チビリチビリとやりながら、

テレビで野球みるが、相撲みるか……あと

は昔の歌なんか……テレビだけは相手にしてくれまして。早よ、あんたと一緒に見たいでんな。

頼子 尚子さん、弟さん夫婦とうまいことやれそうですって。

坂口 そらえらいこっちゃ。こっちは早いこと話を決めんことには。うっ、寒うなりましたな。駅前でキウとひっかけて……あ

んなたのこと、息子にはつきり言いますわ。頼子 私も眼鏡を買いかえますわ、まだまだ働けますもん。

坂口 こんな日が来るなんてねえ、こんな日

が。

二人、立ち去る。

4

明るい公園。

小学生がたどたどしくフルートを練習しているらしい。子供達の遊ぶ声。

ベンチに座る理江と西城。

理江が絵本を朗読している。

理江 (さの・ようこ作「おじさんの傘」より) 「あらマー君、傘がないの、一緒に帰りましょう」……小さな男の子の友達の小

さな女の子が来ていました。「雨が降ったらポンポン、雨が降ったらピッチャンチャン」二人は大きな声で歌いながら帰っていききました。「雨が降ったらポンポン

ロン、雨が降ったらピッチャンチャン」小さな男の子と小さな女の子が遠くに行っても声がきこえました。「雨が降ったらポン

ポロン、雨が降ったらピッチャンチャン。雨が降ったらポンポロン、雨が降たらピッチャンチャン。雨が降たらポンポ

ロン、雨が降たらピッチャンチャン。」おじさんもうたられて声を出して言いました。

「雨が降たらポンポロン、雨が降たらピッチャンチャン。」

西城 あ、そこね、自分の傘を濡らすのが絶対に嫌なおじさんは、子供達が雨が降って傘をさすのがどうしてあんなに嬉しいのか解らん訳やろ。不思議で仕様がなくて、恐る恐る子供達の真似をしてみる……だから

今みたいにいきなり弾んでしまうのは不自然やなあ。

理江 あ、そうか。すると「雨が降ったらボンボロン、雨が降ったらピッチャンチャン……」という感じになる訳？

西城 うん、そう。もうちょっと、おじさんの気持ちを煽り下げて……おじさんに見えなかった世界がだんだんと見えて来るような。

理江 解った、ありがと、会長さん。どっちが保母か解らへん。(笑う)

西城 会長さんは、やめてくれよ。

理江 でもそうでしょ、父母の会の会長さんやもん。

西城 この前の喧嘩で先生と親の関係だけに戻ってしまうのかと思うた。

理江 と思うたんよ、そうしようと。でもやっぱりアカンかった。

西城 へえー。

理江 いや、そんな冷い。「読み聞かせ」の研究会に行つて、解らんようになったん、意見を聞きかかったん、西城さんとなら話が通じるもん。つまり会話が成立するわけよ、会話が成立しない人間関係って……特にうちの父と母なんか……でも、私にとつてはどっちも大事な存在なんよ。

西城 それは解るよ。それに君のご両親かて、案外ちゃんと解りおうてるかも知れんよ。

理江 そうかなあ。それは私がつもつと人間的に成熟したら理解できるかも知解らへんけど……。やっぱり西城さんの方が私より上等なんやわ。

西城 上等どころか最低ですよ。設計図は書いても書いても社長にどなられてはっかり。家でも、としをが絵本を読んでくれ言うのに「うるさい！」なんてね。

理江 悪かったわ。とし君、連れて来てくれたら良かったのに。

西城 良く言うよ。「どうしても聞いてもらいたいことがありますの」なんて、切迫つまった声で電話してきた癖に。こらもうてつきり結婚はオジャンの宣告かと思うて、あわてて飛んで来たのに。

理江 すんません。

西城 今日は姉の家族と一緒に「菊人形」見に行つた、としをのことね……ご両親の気持ちも解らんでもないよ、僕は。そんなことで意地を張るほど……そんな人間やないつもりや。

理江 いいえ、それはとし君の人権を無視してるもん、絶対に式には出てもらいます。

西城 君ね、君の気持は有難いけど、そんな風にこだわり過ぎる必要はないよ。もつと大らかに、風が通りやすい様に考えていこうよ。許せないことって、そんな事やないんや。それに今君がやっている「読み聞かせ」の研究会、ずっと続けてほしいな。絵本の読み聞かせなら理江先生と誰かが認めてくれるような、本当に子どもの心がパッと開ける様な読み聞かせができる人であつて欲しいんや、君の一生の仕事として。

理江 有難う。私、保育の仕事って好きなんです。今日はチエちゃんか逆あがりでした。今日はツンちゃんが鉄を上手に使えた。今日はテル君が大きな声で歌えた。今日はヒロ君がヨウちゃんの汗を拭いてやった。今日はモモちゃんの泣き声が可愛かった。何でもかでも嬉しくて笑ってしまうの。受け持ちは違ふけど、とし君がね運動場で遊んでいるといつも目が合うの、ニコッと笑つて……。子ども達がお陽さんの光を浴びて地面を裸足で走り廻つて……。目を輝やかせてお話を真剣に聞いてくれて……。私、あの子らに一杯いっぱい聞かせたいの。でね、エネルギーもらつてるのは私の方なんやと思うの。でも勉強勉強でガチンガチンに固

められてるみたいなの、小学校や中学校へなんかやりたくないなあ、とし君を。

西城 上へ行く程むつつかしくなってるからね。あいつの母親はね、自分の生命とひきかえにあの子を残していったんや。心臓が悪うてね、だから僕は生命の大切さを痛感してる。そやけど自分の子どものことだけやうて、大げさかも知れんけど子ども達全体のことを考えていきたいね。

理江 子ども達全体……。

西城 子ども達のことを話す理江、絵本のことを読む理江、素直に感動する理江……そんな時一番きれいや、君は。

理江 嬉しい。私、美人とは違ふもん。

西城 中小企業の機械設計技士なんて……一生働いてもらうかも知れらんよ。

理江 勿論。私、今の保育所に勤めて良かった！

西城 なんて？

理江 会長さんが大きい人だったから。

西城 こら、また！

理江 ひとつだけお願い。

西城 あ、貧乏ゆすり？

理江 うちの母に、あんまり噛みつかんようにして欲しいの。

西城 解った、気いつける。

理江 真一さんに今日会つて、スカッとした。この前喧嘩した婦人、みどり洋裁店に寄つて、結婚取り消しなんて心にもないこと言うてしまつたんよ、頼子おばさまも心配してくれてると思うわ。

西城 あんなお母さんらしい感じの人がどうして結婚しなかつたんやろねえ、不思議やなあ。

理江 おばさんもきつと幸せになるわ、これから。でも、とし君には悪かつたわ今日、お姉さん達と。

西城 としをのことね、これから先も色んな人の力を借りながらね、やっていこうと思ふんや、小さく小さく考えるなよ色んなこと。

理江 雨が降つたらボンボロン、雨が降つたらピッチャンチャン。

西城 結婚式の前の日は、としをと二人でつかいテルテル坊主を作るぞ。ウエディン

グドレスぬれると可哀想やから。

理江 雨でも嵐でもかまうもんですか。頼子おばさんがそう言うてたわ。

西城 よーし、あの池の所までボンボロロンで走ろう！

理江 おんぶ！……ちよつとだけ！

西城 もう！ちよつとだけな。

あたりを見廻すが、仕方なくおんぶして去る。子ども達の遊ぶ声。

みどり洋裁店。

裁断台はもう置いてない。

ボデイに向つてかおりが布地を着せている。布地をピンで止めていきながら器用に上衣を作っていく。

頼子がきれいなナイロン製の籠で、豆のすじを取りながら、かおりの仕事ぶりを見ている。

小山が布地のままをロングドレスのように着て、ファッションショーの真似をしている。

中野は子ども服のミシンをかけている。

小山 見て見て、見てえな中野さん。ほら解説解説！

中野 では只今から、ユキ・モリエのファッションショーでございます。モデルは三田寛子ちゃん。(笑う)

小山 何がおかしい！(パチパチとウインク)ハイ、ミュージック！

中野 はいきた。(自分が持ってきたラジカセのスイッチを入れる)今年の秋物の特徴は流れるようなドレープと裾の深かいスリット、エレガンスでありながら活動的なキャリアウーマンにフィットするこのシルエツトが特徴でございます。

小山 ウッフン。(悩ましいポーズ)あ、帽子がないとあかんわ、帽子。(あたりを物色して)先生、それ貸して。(頼子の籠を取りあげて帽子のように被る)どう、これ。まいったか！ハットの説明！

中野 ユキ・モリエの新作ハット、ザルハット、ハットと驚くザルハットでございます。

小山 帽子を落すまいと珍妙な歩き方。思わず頼子も吹き出してしまふ。

中野 止めてもう！やってられへんわ。かおり いつもそんな事やつの？

中野 泊りの夜ね、眠くて仕様ないでしょ、

そしたら小山ちゃんが眠気を追っ払ってく
れるの。

かおり 悪いけど音楽止めて。

小山 すんません。(ラジカセを止める)

頼子 (かおりの仕事を見て)なる程ね、
もいろいろ大体解ったわ。

かおり それでね、こうやって形を作っ
てから鉄を入れるんです。それがボタンナ
ーの仕事。そしてパーツを切りとった布地
に型紙を作るんです。だから本当の意味の
立裁断、私も早く一人前のボタンナーに
なりたいわ、今は助手ですけどね。

頼子 かおりさんならきつとされるわ、フ
ッション感覚が秀れてるから。でも既製
服は無理でしょ、その方法では。

かおり 既製服もこのやり方になってるん
です。すよ、大量生産でも。

頼子 あ、そーお。

小山 私も、ほんま言うたら美容師さんか
ディザイナーになったかったんやん、ほん
でもね、顔に自信あったから看護婦にな
ったんやけど。

中野 でも素人には水原先生の作り方の方
が解りやすいわ。

小山 あのはら、ファッションショーの服な

んか、ほんとに着て歩く人居てはりますの
ん。

かおり 夢のない事言わんといて。いるわ、
いる筈やわ。

小山 へーえ。

かおり でも私はね、オフィス・レディの通
勤着をねらってるの。やっぱり、みどり洋
裁店で仕込まれたんですもん。

頼子 ありがと。
かおり 尚子先生にもお礼が言いたかったの
に。

頼子 弟さんと話があるから遅くなるって。
いよいよ本決り。

かおり 淋しくなりますね、先生。

頼子 私のことも心配してくれてね、ジーン
ズ専門の社長さんと話をつけてくれたの。
何でも縫うつもりよ、これから。

中野 私にも教えてくれるでしょ。

頼子 勿論。

小山 私、次はウエディングドレス縫うもん
ね、ジャンジャン。
中野 ウエディングドレスでオムツのぼせ
てますねん。

小山 オムツー！

中野 他にも習いたい人連れて来ます。

かおり それじゃ、私。

頼子 あ、コーヒーでもいれるわ。中野さん
も小山さんもマロングラッセがあるのよ、
かおりさんのお土産。

小山 (様子をみて)秋はやっぱりマロング
ラッセ！あたくし大好物でございますの。
あれ、虫の声が。

頼子 籠と豆を持ってキッチンへ。
チャイムが鳴る。

かおり はい、どうぞ。先生、お客さんで
す。

君江と理江、西城が来る。

かおり いらっしやいませ。

小山 残念だ！マロングラッセ。

頼子がお菓子箱を開けて持って来る。

頼子 あらお揃いで。(小山と中野に)ほら、
いただいた頂戴。

君江 お邪魔さんやねえ。まあ、かおりさん、
まーあ、きれいになりはって！ファッショ

ンモデルになりはってんとねえ。

かおり いいえ、そんな。

小山と中野、マロングラッセをひとつ
取って、もうひとつおまけにもらって
バックに入れる。

中野・小山 ありがとうございます。

かおり 長いことお世話になりました。失礼
します。

頼子 また顔を見せてくれるんでしょうね。
かおり はい。

君江 まあ、ゆっくりしてくれはったらよろ
しいのに。えらい悪かったわねえ。

かおり、中野と小山に、理江と西城の
ことを囁やく。二人、嬉しそうに笑っ
て去る。

頼子 西城さん、お久しぶり。君江さん、え
らいご気嫌なこと。あ、お茶でも入れます
から。

理江 私も手伝います。

頼子、キッチンに行きながら、理江に

耳うちする。

君江 お茶なんかいいのよ頼子さん、すぐに
失礼するから。あらマロングラッセがある
わ、あ、コーヒーでいいわ、頼子さん。
頼子 (台所から椅子を持ってくる)すみま
せん、椅子が足りなくて。

君江と西城、椅子にかける。

君江 こなんだはすんませなんだ。

頼子 え？なんだった？

君江 杉良太郎！私もうほんまにスーッと
したわ。頭痛にノーション、杉良太郎やわ。

頼子 見直したでしょ、ご主人のこと。

君江 フン、あんなことでごまかしてからに。
康子があとで「本気で言うたんと違ふよ」
ってあやまったけど、死ぬまで忘れられへ
んわ。それに先の人に遠慮しながら入れて
もらうのもいややしね。

頼子 今そんなことを……。

君江 とし君のことね、結婚式に出てもらう
ことにしたわ。あのいけずの京都のおばさ
ん、目えまわさはたらええねんわ。こっ
ちが説明せんでも済むし。

頼子 この人ね、口は悪いけど腹は悪くない人なんです。よろしくお願いします。

西城 はあ。

君江 私、すぐにカーッとしてしまいうけど、本当は話の解る人間ですよ。とし坊のこと、お姉さん夫婦にも失礼やしね、これから先もお世話にならんなんのに。

理江がコーヒーを入れて来る。

理江 尚子先生は？

頼子 弟さんと食事をしてくるって。

君江 あんたの方はいかがでございますか。

頼子 まあまあやわ。

君江 あ顔！ よう言わんわ。

理江 どうしたん？

君江 こっちの話。

頼子 (西城に) この前理江ちゃん、真剣に悩んでたんですよ。

西城 はあ。

理江 お母さんが頑固やからいかんのよ。

君江 あんたこそ誰に似たん。

理江 決ってるでしょ。

頼子 ちよっと……！

君江 あ、ごめん。今日はこの二人が仲直り

したんを報告に来たんやった。理江がえらい心配をかけた言うて……。

頼子 良かったね、理江ちゃん。

君江 理江も、頼子さんやかおりさんみたい手に職もつてくれたら良かったのに。そしたら一生食いはぐれがあらへんのに。何にも出来へんのよ、保母さんなんて。

理江 私にはしたいことがあります。(西城に) ねえ。

西城 あ、うん。

君江 これやから……。

頼子 あんたにはご主人がいたはるやないの。贅沢いいなさんな。

君江 今日なんかでも何にも言わへんのよ。二人が仲直りした言うても「ふうん」でoshiまい。

理江 ホッとしてたわお父さん。

君江 ややこしい話は何でも私に押しつけてからに。京都のおばさんが……ま、いいけど。戦争がなかったら、あんな人と一緒に

なつてへんかったわ。

頼子 君江さん！

君江 ほんまのことやもん。コマシな男はみんな戦争でナンしてもうて、あたりに居らへんかったんやもん。

西城 そ、それは……。

頼子 言いすぎやわねえ。

君江 若い人は知らはらへんの。

理江 もうやめて。

君江 今の時代は私らの犠牲があったからこそ、こんな結構な時代になったんや、それを忘れてもうたら困る言うてますねん。

西城 ば、ばくは戦争を知りません。しかしですわ……。

理江 西城さん。

君江 うちの人なんか同級生半分しか残つてへんのよ。よう生きて戻れたもんやて言うてますわ。

西城 ですからそれはですね、その犠牲を考える時、同時に僕らの国が、お隣の中国や韓国の人らに対してどんなに残酷な侵略をしたか……。

君江 戦争やもん、お互いさまやないの。それにお上の方針に絶対逆らえなんだんやもん、仕様ないやないの。

理江 お母さん！

西城 だから、だからですね、もう二度と繰り返したらあかんと思うんですよ。

頼子 私だって戦争は二度といや。

君江 誰かってそうに決ってるやないの。

西城 みんなそう言うんです、今は。でも本

当にそうである為には、過去の事実をきちんと反省して……。

君江 反省せえですって！

理江 私のお父さん……戦後に物がなかったこと、トラック1台から運送会社をおこしたことはたまに喋るけど……戦争に行った

時のことは一切喋りはらへんわ……それは一体どうしてなんか……お母さん考えてみたことある？

君江 そんなこと……。

理江 私はね、お父さんの心の中に大きな……大きな傷があるんと違つかしらんと思う時があるんよ。

君江 今更そんなこと聞いてどうするの。知らん間に戦争が始つてた。どうしようもあらへんかったわ。なんで若い人らに偉そうに言われんなりませんの。一番力チンと来たんはその事やわ、この前の喧嘩にしても。

西城 いや僕は個人的に責める訳ではなくて……そやけど、知らん間にか、戦争やからお互いさまやというの……人の痛みが解らなすぎます。

頼子 西城さんの言いたいこと、私には解るような気がします。戦争がすんで世の中が

落ちついてきてから、色んなことが解つてきて……その頃には私はいい年をして「お嬢さん」と言われたり、「行かず後家」と言われたり……だから私は、自分の辛いことを言えないんです、言えなかったんです。

理江 言っておばさん、聞かせて。

頼子 ひとりであつたことがまるで悪いことみたい……自分で選んだのなら胸を張って言えるでしょう。でも私は君江さんの言う通り、年末大売出しの籤引きみたい……から籤の方が多かったんです。

君江 気苦労だけの当り籤！

頼子 私にも恋人……らしい人が居りました。従兄弟の友達で、本が好きだった学生さん……白い紙にはんのりと紅をさした位の淡い淡い恋ごころ……聞う前に輸送船が沈没……なんの為に死んだんですか、その人は。

理江 おばさん……。

西城 すみませんでした。

頼子 私は自分の力なんかほんとに小さくて、政治のことなんか考えてもどうしようもないと思うてしまふ人間ですけど……自分の悲しかった事にどうしても頭がいつてしまつて、加害者の立場だったことなんか忘れて

しまい勝ちだったんです。でも、戦争を知らん若い人らがまともに世の中を考えてるのが解つて、とても力強いと思つたんですよ、西城さん。これからはあんな方が背負っていくんですものね。

西城 はい。

理江 今年の夏、西城さんに誘われて、「語りつごう戦争展」というのを見にいったんです。私たち位のお父さんやお母さんが、小さい子ども達の手をつないで一杯来てはったのにびっくりしたわ。子ども達が、しーんとした顔をして、広島の写真を喰いつくように見てるのよ。本場に戦争って、一人ひとりの生命を踏みつけにすることなんやわ。だから、とし君の生命を大切に育てんといかんのやわ。結婚式にとし君を出席させへんのは、「人権を無視してる」なんてえらそうに言うたけど、生命の存在を無視してたんやわ。私もファシストになるとこ

やった。

頼子 理江ちゃんたら……そんな風に考えるのね。若い人ってやっぱり素晴らしいわ。

西城 すんません、何も知らずに言いすぎました。

君江 そらまあ、私かて税金税金でもうけを

取っていかれるのん阿呆臭うて……飛行機
やの軍艦やの作ってはる、とこは、もうけ
てはるやろけど……これで核兵器やなんて
言うたら、世の中おしまいや。考えたら恐
いことやなあ。

西城 はあ、僕もそう思います。

君江 いやまあ、うちの人みたいに黙っては
るよりは……もうやめた、この話。

頼子 理江ちゃん、ありがと。今夜は楽しか
ったわ。

理江 お母さん、これからもこんな話、何回
もするからね。

君江 しんどう子やねえ、この子は。

頼子 理江ちゃん、今日はウエディングドレ
ス持って帰って頂戴ね。西城さん！

頼子、西城に見せてウエディングドレ
スを函に入れる。

西城 まぶしいです、まっさらな……。

君江 あの式の方はね、内輪だけでなるべく
贅沢にならんようにしましょ。

西城 はい。

君江 なあ頼子さん、早いこと紅葉を見に行
きましような、尚子さんと三人で。こない

だ京都のおばさんが、「なんやら女の人だ
けのお墓さんがありますねんと、いっぺん
行ってお見やす」て言うてはったんやけど、
よう名前を聞くお寺なんやけど、思い出し
とくわ。どうしても行ってみたいの、その
お寺に。

頼子 (ウエディングドレスを理江に渡し)
私も着たかったわ、こんなドレス。

君江 着たかったなあ、ほんまに。お父さん、
さっと喜びはるわ。

理江 あとひと月で結婚式なんて、もう胸が
ドキドキよ。

チャイムが鳴る。

頼子、驚く。

頼子 はい、誰かしらん、どうぞ。

坂口修 来る。

坂口修 今晩は。

君江 あらまあ、坂口さん。あ、工務店さん
ね、こちらの都合が良かったらいつでも来
てもらえるそうですもん、この改装。さ、
失礼しましょ。

理江 おやすみなさい。
西城 これからもよろしく。

三人、去る。

坂口修 すみません。

頼子 あ、どうぞ。

坂口修 改装の話、すすんでますのんか。

頼子 いいえ、まだその方は……。

坂口修 うちのと色いろ検討したんですけど
ね……実はうちの店の規模では取次店を出
すほどの内部の設備が……ま、そういう訳
でこの話は……。

頼子 あの私は、私は修理の仕事をまわして
いたただけるだけで充分です。

坂口修 あ、はあ。

頼子 ほんとに……洋裁の仕事は色んな形で
続けるつもりですのよ。

坂口修 それですすね、親父との結婚は……。

頼子 あ、はい。改めてご挨拶とも思っただ
んですけど、まだ時期が……。

坂口修 いやその結婚……親父がこちらに来
る訳ですわ。

頼子 ……はい。

坂口修 ま、結婚してくれはった方がいいか

も解りません、うちのかみさんとうひと

つ気が合わんのですね。公園でハーモニカ吹
いたり、飲み屋でペロペロになっておたく
の事を嘆いたり……どうもその、近所の手
前があると……。

頼子 すみません。

坂口修 僕はね、親父の再婚については反対
はしてませんよ、親父にしてもまだまだ先
があるやろし、おたくもいい人やと思っ
てます。

頼子 ありがとございます。

坂口修 言いくいことなんですけど……
再婚についてはひとつだけお願いがありま
すねん。

頼子 は。

坂口修 うちの工場と家の不動産、まだ親父
の名義になってますねん。それで万一の場
合のですね……。

頼子 はい。

坂口修 おたくの相続分を、あらかじめ……
遺産相続の放棄をすね、一筆書いていた
だきたいと……ま、法律的に言うたら効き
目があるかどうか知りませんですけどです
ね、不動産をすべて私に渡すように是非
親父にすすめてくれませんか。お願いしま

す。

頼子 それは……でも……。

坂口修 出来ませんか？ ほんなら、うちの
家でかみさんや子どもと一緒に暮しはるつ
もりですか？

頼子 そんなこと……。

坂口修 言いくいんです。でもうちみたい
な小さい店は死活問題になります。あとの
喧嘩を先にして、安心してつき合っていた
だきたいんです。

頼子 解ります。私は何も財産の事なんか全
然。でも坂口さんは……お父さんはどう考
えておられますの。

坂口修 僕の目の黒いうちは、屋根瓦一枚や
るもんかと。酒飲んで、まるで欲の固まり
です。欲の固まりになって喚いてます。

頼子 じゃ……ここへは来る気が？

坂口修 いや、結婚はしたいと言うてるんで
す。

頼子 どうすればいいんですか、私は。

坂口修 うちのかみさん、割としっかりして
ますしね。

頼子 ……私、恐いんです。今まで友達と二
人きりで……他人と一緒に暮すなんて……。
坂口修 どうします。どうしたらいいんです、

現実。

頼子 私、ゆ、ゆ、夢をみていたんです、恐
いんです、結婚！

坂口修 ……ほんなら、えらい失礼しました。

坂口修、帰る。

頼子、呆然としているが、やがて入口
の鍵を閉め、キッチンへ。
キッチンで金盞が投げられる音。

チャイムの音が、やかましく鳴る。
頼子、出てくる。

頼子 どなた！ もう店は閉めました！
(声) 頼子！ 頼子さーん。

頼子、戸を開ける。

尚子が酔っ払って入ってくる。

尚子 どなたはなんでしょうが、どなたは。
頼子 あら、ちょっと、あら、ちょっと、危
い。

尚子 こらー、あの男とデートしてたんでし
よ。
頼子 夢なんか破れたわ、たった今！

尚子 私の行くところなくなってしまうた。
頼子 どうしたん。

尚子 卵焼きひとつ作れんような姉さんとの同居は困るって。

頼子 誰が？ え！ 誰が！

尚子 あの子が小学校のときね、風邪をひいて学校を休んでたんよ。たったひとつの卵をね、茹で卵にして食べさせてやったら、「姉ちゃん、僕元気がおったみたいや」って、のこのこ起きて学校へ行ったんよ。あの子の母親だったんよ、私は。それなのに……それなのに……。

尚子、号泣する。
鈴虫の声。

頼子にのみ明りを残して、暗くなる。
音楽（シューベルト「冬の旅」）が入る。

6

頼子 隆夫さん、銃後は私たちが守りますか

ら、どうか安心して下さい。そして、お国の為に立派に闘って下さい。

泉隆夫が舞台の一隅にスポットで浮んでいた。
頼子の明りは消える。

隆夫 お便りありがとうございました。いつもご激励下さり勇気百倍の思いです。小生もすっかり軍人らしくなれました。貴女の女学校も勤労動員となり、戦争に協力なされているとか、銃後のことを思うと心強い限りです。今後お便りを下さる場合には、この部隊の住所宛に送って下さい。小生に異動があっても必ず届きますから。……現在の小生は、自分の人生に何等の迷いも持っておりません。今は悠久の大義に生きるこそこそ、我ら青年の目的であると、信じられるようになりました。……では頼子さん、お元気で。

次の隆夫のセリフは、途中で録音の聲に変わっていく。
セリフの途中から、頼子がスポットで浮ぶ。

7

隆夫 頼子さん、頼子さん、僕はきっと生きて帰ってきます。しかし戦局は益々厳しくなっている。……もし僕が再び帰れなかったら、僕の代りにして欲しいことがあります。僕の代りにシューベルトの歌曲を聞いて欲しい。僕の代りにボナールのやさしい少女の絵を見て欲しい。僕の代りにトルストイを読んで欲しい。もし僕が帰れなかったら……（エコーがかかる）

隆夫の姿が消える。頼子にのみ明りが残っている。
音楽、消える。

紅葉が真紅に燃えている、常寂光寺の庭。

明るい光。
尚子が出てくる。

尚子 ワー、空気がおかしい。来て良かった

ね、頼子さん。

頼子 ……うん。

尚子 あんたこないだ見た夢、繰り返し繰り返し思い出してるんでしょ、シューベルトの君。

頼子 そうよ。夢があんなに重いなんて……。尚子 忘れなさい忘れなさい。私なんかもう弟のことなんか忘れた。

君江が出てくる。

君江 坂口さんのこと？

頼子 会うてないの。会う気もないの。

君江 それでええのよ、それで。坂口さんと二人で仲ようテレビ見て……なんて言うてたけど、あっちが巨人を応援して、こっちが阪神のファンやってみなさいな、お味噌汁ぶっちゃけたらおかしいと思うよ。

頼子 それもそうかもねえ……。

尚子（笑う）とうとう一回もウエディングドレス着ることなしに、お嬢ちゃんのままで終ってしまうんやわ。ま、何回かチャンスはあったけど酔う前にさめてしまうて……だってみんな世帯持ち。

君江 ほら、見なさいな、こんなええとこに

女の碑が。

尚子 ……もみじの葉が分厚い絨毯になって、はっきりと暖かそう。

頼子 冬にはきつとほんわりと雪が積って優しく抱いてくれるんやわ。春には産毛のような苔がびっしりと覆ってくれるんやわ。君江 私が仲間にいれてもらいたかったのに。尚子 だめだめ。あんたが来るとお味噌汁ぶっちゃけられるから、静かに眠ってられへんわ。

君江 羨ましいわ、仲のええお友達と行く先が決ったんやもん。

尚子 私がひと足先に行くからね。

頼子 いややわ、私が先に行かせてもらいます。君江さんは一番あと。

君江 殺生やわ、私だけ宙に浮いてしまう訳？ 阿呆らし！

尚子 そうよ、私たちは一日たりとも男に養ってもらいませんでした。女一人ピッと立って生きぬいてきたんやもん。

頼子 そういじめなさんな。君江さんは知らん間に私を引っぱってきたわね、私と尚子さんをセッットしてくれたのも君江さんだったし。

尚子 ああそうやった、どうも。（ペコリと

おじぎをする）

三人笑う。

頼子 空が突きぬけてる、澄みきって……そうやわ、自分の力で舵を切ってきたんやもん、これでええのやわ、これから。

君江 幾重にも枝が重って、なんときれいなもみじやろ。赤ちゃんがバツとお手を開いたみたいなあ、葉っぱ、いじらしい位やなあ。あつ、康子が来年おめでたらしいわ。

頼子 生れるの？ 良かったね。

君江 また苦労の始まりかも知れんけど。

頼子 まっさらな生命が生れて、まっさらな心が育っていく……そう思うただけで胸の中にあったかい血が流れていくみたい。あんたが居てくれて良かった。君江さん、あんたはやっぱり幸せなんよ。

君江 そうやろか。

頼子 生命の終りを看とってくれる身寄りもなく、生命の流れを継いでくれる子どももなく……何十万もの独身女性が戦争のお蔭でつくられてしまったんよ。女の碑は、ひとつつきりにしないと、未来永劫に。

尚子（碑の文を読んで）「女ひとり生き

ここに平和を希う」か。うん、ここには、
たぐさんの姉妹がいてはるから、淋しゅう
ないね。

三人、明るく笑う。
鐘の音が響く中で、碑の文字スライド
を残し、明りが消えていく。

三人、碑に向って手を合わせる。

鐘の音が響く。

スライドで「女ひとり生き　ここに平
和を希う」の文字が出る。

幕

(一九八七年二月 劇団未来・上演台本)

△作者住所▽

538 大阪市鶴見区諸口6丁目14の3

和田 葉子

尚子 今度戦争を起す奴がいたら、何十万も
の戦争独身の女の魂が、もみじよりも赤い
炎になって呪ってやるから。恐いよう、女
の恨みは。(笑う)

頼子 生命の鎖を断ち切る者とは闘わなくて
はね、若い人らはもつと優しく力強く……。

君江 今度は、理江と西城さんも一緒に来る
わ。

頼子 来年は、そうや赤ちゃんも！

君江 さあ、えらいこっちゃ。理江の結婚式
と康子の出産と……またワヤクチャの始ま
りや。

尚子 頼子さん、私もミシンぐらい踏めるん
よ。

頼子 私たちも再出発ね、いつかこの碑にた
どりつくまで、花よりも紅く燃えますか！

六九号後記

◇六九号は八月五日からはじまる札幌演劇祭にあわせて、発行を早
めました。原稿の締切にうさかったり、来ないかもしれない劇団
通信などを催促しなかったのも、そのためです。そんなわけで、中
身がちょっと瘦せています。

◇頼まれてからとりかかるのが通常原稿ですけど、本誌は一応
定期刊行ですから、半年前、一年前から準備できている原稿もあっ
ていいと思います。時評的論文でない論文、リアリズム演劇史観、
地域演劇再々論、特色ある対談、或は座談会、手間ひまかけたルポ
ルタージュなど、こうした案はこれまでもよく言われたのですけれ
ど、ただそれを実行してくれる人がいないだけなのです。もったい
ない話です。もっとも本誌の原稿料なしということがネックとすれ
ば問題は別です。しかし本号の平田康さんの「英国観劇雑感」など
の御喜捨のあることも、ばくは信じたいのです。

◇今年に入ってから、東にも西にも「作家会議」が疼きはじめまし
た。当り前です。表面だけは、全リ演劇作劇花盛りなのです。東で
は劇団名芸の栗木英章さん、西では劇団いこらの栗原省さんが受付
けの番台に坐ってくれました。何度目かの正直で、本ものにしたいた
いの「作家会議」。私もプロレタリア文学集(新日本出版社)の戯
曲集の第三冊目を、今待っているところです。土壌が一つのはずの
往年のプロレタリア戯曲と全リ演の現在作家たちの作品の、比較・
検討なども、終りに近い老人の仕事の一つになるかもしれぬと思っ
たりしています。

◇七月に入ってからのお知らせによると、札幌演劇フェスティバルの
盛り上りは好調で六月三〇日までの集約で、東会議二一〇名、西会
議五五名、道演集七三名とあり、本州勢を迎える立場としての道演
集の劣勢をくやしがっています。もともと道演集と全リ演共催のこ
の企画は、北海道に活力を「」にあったのでした。いまからでもお
そくありません、応援にかけつけましょう。

◇青年劇場のベレストロイカ(?)。創立以来の劇団製作事業部長
の要職にあった土方与平さんが退任され、後継に近來業績の著ろし
い、入団十一年、気鋭の福島明夫さんが着きました。もっとも土方
さんは劇団の新しい制作部門、小劇場企画や国際交流の分野で働か
られるそうです。見事な体制に祝意を表して書きました。

◇では札幌でアナタ、アナタと。もしかして八月二〇日の西会議の
総会で大阪でふたたびノ

(もも)

演劇会議 六九号

編集委員

発行所

一九八八年八月一日発行
定価 五〇〇円(送料二〇〇円)
荻坂桃彦・こばやしひろし
丸子礼二・仲 武司・藤沢 薫
梶 武史・栗原 省
演劇会議 発行所
〒210 川崎市川崎区渡田四一―一三
はぎ書房内

誌代振込は

電話 〇四四(三三三)〇七七五
川崎信用金庫小田支店 一三三二七
又は郵便振替 横浜 〇・一七二二七